

山村遺跡（第2次）発掘調査報告

2004（平成16）年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

今回発掘調査を行った山村遺跡は、第二名神自動車道にアクセスする県道四日市多度線に伴うものです。近域では、第二名神自動車道に伴う開発が非常に進み多くの遺跡の発掘が行われています。調査対象地は、丘陵斜面にあって四日市の市街地を一望できる場所にあります。我々の先人達もこのような見晴らしのよい所に住処をもち、墓域を造成していったのは、自然の状況に左右されていることもありますが、景観というものも非常に大切にできたものと言えます。我々は、このような自然環境だけでなく遺跡そのものを維持し、後世に伝えていく義務があるのです。

調査地内においては、弥生時代から平安時代にかけての集落や墓域であることが確認できました。周辺の調査の状況を加えて考えられることは、隣域において弥生時代中期頃に集落が営まれ、ほぼ同時期にこの遺跡では方形周溝墓が造営されています。さらに古墳時代の終りごろから奈良時代の前半にかけて方形周溝墓を破壊した後に集落が造られています。時代の変化にともない人間が生活していく上で遺跡が破壊されていっている痕跡がありありと発掘調査において確認できました。今日、技術や科学の進歩によってならか的手段で遺跡が破壊されることなく保存できるすべが早く到来されることを望みたいものです。

なお、今回の報告書が山村遺跡の理解と今後の文化財保護に活用されることを希望し、保護行政に一層のご協力を頂けるようお願いいたします。最後に発掘調査でご協力頂いた、県土整備部道路整備課・四日市建設部・地元各位に感謝の意を表します。

平成16年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例 言

- 1 本書は、三重県四日市市山村町に所在する山村（やまむら）遺跡の第2次発掘調査報告書である。
- 2 調査は、次の体制により実施した。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査第一課 技師 萩原義彦
発掘作業受託 大成エンジニアリング株式会社
- 3 本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第1課及び資料普及グループが行った。発掘調査における遺構写真は、大成エンジニアリング株式会社が担当した。遺物写真は、萩原義彦が撮影した。本書の執筆・編集は萩原義彦が行った。
- 4 本書が対象とした実調査面積3,700㎡である。
- 5 本書が対象とした現地調査期間は、平成11年9月28日から平成12年3月21日である。
- 6 本書で示す方位は、真北を用いた。なお、国土座標第VI系を用いた。この座標北は、0度18分西偏しており、磁北は、6度20分西偏している。
- 7 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。
SB：掘立柱建物 SD：溝 SX：方形周溝墓
SH：竪穴住居 SK：土坑
- 8 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（20版、日本色研事業株式会社、1997年）
- 9 本報告書作成にあたっては、以下の方々から御助言・指導を得ることができた。
伊藤裕偉・竹内英昭・小濱学（斎宮歴史博物館）・水橋公忠（鈴鹿市教育委員会）・
角正芳浩（四日市市教育委員会）・木野本和之（亀山市教育委員会）・大川勝宏・西村美幸
（文化財保護室）・上村安生（県史編纂室）
- 10 本書が扱う発掘調査の原因事業は、平成11年度県道四日市多度線道路整備事業である。
- 11 発掘調査の経費は三重県県土整備部が負担した。
- 12 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本文目次

I 前言	1
1 調査契機	1
2 調査方法	1
3 調査経過	1
4 調査日誌	1
5 文化財保護法等による諸通知	5
II 歴史的位置と地理的環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
III 遺構	14
1 基本的層位及び地形	14
2 検出遺構	14
IV 遺物	71
1 弥生時代	71
2 奈良時代	78
3 平安時代	87
4 鎌倉時代	89
V まとめ	96
1 弥生時代	96
2 奈良時代以降について	97
3 小結	99

挿図目次

第1図 遺跡位置図	第15図 9～11号墓周溝土層断面図
第2図 遺跡地形図	第16図 9～11号墓平面図
第3図 調査区位置図	第17図 9号墓遺物出土状況図
第4図 調査区地区割図	第18図 10号墓遺物出土状況図
第5図 遺構平面図	第19図 10号墓遺物出土状況図
第6図 調査区東壁土層断面図	第20図 11号墓遺物出土状況図
第7図 調査区西壁土層断面図	第21図 11号墓遺物出土状況図
第8図 1号墓平面図・周溝土層断面図	第22図 11号墓遺物出土状況図
第9図 1号墓遺物出土状況図	第23図 14号墓平面・周溝土層断面図
第10図 3号墓遺物出土状況図	第24図 12号墓平面・周溝土層断面図
第11図 2～6号墓平面・周溝土層断面図	第25図 15号墓平面・周溝土層断面図
第12図 7号墓平面図	第26図 13号墓遺物出土状況図
第13図 7号墓遺物出土状況図	第27図 14号墓遺物出土状況図
第14図 8号墓平面図	第28図 15号墓遺物出土状況図

第29図	17号墓遺物出土状況図	第50図	S D 76遺物出土状況図
第30図	16・17・19号墓平面・周溝土層断面図	第51図	S K 90実測図
第31図	18号墓遺物出土状況図	第52図	S K 166実測図
第32図	19号墓遺物出土状況図	第53図	S K 73実測図
第33図	S H 36・42実測図	第54図	出土遺物実測図（1）
第34図	S H 50実測図	第55図	出土遺物実測図（2）
第35図	S H 100・130実測図	第56図	出土遺物実測図（3）
第36図	S H 112遺物出土状況図	第57図	出土遺物実測図（4）
第37図	S H 80・116・121実測図	第58図	出土遺物実測図（5）
第38図	S H 120・161・162実測図	第59図	出土遺物実測図（6）
第39図	S H 176遺物出土状況図	第60図	出土遺物実測図（7）
第40図	S B 163実測図	第61図	出土遺物実測図（8）
第41図	S B 164実測図	第62図	出土遺物実測図（9）
第42図	S B 167・168実測図	第63図	出土遺物実測図（10）
第43図	S B 165実測図	第64図	出土遺物実測図（11）
第44図	S B 169実測図	第65図	出土遺物実測図（12）
第45図	S B 170実測図	第66図	出土遺物実測図（13）
第46図	S B 171実測図	第67図	出土遺物実測図（14）
第47図	S B 172・173・174実測図	第68図	方形周溝墓略図
第48図	S B 175実測図	第69図	竪穴住居略図
第49図	S K 143実測図	第70図	掘立柱建物略図

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	第7表	出土遺物観察表（3）
第2表	遺構一覧表（1）	第8表	出土遺物観察表（4）
第3表	遺構一覧表（2）	第9表	出土遺物観察表（5）
第4表	遺構一覧表（3）	第10表	出土遺物観察表（6）
第5表	出土遺物観察表（1）	第11表	県内方形周溝墓一覧表（1）
第6表	出土遺物観察表（2）	第12表	県内方形周溝墓一覧表（2）

図 版 目 次

図版1	山村遺跡遠景（南西から）・山村遺跡遠景（南から）
図版2	山村遺跡、菟上遺跡、伊坂遺跡遠景（南西から）・菟上遺跡から山村遺跡を望む（北西から）
図版3	調査前風景（北から）・調査前風景（北から）
図版4	調査風景（北から）・調査風景（北から）
図版5	完掘状況（北西から）・完掘状況（南東から）
図版6	1号墓完掘状況（南西から）・方形周溝墓群完掘状況（北西から）
図版7	1号墓遺物出土状況（西から）・1号墓遺物出土状況（北から）

- 図版8 1号墓遺物出土状況(東から)・1号墓遺物出土状況(西から)
- 図版9 3号墓完掘状況(西から)・3号墓遺物出土状況(北から)
- 図版10 3号墓遺物出土状況(北から)・4号墓完掘状況(西から)
- 図版11 5号墓完掘状況(西から)・方形周溝墓群(北から)
- 図版12 方形周溝墓群(北から)・10及び11号墓完掘状況(北から)
- 図版13 9号墓遺物出土状況(北から)・9号墓遺物出土状況(南から)
- 図版14 9号墓遺物出土状況(北から)・10号墓遺物出土状況(西から)
- 図版15 11号墓遺物出土状況(西から)・11号墓遺物出土状況(南から)
- 図版16 11号墓遺物出土状況(南西から)・11号墓遺物出土状況(東から)
- 図版17 11号墓遺物出土状況(東から)・7及び8号墓完掘状況(東から)
- 図版18 8号墓完掘状況(南から)・7号墓遺物出土状況(東から)
- 図版19 12及び13号墓完掘状況(北西から)・13号墓遺物出土状況(北から)
- 図版20 14号墓完掘状況(東から)・14号墓遺物出土状況(南から)
- 図版21 15号墓完掘状況(東から)・15号墓遺物出土状況(南から)
- 図版22 17号墓完掘状況(東から)・17号墓完掘状況(北から)
- 図版23 17号墓遺物出土状況(東から)・17号墓遺物出土状況(南から)
- 図版24 17号墓遺物出土状況(北から)・18号墓遺物出土状況(西から)
- 図版25 S H36完掘状況(西から)・S H42完掘状況(東から)
- 図版26 S H50完掘状況(北から)・S H50周辺完掘状況(北から)
- 図版27 S H80完掘状況(北から)・S H80及び116、121完掘状況(東南から)
- 図版28 S H80カマド跡遺物出土状況(南から)・S H87完掘状況(東から)
- 図版29 S H100及び130完掘状況(北東から)・S H100周辺完掘状況(北東から)
- 図版30 S H112遺物出土状況(北から)・S H149完掘状況(北から)
- 図版31 S H157完掘状況(北から)・S H120、161、162完掘状況(北から)
- 図版32 S H120、161、162完掘状況(東から)・S H176遺物出土状況(北から)
- 図版33 掘立柱建物群完掘状況(北から)・掘立柱建物群完掘状況(東から)
- 図版34 掘立柱建物群完掘状況(北東から)・掘立柱建物群完掘状況(北から)
- 図版35 S B164完掘状況(北から)・S B164完掘状況(東から)
- 図版36 S K143完掘状況(東から)・S D76遺物出土状況(西から)
- 図版37 S K166遺物出土状況(東から)・S K12検出状況(東から)
- 図版38 出土遺物
- 図版39 出土遺物
- 図版40 出土遺物
- 図版41 出土遺物
- 図版42 出土遺物
- 図版43 出土遺物
- 図版44 出土遺物
- 図版45 出土遺物
- 図版46 出土遺物
- 図版47 出土遺物
- 図版48 出土遺物

I 前 言

1 調査契機

現在の県道四日市多度線は、阻険かつ曲折著しい。その為、第二名神自動車道へのアクセスルートとして道路建設が予定された。この開発予定の県道は、周知の遺跡である山村遺跡を通過することが判明し、平成10年6月に試掘調査が行われた。その結果、試掘坑において土坑及び竪穴住居とみられる遺構が存在することが確認され、発掘調査が必要であると判断された。

調査地は、丘陵斜面上で北から南東・南西方向に向かって下る斜面上である。かつては、全面が畑地として耕作が行われていたものの現在は、一部の畑地を残して既に竹林、荒地と化している。

調査区は幅約40m×長さ約100mであり、北西部は谷地形であるため調査範囲外である。調査は、北側から重機によって表土除去を行い、作業の関係上表土掘削を北部分と南部分の2回に分けて行った。

また、調査の途中においてさらに北側に遺構が広がると判断されたため拡張することとなり、現地調査は、平成11年9月28日から開始し、平成12年3月21日に終了した。最終的な調査面積は、約3,700㎡となった。

2 調査方法

発掘調査は、重機によって表土を掘削し、包含層及び遺構掘削には人力によって行った。調査に際しての4mメッシュの地区割については、工事予定地の道路の中心線に沿って地区設定を行い、東西方向にアルファベット（西から東にかけてA、B、C、～）、南北方向に数字（北から南にかけて1、2、3、～）を設定した。各グリッドの名称は、北西隅の杭のナンバーをそのグリッド名とした。

また、途中から北側に拡張した部分については、南北方向の数字を利用して、（南から北へ1、101、102、～）設定した。

遺構番号は、遺物が出土した遺構に限り1番から付けている。柱穴の遺物は、各グリッド毎に1番から付けている（例：A2区Pit1、B6区Pit

8など）。

遺構平面図については、4mメッシュの地区設定を流用して3mメッシュ（1/20）で作成し、基準点は後から付した。方形周溝墓周溝断面図・調査区東西壁面図・掘立柱建物柱穴断面図は、1/20で、遺物出土状況・竪穴住居等の個別図は1/10で作成した。また、遺構・遺物出土の状況に応じてその都度実測図を作成した。

3 調査経過

現地における発掘調査は、平成11年9月28日から重機による表土掘削を行い、10月4日から作業員を投入し、平成12年3月21日に終了した。

また、現地説明会は、平成12年1月29日に行い、約220名の参加を得ることができた。現地作業にあたっては、以下の方々の協力によって無事に調査を終えることができ、心から感謝の念を表したい。

飯田 保、池田敏男、伊藤正一、伊藤なみ江、橋垣みち子、井上裕文、白田 旭、内田大介、片桐かおり、片桐忠司、鎌田真貴子、葛山 清、坂とし子、鈴木三之助、竹内増夫、土井司良、仲 輝久、中山洋之助、奈須美香子、西山拓馬、野呂作利、萩野正吾、波田晶子、服部昭一郎、林 清治、林 直人、樋口 隆、平野太郎、吹原弘規、福島 功、細川 昇、堀本 勉、堀内義隆、三木茂一、美登正春、宮本光子、三輪直美、水谷久子、山本正二、山下三郎、渡辺光夫（五十音順、敬称略）

4 調査日誌

9/10（金）現地で大成エンジニアリング株式会社調査担当者と事前協議（大成：早川・坂野、埋文センター：森川・萩原）。

9/28（火）調査範囲設定を行い、調査前のレベルを確認する。その後、重機による調査区表土掘削開始。約400㎡を掘削した所で終了。

9/29（水）引き続き重機による表土掘削。約600

- m掘削した後に終了。
- 9/30(木) 引き続き重機による表土掘削。約 500 m²掘削した後に終了。トータル約1500 m²。
- 10/1(金) 表土掘削は、午前中にて終了。調査区の地区設定を行う。ベルトコンベアを東側に設置する。
- 10/4(月) 調査区東側に排水溝を掘削する。調査区全面に乾燥防止の為、ブルーシートをかける。遺構検出を行い、後に遺構カードの実測。
- 10/5(火) 作業員の事故防止のために安全大会を実施、終了後作業再開、遺構検出に取り掛かる。SD4が大型の方形周溝墓と判明する。(当初は、古墳と考えていた。上層遺物に須恵器等出土した為。)
- 10/6(水) 遺構検出後、SD4周辺の柱穴、現代耕作溝等の掘削。また、SD4の西側周溝の掘削。
- 10/7(木) 雨天の為、作業中止。プレハブ内にて遺物整理、写真整理を行う。
- 10/8(金) SD4西側周溝掘削、遺構検出後溝・柱穴遺構掘削。作業終了後ブルーシートをかけ、発掘用具の手入れを行う。
- 10/12(火) SD4西側周溝掘削、SD9北側周溝掘削、方形周溝墓の周溝から弥生土器細頸壺出土。調査区全体を安全確保のためのトラロープの縄張りを行う。仮設農道を造設する。(地元の畑の耕作者から苦情を受ける。)
- 10/13(水) SD9南・西側周溝掘削、F及びG13・14・15・16区の遺構検出を行う。SD9南から西側周溝にかけてのコーナー部分に弥生土器細頸壺出土。
- 10/14(木) SD4西側周溝掘削終了、北・南側周溝掘削に取り掛かる。南側周溝において一部がSK12によって削られていることが判明。SD9から南側の溝の掘削開始。
- 10/15(金) 午前中ブルーシートを全面に掛ける。午後から雨天の為、作業中止。
- 10/18(月) SD4北・南側周溝掘削、北側から西側にかけてのコーナー部分で弥生土器細頸壺など出土。SD16東側周溝掘削開始。溝底付近から弥生土器壺出土。SD14北・西側周溝掘削開始。SD4の畦の断面撮影。F7・8・9・10・11区付近遺構検出を行う。
- 10/19(火) 午前、SD16北・東側周溝掘削。SD14南側の方形周溝墓の西側周溝を掘削。午後から雨の為、作業中止。
- 10/20(水) SD16北・東側周溝掘削。(方形周溝墓の四辺のコーナー部分が切れているため、以下SDで番号を付けるように変えた。)SD4の西側に存在する方形周溝墓の北・東側周溝の掘削開始。(SD20・23)SD16東側周溝出土の弥生土器壺の写真撮影。
- 10/21(木) SD20・23の北側に存在する方形周溝墓の東側周溝の掘削開始(SD25)。F・G5～8区遺構検出後掘削。3間×2間の東西棟である総柱建物の柱穴を検出後、以下それらを掘り下げる。
- 10/22(金) SD20・23・25掘削。SD9・14の周溝断面の写真撮影。総柱建物の柱穴掘削。
- 10/25(月) 総柱建物の柱穴掘削。SD16東側周溝断面の写真撮影。E5～16区にかけて遺構検出後掘削開始。
- 10/26(火) SD20・23・25掘削及びSD25の北側周溝のSD31掘削開始。
- 10/27(水) 雨天の為、作業中止。出土遺物のピックアップを行う。図面・写真整理作業。
- 10/28(木) SD4断面図作成(1/10)。C・D6～15区の遺構検出。SD29・30の掘削を行う。
- 10/29(金) 午前、安全大会において現場作業において作業における注意点などを作業員に説明する。午後から昨日検出した遺構掘削にかかる(SD27・29・30・32)。また、遺構検出で不明瞭な地区についても再検出を行う。

- 11/1 (月) 雨天の為、作業中止。出土遺物のピックアップを行う。図面・写真整理作業。
- 11/2 (火) 10月中に検出した遺構の掘削後、A・B 7～16区の遺構検出を行う。SD 16断面図作成(1/10)。重機によって調査区から排土を移動させる。
- 11/4 (木) 重機によって南半分の表土掘削開始。先日検出した遺構掘削。竪穴住居をはじめとした溝など取り掛かる。また、南半分の調査区東側に排水溝を掘削する。
- 11/5 (金) 重機による南半分の表土掘削が終了。引き続き調査区東側に排水溝を掘削する。A 8区にある竪穴住居掘削。SD 16の東側に出土している弥生土器壺の実測(1/10)。その他の検出遺構掘削。
- 11/8 (月) B 15・16に検出した竪穴住居掘削。北半分の掘り残した遺構の掘削、南半分の地区設定及び表土掘削土量計算後、遺構検出に取りかかる。SD 9・16の断面図作成(1/10)。
- 11/9 (火) B 15・16に検出したSH 50の竪穴住居掘削。SD 23の遺物写真撮影。終了後実測にかかる。北半分の掘り残した遺構の掘削・南半分の遺構検出に取りかかる。
- 11/10 (水) SH 50の掘削。A～J 16～19区の遺構検出を行うかなり不明瞭なため、何度も行う。竪穴住居と方形周溝墓の重複と考えられる。非常にわかりにくい。
- 11/11 (木) A 11・12区の竪穴住居掘削。各方形周溝墓の遺物・断面撮影。A～J 16～19区の遺構検出。
- 11/12 (金) 雨天の為、作業中止。出土遺物のピックアップを行う。図面・写真整理作業。
- 11/15 (月) ベルトコンベアーの手入れ。A～J 16～19区の遺構検出。午後から雨天の為、作業中止。
- 11/16 (火) 各方形周溝墓の遺物・断面撮影。A～J 16～21区の遺構検出。検出遺構の掘削。方形周溝墓の配列が異なっていることが判明。小規模なものが周溝を利用して繋ぎ合わせになったとも考えられる。時間的な要因であろうか。
- 11/17 (水) 実測が終了した方形周溝墓の遺物の取り上げる。変わらず不明瞭なA～J 16～21区の遺構検出を再度行う。SD 34の出土遺物の写真撮影。
- 11/18 (木) 不明瞭なA～J 16～21区の遺構検出を再度行う。明確になった遺構を中心に掘削を行う。SD 29・30の断面撮影。A～E 16～20区にかけての柱穴掘削を行う。SD 66の掘削作業を行う。SD 66は、西方向に90°屈曲する。また、SD 16も途切れずに西方向に折れ曲がるということが判明する。コーナー近くで弥生土器壺が出土する。さらに、SD 29・SD 66の間に空間が存在している。何らかの出入口とも考えられる。
- 11/19 (金) SH 50の下層に方形周溝墓の東側周溝が存在することが判明、かなり大きな方形周溝墓の周溝とみられ、SD 4と同規模と見られる。A～E 16～20区にかけての柱穴掘削を行う。SD 66の東側に伸びて取りつくSD 65掘削。A～J 16～21区の遺構検出を行いかんりの遺構が判明する。大規模な方形周溝墓が乱立したものと変化していると考えられる。A～C 23～26区にかけての遺構検出。遺構は、かなり希薄になってきている。しかし、方形周溝墓らしい溝が存在する。
- 11/22 (月) 遺構掘削作業を一時中止して、SDの写真撮影及び断面の実測(1/10)、竪穴住居の平面・断面図(1/10)、遺物出土状況図・立面図(1/10)の作成を行う。
- 11/24 (水) 調査区の南側(A～E 15～20)に向かって遺構検出を行う。遺構検出後、遺構掘削を行う。
- 11/25 (木) 前日に行った作業を引き続き行う。22

- 日に実測終了した遺物の取り上げ作業を行う。
- 11/26・29 (金・月) 引き続き遺構検出・掘削を行う。
- 11/30 (火) 作業員向けの安全大会を実施する。大会終了後、遺構・遺物の実測作業と遺構検出・掘削を行う。
- 12/1 (水) 調査区の北側に残っていた立木の伐採を行う。その間に遺構・遺物の実測作業を行う。
- 12/2 (木) 調査区の南側(A～E15～20)に向かって遺構検出を再度行う。検出しきれなかった遺構について改めて遺構検出後、掘削を行う。
- 12/3 (金) 調査区の南側(A～E15～20)の遺構掘削(竪穴住居跡、土坑、柱穴)。竪穴住居平面・断面図作成。方形周溝墓の断面図作成。調査区北側の部分拡張を行う。
- 12/6 (月) 調査区北側の部分拡張を行う。掘立柱建物跡の清掃後写真撮影。調査区の南側(A～E15～20)の遺構掘削(竪穴住居跡、土坑、柱穴)。竪穴住居平面・断面図作成。
- 12/7 (火) 調査区北側の部分拡張を行う。F19・20区の竪穴住居(SH100)、B21・22区竪穴住居(SH80)掘削。方形周溝墓の個別写真撮影。竪穴住居平面・断面図作成。
- 12/8 (水) 方形周溝墓の個別写真撮影。E・F・G19～22区の溝・柱穴掘削。北側部分拡張区の遺構検出。方形周溝墓が続くことが判明。
- 12/9 (木) E・F・G21～24区にかけて遺構検出後、掘削。
- 12/10 (金) SH80の隣の竪穴住居掘削。D・E・F22～24区にかけて遺構検出後、竪穴住居が3棟重なり合うことが判明する。随時掘削開始。
- 12/13 (月) 引き続き先週の出土遺構の掘削。北側から順番に遺構清掃後、個別写真撮影を行う。また、遺物出土状況の実測等を行う。
- 12/14 (火) 引き続き前日からの作業を行う。SH50の完掘状況、方形周溝墓周溝内からの遺物出土状況の写真撮影。SH118の掘削、SD31の遺物取り上げなどを行う。
- 12/15 (水) SH42完掘状況の写真撮影。SH94・118、SD47・76・123などの断面実測。A～J24～26にかけて遺構検出及び遺構掘削。
- 12/16 (木) SH100などの断面実測を行う。SH112掘削作業。SH112からの遺物多く、竪穴住居出土遺物の資料としては良好。
- 12/17 (金) SH80・94・100の平面図作成、SD29・76断面実測。調査区北側の遺構検出及び遺構掘削。北側においても方形周溝墓が存在し調査区内全域において方形周溝墓が存在することが判明、弥生時代における墓域とみられる。
- 12/20 (月) 一部から全景写真撮影のための清掃を開始する。また、実測できていない個所の実測及び個別写真撮影。調査区北側の遺構検出・掘削を行う。
- 12/21 (火) 遺構清掃。
- 12/22 (水) 全景写真撮影(北から中心に行う。及び方形周溝墓の列ごとの単位で写真撮影を行う)。
- 12/24・27・28 (金・月・火) 写真撮影を引き続き行う。終了後、調査区保護のためブルーシートを全面に掛ける。
- 1/5～7 (水～金) 遺物出土状況撮影・出土遺物実測・調査区西・東壁精査。
- 1/11 (火) 出土遺物実測後、遺物の取り上げを行う。平面実測のために3mメッシュの準備を行う。
- 1/12 (水) 実測のために3mメッシュの地区割を行う。また、その作業と併行して土量の計算を行う。午後から雨のため作業中止。
- 1/13 (木) 雨の為、作業中止

- 1/14(金) 3mメッシュの地区設定。できるところから順次実測開始。できた平面図にレベルを入れる作業を行う。
- 1/17~21(月~金) 平面図作成(1/20)。
- 1/24~28(月~金) 平面図作成及びレベル入れる作業を行う。また、現地説明会の為に準備作業を行う。歩道整備及び遺構整備、さらに調査区外の順路、展示用遺物の整理作業を行う。
- 1/29(土) 現地説明会。約220名もの参加者あり、近隣での他の遺跡の現地説明会にも多くの参加者を得る。
- 1/31(月) 平面図作成及びレベルを入れる作業。掘立柱建物の柱穴の半裁断面作成。
- 2/1(火) 平面図にレベルを入れる作業を行う。掘立柱建物の柱穴の半裁作業。
- 2/2~4(水~金) 調査区全体・方形周溝墓のコンタ図作成。
- 2/7・8(月・火) 方形周溝墓のコンタ図作成。
- 2/9・10(水・木) 柱穴半裁後断面図作成。
- 2/14~17(月~木) 柱穴半裁後断面図作成。
- 2/18(金) S H80の完掘状況の写真撮影。
- 2/21(月) 写真撮影(撮り忘れた箇所)、柱穴半裁後断面図作成。
- 2/22(火) 柱穴半裁後断面図作成。
- 2/23(水) 西壁断面図作成。柱穴半裁後断面図作成。
- 2/24(木) 竪穴住居の重複部分の掘り下げ及び写真撮影・実測を行う。今日で現場作業打ち切り。
- 2/25(金) 今日から遺物整理作業及び図面・写真等の整理作業を実施する。抜け落ちた部分の追加。
- 2/28~3/3(月~金) 図面・写真等の整理作業。
- 3/6~10(月~金) 図面・写真等の整理作業。
- 3/13~17(月~金) 図面・写真等の整理作業。
- 3/21(火) 大成エンジニアリングから図面・写真等の成果品納品等を行う。

以下によって行っている。

- ・法第57条の3第1項(文化庁長官宛)
平成11年7月16日付道整第198号(県知事通知)
- ・法第98条の2第1項(文化庁長官宛)
平成11年10月6日付教理第274号(県教育長宛)
- ・遺失物法第1条第1項の規定にかかる文化財発見・認定通知
平成12年5月26日付教生第229-5号(四日市北警察署宛)
- 平成12年5月26日付教理第229-5号(県教育長通知)

5 文化財保護法等による諸通知

文化財保護法(以下、法)等にかかる諸通知は、

II 地理的環境と歴史的環境

1 地理的環境

山村遺跡(1)の所在する四日市市山村町は、紀伊半島の東端にある伊勢平野の北部に位置し、東は伊勢湾である。行政区分上での四日市市は、西側で三重郡菟野町及び滋賀県、北側は東から三重郡川越町・朝日町・桑名市・員弁郡東員町・大安町、南側は三重郡桶町・鈴鹿市と接している。

四日市市周辺の地形は、鈴鹿山脈を源とする朝明・海蔵・三滝・内部・鈴鹿川によって形成された沖積平野と丘陵地帯である。

今回発掘調査を行った山村遺跡は、四日市市の北東部山村町字西谷・西平子に所在する。遺跡の立地状況は、朝明川下流の左岸、朝明丘陵の南縁部分の丘陵尾根上である。調査地の標高は、約31～37mである。

2 歴史的環境

四日市市を含め周辺の歴史的な環境を時代順においてみていきたい。旧石器時代の遺跡数は、僅かであるが確認されている。鈴鹿市とほぼ隣接し、北側に内部川の大きく広がる沖積地を望む台地上で宮ノ上A遺跡(2)があり、ナイフ形石器が採集されている。近域の鈴鹿市域側には南へ1kmほど離れた台

地上には富士山遺跡(3)・境谷遺跡(4)・寺山遺跡(5)・国分西ノ岡遺跡(6)・茶山遺跡(7)といった遺跡が多く所在しており、この地域に濃密に分布していることが窺える。四日市市南西部の内部川と鎌谷川に挟まれた扇状地の台地に内戸谷B遺跡(8)があり、ナイフ形石器が採集されている。西山小割遺跡(9)は同じ台地上に立地し、石核やチャート剥片が採集されている。これら知られていない遺跡のほとんどが発掘調査されていないため不明瞭な部分が残るものの、この時期に該当する遺跡がやや偏って集中的に存在している。現段階では台地上の遺跡が主であり、今後の発掘調査に期待したい。

縄文時代に入ると発掘調査によって確認されている遺跡があり、旧石器時代と比較してやや良好である。まず、草創期では有茎尖頭器が採集されている東北山A遺跡(10)や中尾山遺跡(11)がある。発掘調査例では内部川中流域左岸の台地上の一色山遺跡(12)から出土している。遺物では押型土器や石製品、遺構では竅穴住居かもしれないが址を検出している。有茎尖頭器は単独で出土する例も他にあり、この時期の生活状況を窺える。

早期から前期にかけて四日市市域では不明であるが四日市の南西方向の亀山市における大鼻遺跡で早

1	山村遺跡	13	西ヶ広遺跡	25	上畑遺跡	37	貝野遺跡
2	宮ノ上A遺跡	14	土丹遺跡	26	五百山遺跡	38	中村遺跡
3	富士山遺跡	15	大谷遺跡	27	辻子遺跡	39	智積庵寺
4	境谷遺跡	16	永井遺跡	28	金塚遺跡	40	大膳寺跡
5	寺山遺跡	17	重地山銅鏢出土地	29	城ノ谷遺跡	41	繩生庵寺
6	国分西ノ岡遺跡	18	丸岡遺跡	30	志氏神社古墳	42	額田庵寺
7	茶山遺跡	19	平戸山遺跡	31	高塚古墳	43	小杉大谷窯跡
8	内戸谷B遺跡	20	八幡山遺跡	32	持光寺山古墳群	44	岡山古窯跡群
9	西山小割遺跡	21	菟上遺跡	33	広古墳群A・B支群	45	伊坂城跡
10	東北山A遺跡	22	山奥遺跡	34	広永横穴墓	46	赤堀城跡
11	中尾山遺跡	23	東日野遺跡	35	岡山古墳	47	茂福城跡
12	一色山遺跡	24	狐穴遺跡	36	上野遺跡		

第1表 周辺遺跡一覧表



第1図 遺跡位置図 (1/50,000) 『この地図は、国土地理院発行「四日市」(桑名) (1/25,000) を掲載したものである」
(承認番号 平15部復、第254号)



第2図 遺跡地形図 (1/5,000)

期の竪穴住居とキ址が確認されており北勢地域で最古であろうと考えられる。

中期に至ると発掘調査例も増えてくる。昭和44年からの東名阪自動車道の建設工事に伴って発掘調査が行われた西ヶ広遺跡(13)がある。西ヶ広遺跡は、市内北部を東流する朝明川中流域の左岸の舌状に張り出した台地上に立地している。この時期以外の遺構も数多くあるが中期後葉の縄文土器が土坑から出土している。

市域外でみてみると北勢町川向遺跡、鈴鹿市東庄内B遺跡、北一色遺跡、西川遺跡、西条遺跡、亀山市大垣内遺跡において竪穴住居が検出されており、集落が各地域に形成されていく状況が窺える。

晩期での調査例では、三滝川中流域右岸で沖積地に立地する土丹遺跡(14)がある。遺構は土坑があり、遺物は甕形土器で馬見塚式に相当する。土丹遺跡を除いて台地上での遺跡がほとんどであり、晩期に至って沖積地に遺跡が存在し始める。

弥生時代に入って前期の遺跡は非常に少ない。しかしながら発掘調査によって判明している中で特に有名である大谷遺跡(15)・永井遺跡(16)がある。この両遺跡は、海蔵川と三滝川に挟まれた生糸丘陵の北側と南側に所在している。共に低湿地を正面に有しており食料生産に向けた環境にあったとみられる。大谷遺跡は、昭和41・42年に四日市市教育委員会によって発掘調査が行われている。遺跡の中心時期は、弥生時代前期から後期・古墳時代後期にわたる集落跡であることが判明した。この遺跡では環壕とみられる溝があり、住居址も確認されている。また、遺物も多い。もう一方の永井遺跡では、前期以降の遺構も検出されているが弧状に巡る6条の溝があり、環壕を彷彿とさせるがやや浅い。この2遺跡以外でも前期の遺物を採集されたと伝えられ今後、調査例が増えもおおきくはないであろう。

中期には、伊坂町重地山銅鑛出土地(17)、丸岡遺跡(18)、永井遺跡、平戸山遺跡(19)、八幡山遺跡(20)などがある。丸岡遺跡は、朝明川左岸の台地上に立地している。昭和46年に試掘調査が行われた。中期の壺等が出土している。永井遺跡では、前期だけでなく中期も含む遺跡である中期中葉の溝、中期後葉の方形周溝墓を検出しており、それら遺構

に伴って遺物も出土している。平戸山遺跡は、三滝川右岸の丘陵上に立地している。昭和59年に発掘調査が行われている。遺構は土坑だけであるが、遺物は中期後葉の良好な資料が出土している。

八幡山遺跡は、後述する五百山遺跡に隣接するものの谷を挟んだ地形によって断絶した遺跡である。この遺跡の範囲内に八幡塚古墳が存在したが昭和49年の発掘調査後に消滅した。昭和58年に遺跡範囲確認調査が行われ、竪穴住居が確認されている。遺物には、中期後葉とみられるものがあり、この頃から営まれた集落であろう。

なお、第2名神自動車道に関連する発掘調査によって菟上遺跡(21)では中期中葉から後葉にかけての集落跡が確認されている。竪穴住居及び掘立柱建物が多く検出されており当遺跡と関りの深い遺跡とみて間違いなからう。

中期として一括りで述べたが発掘調査では、中期中葉から後葉にかけての遺跡が主を占める。その一方で中期前葉の遺跡を確認することができず、中期全体を通じての状況を窺い知れる遺跡は、少ない。

後期にはいと一気に遺跡数は増加し、調査例も多い。西ヶ広遺跡、山奥遺跡(22)、大谷遺跡、永井遺跡、東日野遺跡(23)、狐穴遺跡(24)、上畑遺跡(25)、五百山遺跡(26)、菟上遺跡、辻子遺跡(27)、金塚遺跡(28)、城ノ谷遺跡(29)などが存在する。

西ヶ広遺跡は、調査によって後期の竪穴住居が検出され、遺物も多く出土し、かなりの大規模な集落であることが判明した。

山奥遺跡は、国道1号線と東名阪自動車道四日市東インターを結ぶ県道富田山城線と大矢知と垂坂を結ぶ市道との交差点から西側の緩やかな斜面に位置している。昭和52・53年からの発掘調査によって弥生時代後期及び古墳時代後期の集落であることが判明した。その後においても発掘調査が継続され、大規模な集落であることや時期が限定されることが判明している。

大谷遺跡では、前期と比較して遺物量は少ないが検出した竪穴住居等の遺構は、永井遺跡よりも明確に残る。しかし、大谷遺跡には、中期とみられる遺構を検出されていない。永井遺跡においても竪穴住居が確認されている。しかし、全体的に遺構は浅い。

後期前葉とみられる遺物が出土している。

東日野遺跡は、市の西方の台地上に立地している。昭和36年に発掘調査が行われている。調査によって竪穴住居等が確認されている。遺物は、後期後葉とみられるものである。

狐穴遺跡は、後述する五百山遺跡の谷一つ隔てた南側に所在する遺跡である。昭和58年に遺跡範囲確認調査が行われ、後期前葉とみられる竪穴住居を検出している。また、遺物には中期にまで遡りえるものもあり中期からの遺跡とも考えられる。

上如遺跡は、水井遺跡のすぐそばにある遺跡で昭和42年に発掘調査が行われ後期の竪穴住居が確認されている。水井遺跡においても後期の集落址があり関連性について考慮すべきであろう。

五百山遺跡は、かなりの部分が破壊されてしまっており不明な部分が多い。しかし、多くの遺物が採集されており後期前葉にかけての遺跡であることが窺える。

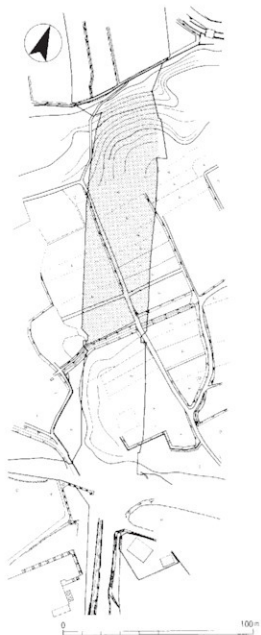
菟上遺跡・辻子遺跡・金塚遺跡・城ノ谷遺跡は、近畿自動車道名古屋神戸線に伴う発掘調査によるものである。とりわけ金塚遺跡では、竪穴住居から銅鐸片が出土しており、伊坂銅鐸との関連性について貴重な資料をえることができた。また、墳墓も確認されている。後期について言えることは、ほぼ市内全域にわたって展開している状況が窺える。この時期は、全体的に多くの集落が海に面する丘陵平坦部に立地しており、次代に続く要素を内包していると考えられる。

古墳時代前期では、この地域を代表する前期古墳には、市内に志氏神社古墳(30)がある。志氏神社古墳は、社務所によって前方部分が削平されているものの、内行花文鏡・碧玉製車輪石・硬玉製勾玉・碧玉製区管玉・ガラス製小玉を出土した前方後円墳である。かつて陪塚が所在したと伝わる。『三重県三重郡三重村考古誌考』によると四日市市内西坂部町御館に前方後円墳が存在したと伝えられる。桑名市で高塚山古墳(31)や三角縁神獣鏡を出土したとみられる古墳もあり、前期古墳は、実際もっと多く存在していたと考えてよかろう。

市内において確認できる古墳は、175基を数える。そのほとんどが後期古墳であって、墳形も円墳であ

るものがほとんどである。持光寺山古墳群(32)の6号墳、広古墳群A支群(33)の1号墳から3号墳、広古墳群B支群の1号墳が方墳であり、これら古墳の被葬者は、他の古墳の被葬者と同一視すべきでなかろう。また、古墳が造営される一方で横穴墓が造営される。広永横穴墓(34)・金塚横穴墓などが調査によって判明している。さらに、山村遺跡の直ぐ南側には岡山古墳(35)が存在している。2基存在したと言われるが現状では1基だけである。

一方、前期の集落跡としては、不明な部分が多い。上野遺跡(36)、辻子遺跡で竪穴住居が確認されてい



第3図 調査区位置図(1/2,000)

るのみで弥生時代後期から引く続くべき集落の様相は、今後の課題である。古墳時代中期以降の様相についても判明していることは、微々たるものである。集落を形成する場所を台地や丘陵から低地に移したためであろうか。

奈良・平安時代では、かなり大規模な遺跡が目を引き、古墳時代後期とは変わって異なる様相である。大規模な遺跡として西ヶ広遺跡がある。この遺跡では奈良時代の掘立柱建物、竪穴住居など数多くの遺構が検出されている。三面庇付きの掘立柱建物棟方向を揃えて建てられており何らかの規格性を持っていたことが窺える。この遺跡は、朝明部衙跡とも想定されるほどの大規模さである。遺物においても円面硯や墨書土器などが出土している。

昭和43年に発掘調査された貝野遺跡^③(37)では、7世紀後半から8世紀にかけての竪穴住居と掘立柱建物を数多く検出している。掘立柱建物の棟方向は、揃えられていない。西ヶ広遺跡と異なるものを有しており、西ヶ広遺跡が公的であるとこの貝野遺跡は、一般的集落ではなかろうか。遺物は、須恵器から灰軸陶器まで出土している。

永井遺跡でも奈良時代の竪穴住居、奈良～平安時代の掘立柱建物を検出しており、同様にこの時代の集落と考えてよさそう。

昭和53年に発掘調査された中村遺跡^④(38)では奈良時代の掘立柱建物^⑤が検出されている。遺構については、貝野遺跡と同様の状況である。遺物も須恵器から灰軸陶器、製塩土器まで出土している。

今回調査した山村遺跡は、貝野遺跡や中村遺跡と同様の様相を示す。とくに中村遺跡は、製塩土器等が出土している。

四日市市内での寺院跡では、智積庵寺^⑥(39)及び大膳寺跡^⑦(40)があり発掘調査が行われている。智積庵寺は、金堂・講堂・僧房跡などの建物や瓦類や?仏などが出土しており7世紀後半に建立されたと思われる。大膳寺跡は、瓦当文様から平安時代の建立であろうとみられる。また、隣接する朝日町の純生庵寺^⑧(41)や桑名市の額田庵寺^⑨(42)がとりわけ著名である。両寺院とも同時期頃の建立とみられており、額田庵寺は、伽藍配置が法隆寺と同様であることが発掘調査で判明している。

次に生産に係わる遺跡についてもみていきたい。とりわけ伊勢湾に向かって東流する河川によって開かれた丘陵斜面に十七基に及ぶ古窯跡がある。中でも岡山丘陵と垂坂山丘陵に所在するものが多い。垂坂山丘陵には、小杉大谷窯跡^⑩(43)がある。この窯跡は、久居市久居古窯跡^⑪(五世紀後半)に次いで古く考えられ、五世紀末から六世紀初頭にかけて操業される。ここでは須恵器・円筒埴輪が生産されている。八世紀以降は、岡山丘陵にある窯跡が主になる。岡山古窯跡群^⑫(1～7号窯)(44)は、昭和35年から相次いで発掘調査が行われており、山村遺跡出土の須恵器と非常に似通ったものもありこの窯跡から供給されていた可能性が高い。また、

また、この地域は古代官道の東海道が存在した。西ヶ広遺跡と菟上遺跡間の南北方向の谷は、河曲駅家から朝明郡家を経て榎撫駅家に向かう東海道の可能性を持っている。

鎌倉～室町時代にかけては、この時期を代表する遺物である陶器椀(山茶椀)が確認されている遺跡が多い反面、集落について判明していることが少ない。溝・土坑・柱穴等の遺構を検出している遺跡は、多いが明確に掘立柱建物を確認しているのは、辻子遺跡、上野遺跡を含めても少ない。しかし、集落に対して城館跡は、数多い。そのほとんどは、比高差の小さい丘陵や段丘あるいは台地の縁辺部に立地し、自然の地形を利用して築かれている。調査されているものには、伊坂城跡^⑬(45)、広永城跡^⑭、赤堀城跡^⑮(46)、茂福城跡^⑯(47)、東貝町山田城跡などがある。近世に至って、この地域は天領・大名領・旗本領が複雑に入り組んで変遷し幕末を迎える。

[註]

①『四日市市史』第二巻 史料編考古I(四日市市 1988年) P 9

②『鈴鹿市遺跡地図』(鈴鹿市教育委員会 1987年)

③註①と同じ P 3

④註①と同じ P 4

⑤註①と同じ P 22

⑥註①と同じ P 47

⑦小玉道明・下村登良男・山澤義貴・谷本誠次・井上光夫「一色山遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重

- 県教育委員会 1970年) P19
 註①と同じ P51
- ⑧山田猛ほか『大鼻遺跡』(三重県埋蔵文化財センター 1994年)
- ⑨小玉道明・下村登良男・山澤義貴・谷本鋭次・井上光夫
 「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会 1970年) P92
 註①と同じ P19
- ⑩春日井恒・山崎恒成・松本寛『川向遺跡発掘調査報告』
 (北勢町教育委員会 1993年)
- ⑪小玉道明・下村登良男・山澤義貴・谷本鋭次・井上光夫
 「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』
 (三重県教育委員会 1970年) P45
- ⑫「第一章 郷土のあけぼの—狩猟から農耕へ—」(『鈴鹿市史』第一巻 鈴鹿市教育委員会 1980年) P59
- ⑬中森成行「西川遺跡」『郡山遺跡群発掘調査報告1』(鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会 1983年) P33
- ⑭倉田直純・服部芳人・穂積裕昌「西条遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告—第1分冊—』(三重県埋蔵文化財センター 1990年) P111
- ⑮亀山隆「大垣内古墳発掘調査報告書I」(亀山市教育委員会 1997年) P33 縄土器実測図
- ⑯小玉道明・下村登良男・山澤義貴・谷本鋭次・井上光夫
 「智積庵寺・土丹遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会 1970年) P148
 註①と同じ P25
- ⑰小玉道明「大谷遺跡発掘調査報告—A地区・B地区—」
 (四日市市教育委員会 1967年)
 小玉道明「大谷遺跡発掘調査報告II—C地区の遺構—」
 (四日市市教育委員会 1976年)
 註①と同じ P106
- ⑱小玉道明・伊藤洋ほか「永井遺跡発掘調査報告」(四日市市教育委員会 1973年)
 註①と同じ P121
- ⑲東郷遺跡・森ヶ山A・B遺跡において前期土器が採集されている。前期新段階のものであろう。
 註①と同じ 東郷遺跡 P160。
 森ヶ山A・B遺跡 P164。
- ⑳註①と同じ P83
- ㉑註①と同じ P67
- ㉒註①と同じ P132
- ㉓小玉道明ほか「八幡塚古墳発掘調査報告」(四日市市教育委員会 1975年)
 「八幡山遺跡他範圍確認発掘調査」(四日市市教育委員会 1984年)
 註①と同じ P177
- ㉔城吉基・穂積裕昌・尾野公忠・田中美徳「菟上遺跡」
 「近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」(三重県埋蔵文化財センター 2000年)
 船越重伸・穂積裕昌・水橋公忠・水谷裕康・赤松一秀・田中美徳「菟上遺跡」近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」(三重県埋蔵文化財センター 2001年)
- ㉕註①と同じ P96
- ㉖小玉道明「東日野弥生住居址群・岡古室址群第1号室」(四日市市教育委員会・四日市遺跡を守る会 1966年)
 註①と同じ P140
- ㉗「八幡山遺跡他範圍確認発掘調査」(四日市市教育委員会 1984年)
 註①と同じ P185
- ㉘小玉道明「上畑住居址群発掘調査概要」(四日市市教育委員会 1967年)
 小玉道明「三重県四日市市上畑遺跡」『日本考古学年報二〇』(1972年)
 註①と同じ P120
- ㉙註①と同じ P180
- ㉚山本義浩・倉田文美「辻子遺跡」近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」(三重県埋蔵文化財センター 1999年)
 倉田文美・田中久生「辻子遺跡」近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」(三重県埋蔵文化財センター 2000年)
- ㉛森川幸雄・服部芳人・水橋公忠・倉田文美・角正芳浩・松下孝幸「金塚遺跡・金塚横穴墓・山村遺跡発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター 2002年)
- ㉜田中久生「城ノ谷遺跡」近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」(三重県埋蔵文化財センター 2000年)
- ㉝註①と同じ P224
 古墳そのものは、市指定史跡である。
 遺物は、市指定有形文化財である。

- 96 鈴木敏雄『三重縣三重郡三重村考古誌考』「字御館野における古墳「大塚」並に古墳群」の項において前方後円墳1基と円墳10数基が図に示されており、前方後円墳が存在していた。
- 97 『桑名市史』本編（桑名市教育委員会 1987年）P26
- 98 小玉道明・早川裕己『四日市の後期古墳』（四日市市教育委員会 1974年）
註①と同じ P195以降
持光寺山古墳群6号墳 P202
広古墳群A・B支群 P205
- 99 田中久生『広水城跡・古墳群・横穴墓群』『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター 1999年）
- 100 森川幸雄・服部芳人・水橋公忠・倉田文美・角正芳浩・松下孝幸『金塚遺跡・金塚横穴墓・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2002年）
- 101 註①と同じ P213
- 102 春日井恒・花井千幸『上野遺跡』（四日市市道跡調査会 1991年）
春日井恒『上野遺跡2』（四日市市道跡調査会 1992年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P382
- 103 林博通『貝野遺跡—古代集落址の調査報告』（四日市市教育委員会 1969年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P96
- 104 『中村遺跡』（四日市市教育委員会 1979年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P59
- 105 『智積庵寺発掘調査報告書』（四日市市教育委員会 1968年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P296
- 106 『大勝寺跡』（四日市市教育委員会 1978～82年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P302
- 107 早川裕己『纏生庵寺発掘調査報告』（朝日町教育委員会 1988年）
早川裕己『纏生庵寺範囲確認調査報告Ⅰ』（朝日町教育委員会 1988年）
早川裕己『纏生庵寺範囲確認調査報告Ⅱ』（朝日町教育委員会 1988年）
- 108 小玉道明『額田庵寺発掘調査概要』（桑名市博物館紀要 第1号）（桑名市博物館 1987年）
- 109 小玉道明『小杉大谷古窯址』（四日市市教育委員会 1974年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P275
- 110 小玉道明・山澤義貴『久居古窯址群発掘調査報告』（久居古窯址群発掘調査団 1968年）
『久居市史』上巻（久居市史編纂委員会 1972年）P42
- 111 山澤義貴『岡山古窯址群第一号窯』（四日市市教育委員会 1966年）
小玉道明・山澤義貴『岡山古窯址群発掘調査報告』（四日市市教育委員会 1971年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P250
- 112 木野本和之・服部芳人『伊坂城跡』『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）
竹田憲治『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P328
- 113 田中久生『広水城跡・古墳群・横穴墓群』『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター 1999年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P331
- 114 北野保・坂本秀『赤堀城跡』（四日市市教育委員会 1986年）
『赤堀城跡2』（四日市市道跡調査会 1989年）
『赤堀城跡3』（四日市市道跡調査会 1993年）
荒木昌俊『赤堀城跡4』（四日市市道跡調査会 2000年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P352
- 115 『茂福城跡』（四日市市茂福城跡調査会 1978年）
『四日市市史』第三卷 史料編考古Ⅱ（四日市市 1993年）P337
- 116 松本寛・久志本鉄也『山田城跡発掘調査報告』（東員町教育委員会 1984年）

Ⅲ 遺 構

1 基本的層位及び地形

今回の調査対象地は朝明川左岸の台地上から南西方向に張り出す緩やかな斜面で、調査地の標高は31～37mである。山村遺跡は標高30～50mに及ぶ台地全体を占め、東西約290m・南北約230mで総面積約30,000㎡である。調査地は、その一角に過ぎない。調査区内の北側で標高が最も高く37mで、南側で最も低く31mである。標高差は、6mに及んでいる。

土層の基本的な層位は、第1層が表土、第2層が地山である黄褐色粘質土（Hue10YR5/6）ないし黄褐色粘質土（Hue7.5YR5/8）が主で斜面を下るにつれて砂礫層である。遺構の検出作業は第2層上面において行い、弥生時代から鎌倉時代にいたる遺構を検出することができた。とりわけ弥生時代の方形周溝墓は、ほぼ調査区全面において確認された。また、奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物・柱穴・溝などを含め平安時代の遺構等も同一面において遺構検出ができ、発掘調査は複雑で難解を極めることとなり、辛苦することとなった。

2 検出遺構

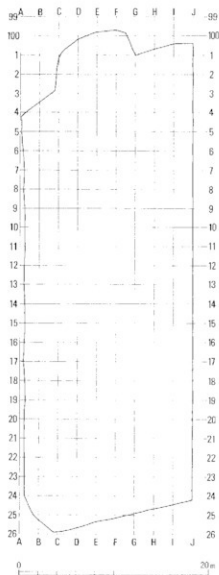
発掘調査によって判明した遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓19基（1～19号墓）、奈良時代の掘立柱建物（12棟）・竪穴住居（20棟以上）・土坑・溝、平安時代の土坑（2基）、鎌倉時代の土坑がある。遺構は、主なものについて記述する。遺構の詳細な個々のデータについては、遺構一覧表を参照された。 （第2～4表 遺構一覧表）なお、調査区が北に対して西側に21.5°振っている。しかしながら、文章中における東西南北の表記は、調査区の長辺に対して南北の方位を、短辺に対して東西の方位を与えている。

（1）弥生時代

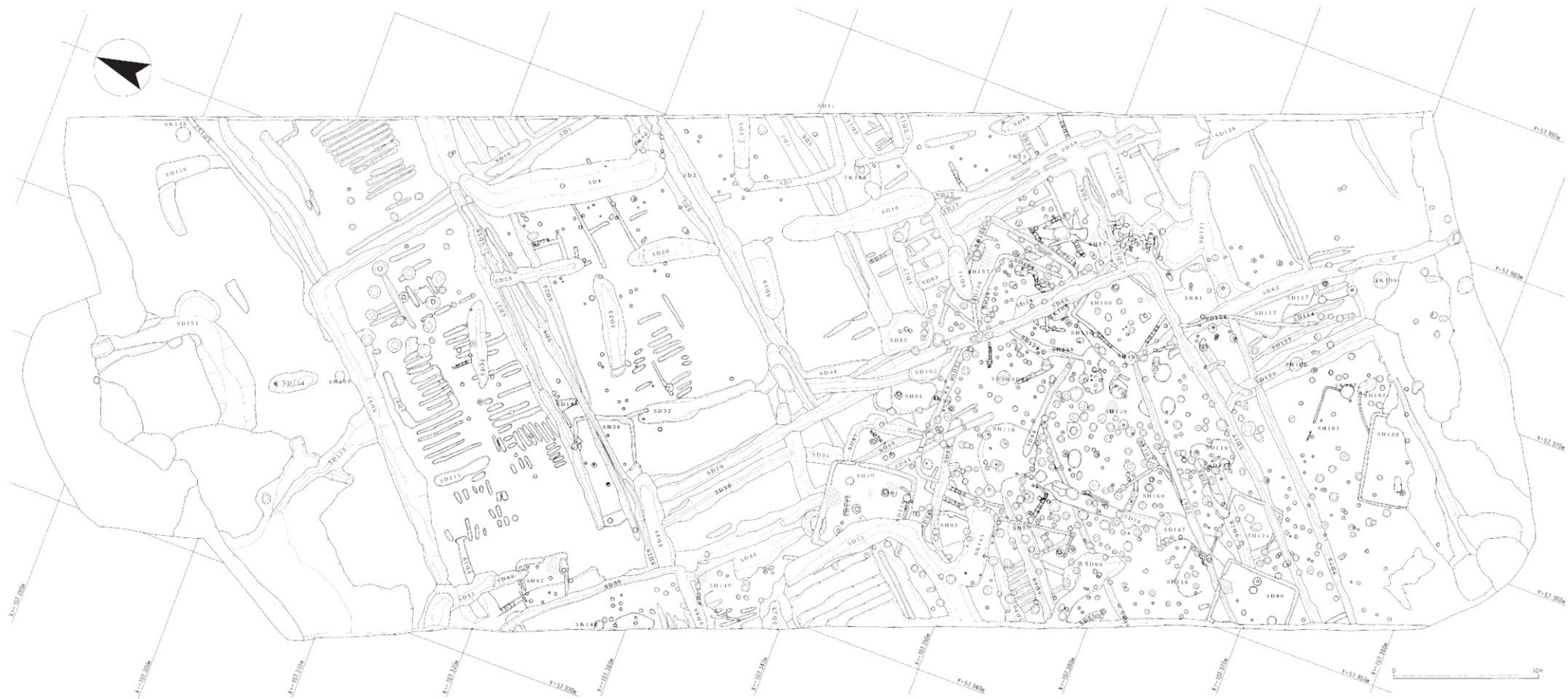
ほぼ調査区全体にわたって判明した方形周溝墓は、19基を数える。いずれも埋葬主体とみられる痕跡は、確認できず、後世による削平を受けたとみられる。

とりわけ調査区西側～中央部分にかけての方形周溝墓は、周溝を共有する形で直線的に連続し、四隅

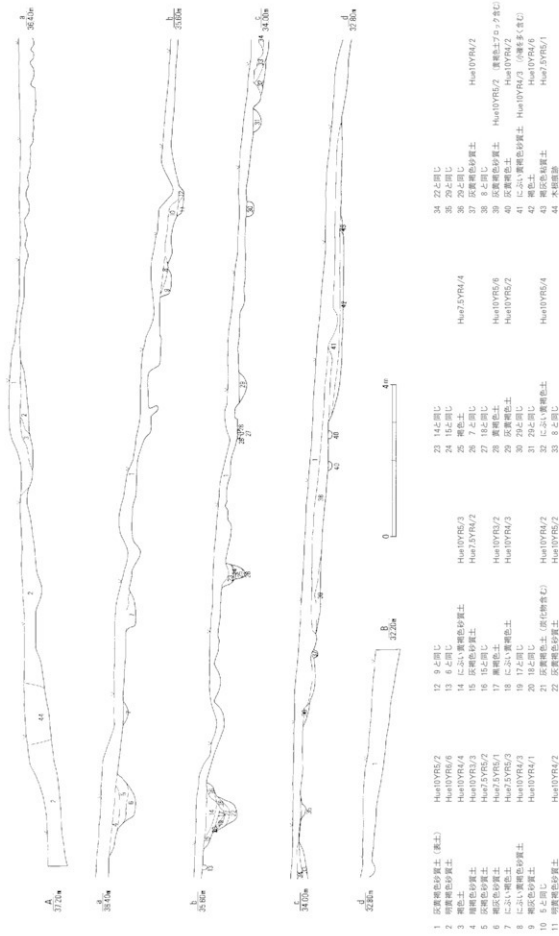
に陸橋を有したものと周溝が全周するものがある。東側において四隅ではなく、中央からやや寄った位置に陸橋部を有しているものも存在しており、方形周溝墓の造営の有り方に変化をみいだすことができそうである。また、方形周溝墓はおおよそ北から南にかけて直線的に連続しており、それぞれAグループ・Bグループ・Cグループとし、Aグループは、調査区東側を中心に南北方向のものを、Bグループは調査区中央2列で構成されてBグループ東群、Bグループ西群と分ける。Cグループは、調査区西側



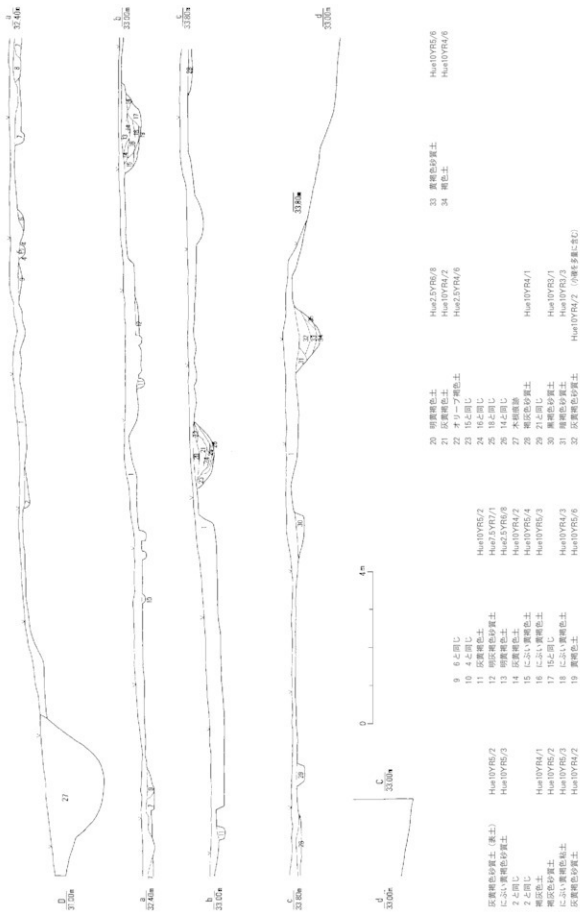
第4図 調査区地区割図（1/800）



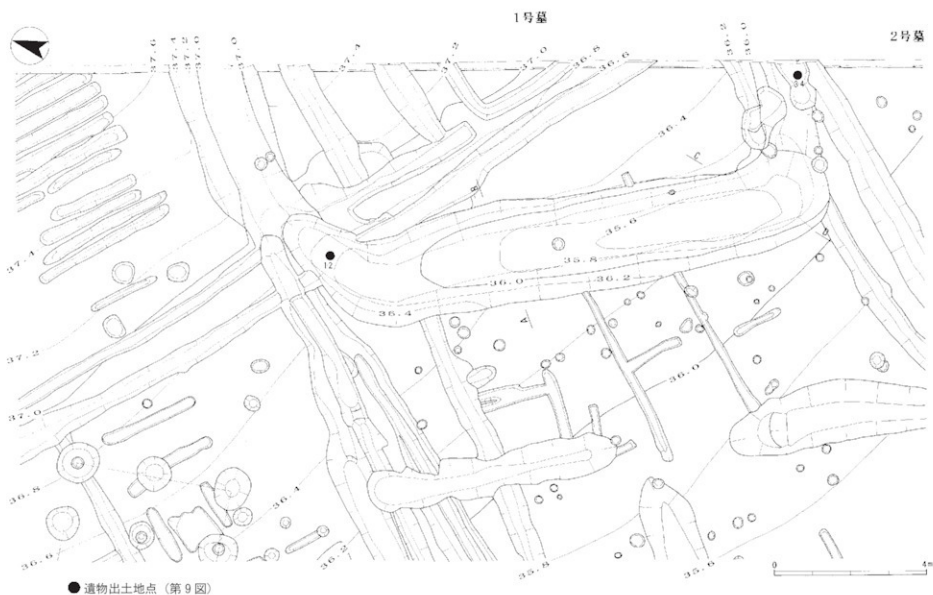
第5図 遺構平面図 (1/200)



第6図 調査区東壁土層断面図 (1/100)



第7図 調査区西壁土層断面図 (1/100)

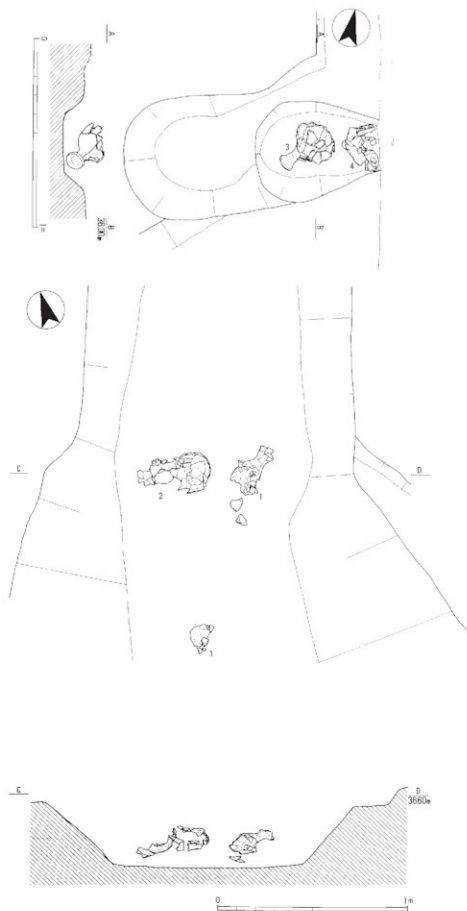


- 1 黄褐色砂質土 Hue7.5YR3/3
 2 黄褐色砂質土 Hue7.5YR3/1
 3 褐色砂質土 (暗灰色土層下) Hue7.5YR4/4
 4 暗灰色砂質土 (暗灰色土層下) Hue10YR4/1
 5 褐色砂質土 Hue7.5YR4/4

- 6 褐色砂質土 Hue7.5YR4/3
 7 暗褐色砂質土 Hue7.5YR5/6
 8 褐色粘質土 (深褐色土層下) Hue7.5YR4/6
 9 明褐色粘質土 Hue7.5YR5/8
 10 褐色砂質土 (暗灰色土層下) Hue7.5YR4/3

- 11 褐色砂質土 (暗灰色土層下) Hue7.5YR4/3
 12 黄褐色砂質土 (暗褐色土層下) Hue7.5YR3/1

第8图 1号墓平面图 (1/100) · 周溝土层断面图 (1/40)



第9图 1号墓遗物出土状况图(1/20)

を中心に整列していないものである。おおよそ全体的にみて3群、内実としては4群として捉えることができそうである。

1) 方形周溝墓

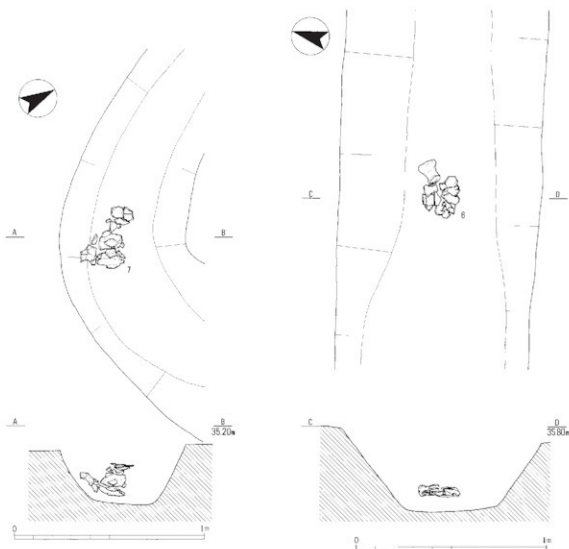
①1号墓 Aグループのなかで最も北側に位置している。7号墓がAグループの中で最初の造営の可能性もあるが1号墓との時期の前後関係が不明のためとりあえずここでは、1号墓からしておく。削平を受けているものの調査区のなかで標高が最も高い場所に造営されている。さらに、確認した全ての方形周溝墓の中で一番規模の大なるものであろうが部分的に確認できた。周溝(SD4)は、ほぼ全周していると考えられそうである。ただ周溝の北西と南西の2つのコーナー部分は、周溝の最深部と比較して非常に浅い。全体の規模は、墳墓裾から南北13.

7mである。

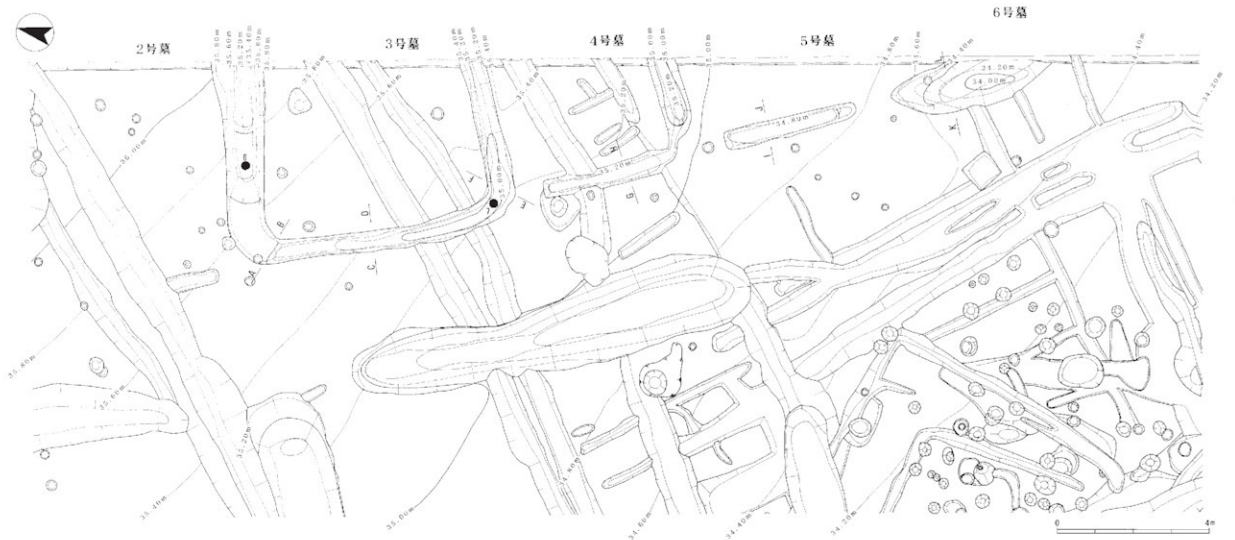
西側周溝(SD4)の規模は、幅2.72m・深さ0.75mである。墳墓側が直線的であるのに対し外縁側は、やや柔らかに弧状を描いている。

北側周溝は、全体的に東西方向の耕作溝と重複し、削平されることによってやや複雑な状況であるため幅・深さの規模について明確にしきれない。北側の周溝から西側の周溝にかけてのコーナー部において溝底から浮いた状態で細頸壺(1・2)が出土している。転落したものともみられる。ただ、1号墓北側においても方形周溝墓が存在した可能性を含めると一概に1号墓からの転落であると言い切ることはできない。

南側周溝は、一部を後世の土坑によって削平されているが規模は、幅1.16m・深さ0.2mである。2



第10図 3号墓遺物出土状況図(1/20)



● 遺物出土地点 (第10図)

3号墓



4号墓



5号墓



6号墓



- | | |
|----------------------|-------------|
| 1 赤褐色砂質土 | Hue2YR4/8 |
| 2 暗褐色粘質土 | Hue7.5YR5/8 |
| 3 暗褐色粘質土 (黄褐色土層上) | Hue7.5YR5/4 |
| 4 黄褐色砂質土 (2cm前後の硬食C) | Hue7.5YR3/1 |
| 5 暗色砂質土 | Hue7.5YR4/6 |
| 6 暗色粘質土 | Hue7.5YR4/6 |
| 7 灰褐色砂質土 | Hue7.5YR4/2 |
| 8 黄灰色砂質土 | Hue7.5YR4/4 |

- | | |
|-------------------|-------------|
| 1 暗褐色砂質土 (黄灰色土層上) | Hue7.5YR3/4 |
| 2 暗色砂質土 | Hue7.5YR4/6 |
| 3 暗色粘質土 | Hue7.5YR4/6 |
| 4 暗褐色粘質土 | Hue7.5YR5/8 |

- | | |
|------------------------|-------------|
| 1 黄褐色砂質土 (1~3cm前後の硬食C) | Hue10YR3/1 |
| 2 灰黄褐色粘質土 | Hue7.5YR3/4 |
| 3 黄灰色粘質土 | Hue7.5YR4/1 |
| 4 暗色粘質土 | Hue7.5YR4/6 |
| 5 暗褐色粘質土 | Hue7.5YR5/8 |

- | | |
|---------------------------|-------------|
| 1 灰黄褐色砂質土 (0.5~2cm前後の硬食C) | Hue10YR6/2 |
| 2 灰黄褐色砂質土 (灰化物食C) | Hue10YR6/2 |
| 3 灰黄褐色粘質土 (暗色土層上) | Hue10YR6/2 |
| 4 灰黄褐色砂質土 (0.5~2cm前後の硬食C) | Hue10YR5/3 |
| 5 灰黄褐色粘質土 (0.5~2cm前後の硬食C) | Hue10YR5/3 |
| 6 暗色粘質土 (0.5~1cm前後の硬食C) | Hue10YR4/6 |
| 7 暗色砂質土 (0.5~1cm前後の硬食C) | Hue10YR4/6 |
| 8 暗褐色粘質土 | Hue7.5YR5/8 |

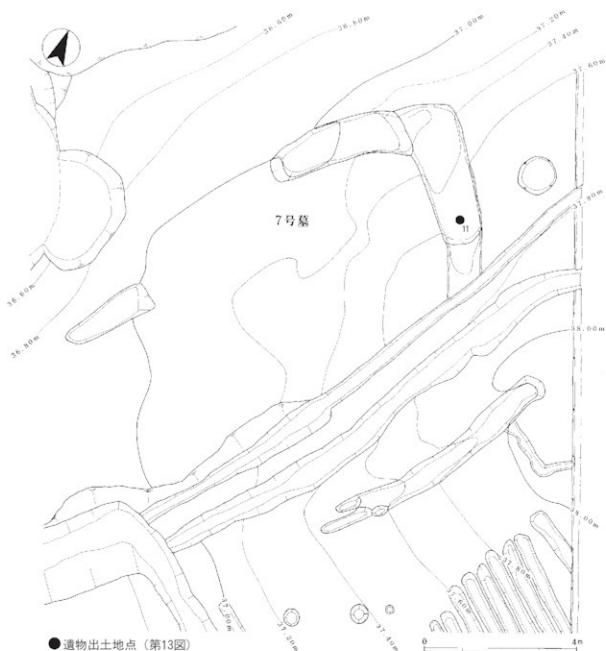
第11図 2~6号墓平面図 (1/100)・周溝土層断面図 (1/40)

号墓と共有していたとみられる。周溝と調査区の壁際において溝底から浮いた状態で細頸壺(3・4)が出土している。1号墓ないし2号墓からの転落したものとみられる。1～4の遺物の時期から中期中葉とみられる。

②2号墓 Aグループ内の1基である。1号墓の南隣に位置している。1号墓同様調査区との兼ね合いによって西側を中心に検出することができた。1号墓と比較して急激な変化があったのかかなり規模が縮小している。また、1号墓の西側の周溝と不揃いでやや墳丘部分が南に突き出していたとみられ

る。周溝は、西側が一部分だけ確認できた。北側は、1号墓の南側の周溝(SD4)を共有していたとみられる。南側の周溝は、3号墓の北側の周溝(SD9)と共有している。すくなくとも西南のコーナ一部分が陸橋状になっていたかもしれない。2号墓の全体の規模は、南北5.5mである。東西は不明である。西側周溝は、平面形が直線的である。規模は、検出長1.31m・幅0.36～0.46m・深さ0.08～0.1mである。非常に浅い。耕作溝の可能性も充分あるが埋土の土質・土色から周溝と判断した。

南側周溝(SD9)は、方形周溝墓3号墓と共有



第12図 7号墓平面図(1/100)

している。平面形は、2・3号墓側ともにやや直線的である。規模は、幅1～1.38m・深さ0.1～0.27mである。西にいくにつれて徐々に深くなる傾向を示している。西南部は、非常に浅くなっている。遺物は、溝底から浮いた状態で広口壺(5)・細頸壺(6・7)が出土している。3号墓と共有する周溝であるため2号墓ないし3号墓のどちらかの転落したものである。5～7の遺物の時期から中期中葉とみられる。

③3号墓 Aグループの一角を占める。2号墓の南隣に位置している。周溝は、調査区との兼ね合いで西側を中心に検出することができた。ただ、西側の周溝(SD7)は、北側のもの(SD9)と南側のもの(SD11)と比較して幅も狭く、かなり浅い。3号墓の全体の規模は、南北6mである。

西側周溝(SD7)は、平面形が直線的である。周溝の規模は、幅0.54～0.66m・深さ0.2～0.3mである。

北側周溝(SD9)は、2号墓の南側周溝と共有している。

南側周溝(SD11)も平面形は、直線的である。周溝の規模は、幅0.61m・深さ0.32～0.5mである。4号墓の北側の周溝と共有している。遺物は、溝底から浮いた状態で太頸壺(8)・細頸壺(9)が出土している。3号墓か4号墓からの転落したものであ

ろう。8・9の遺物時期から中期中葉とみられる。

④4号墓 Aグループの一角を占める。3号墓の南隣に位置している。調査区との兼ね合いによって西側を中心に確認することができた。周溝の南西のコーナー部分は、陸橋状に残っている。全体の規模は、南北4.85mである。

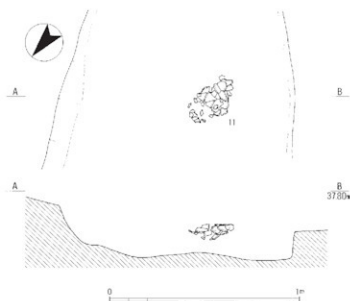
西側周溝は、一部を後世の遺構によって削平されているものの幅0.56m・深さ0.1～0.2mである。南北のものと比較しても全体的に細く、浅い。北側の周溝は、3号墓の南側の周溝と共有している。

南側周溝は、平面形が直線的である。規模は、幅0.75m・深さ0.2～0.3mである。5号墓の北側の周溝と共有している。遺物は、南側の周溝の溝底から浮いた状態で小型壺ないし鉢(10)が出土している。4号墓か5号墓から転落したものとみられる。

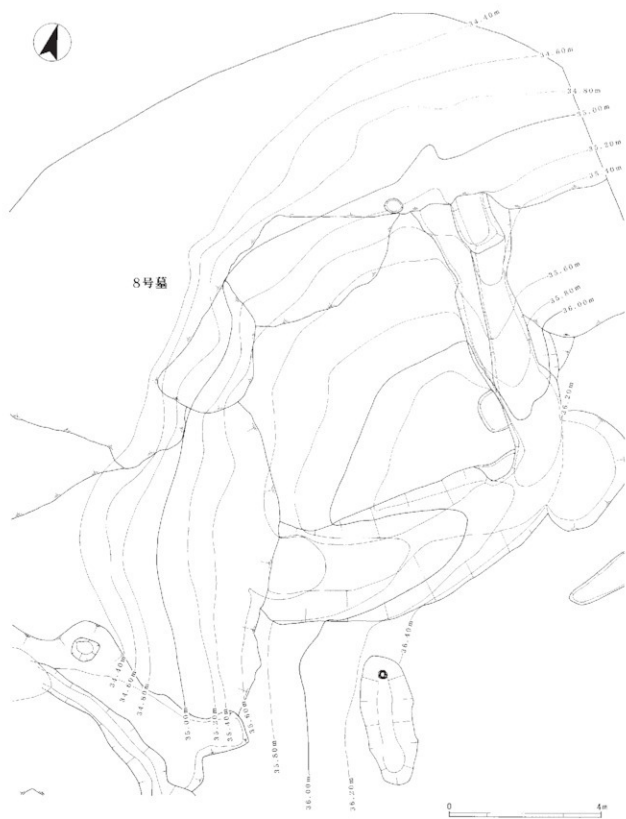
⑤5号墓 Aグループの内の1基である。4号墓の南隣に位置している。調査区との兼ね合いによって西半分を確認することができた。周溝は、北側と西側を検出することができた。周溝の南西と北西の2つのコーナー部分は、陸橋状に残っている。全体の規模は、周溝を検出していないため不明であるがおおよそ5m前後であろう。

西側周溝は、平面形がほぼ直線的で検出長3.58m・幅0.44～0.56m・深さ0.02～0.2mである。

北側周溝(SD14)は、4号墓の南側の周溝と共

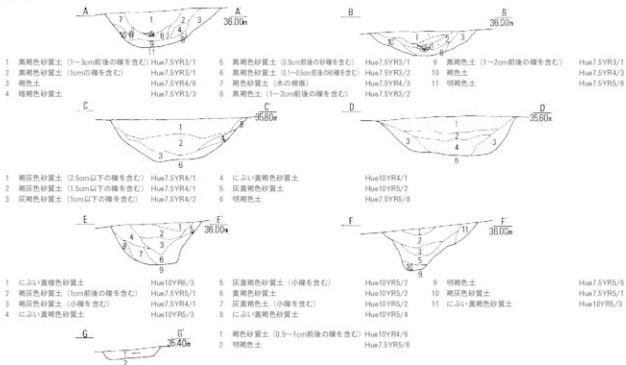


第13図 7号墓遺物出土状況図(1/20)

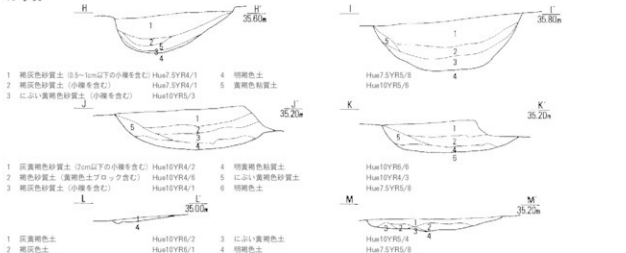


第14图 8号墓平面图 (1/100)

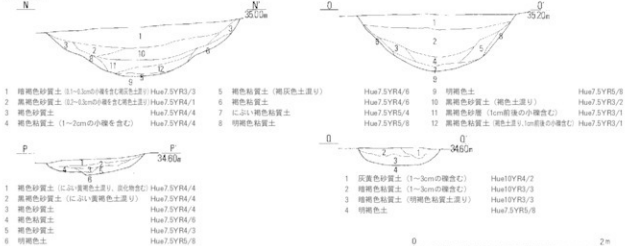
9号墓



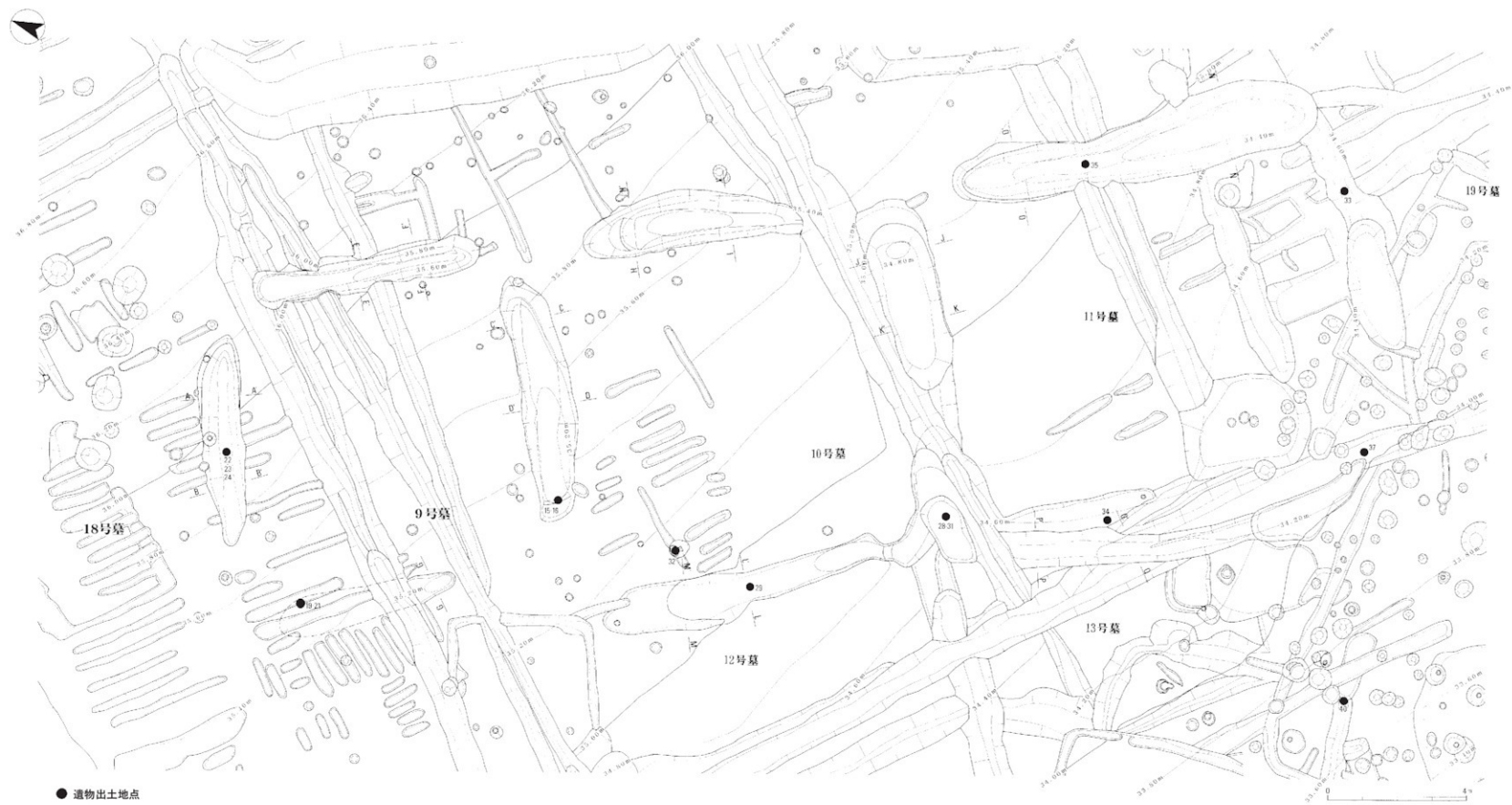
10号墳



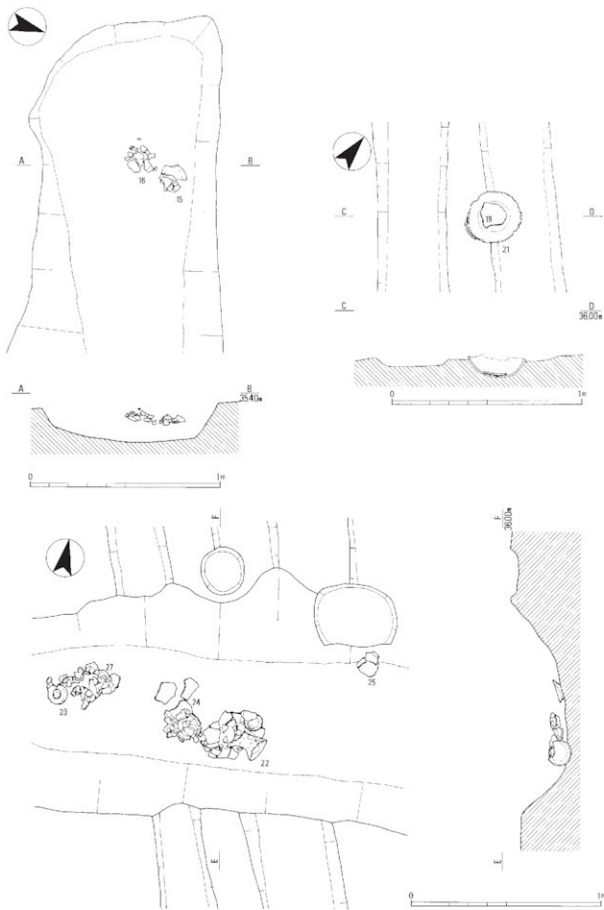
11号墓



第15図 9~11号墓周満土層断面図 (1/40)



第16图 9~11号墓平面图(1/100)

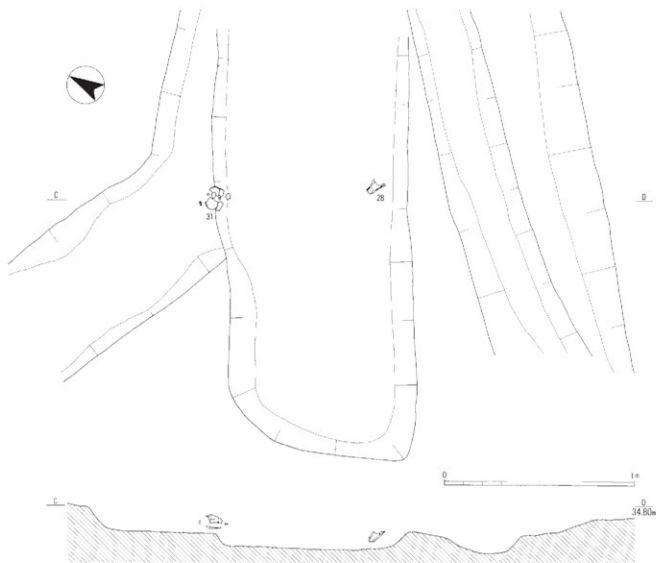
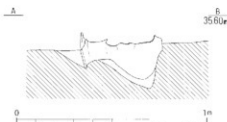
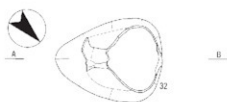


第17图 9号墓遺物出土狀況圖 (1/20)

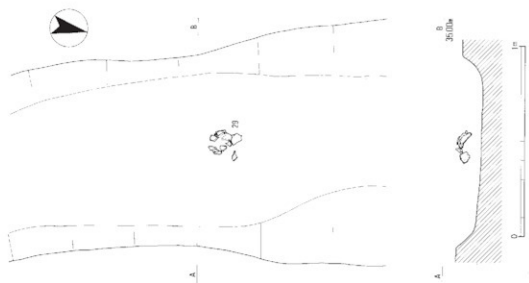
有している。遺物は、出土していない。

⑥6号墓 Aグループのなかで確認した最も南側に位置している。大半が調査区外であるが周溝の一部を確認することができた。周溝は、西側の周溝の一部だけである。周溝の北西のコーナー部分は、陸橋状に残っている。全体の規模は、不明である。しかし、2～5号墓の周溝よりも規模的に大きいので方形周溝墓の規模も大きいとみられる。

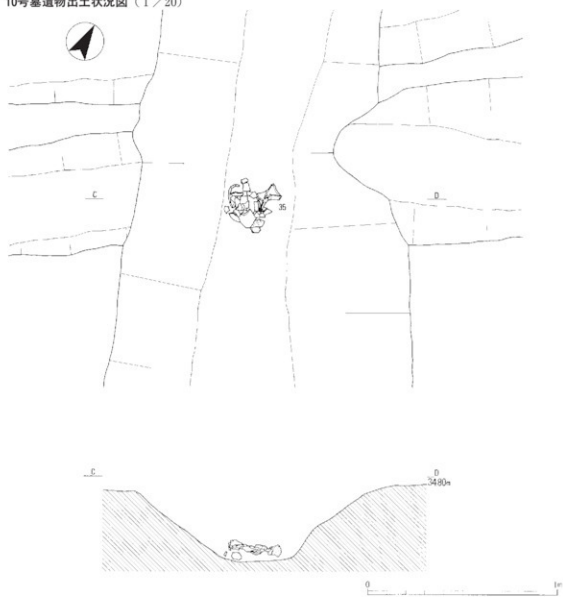
西側周溝の規模は、検出長3.4m・検出幅1.28m・深さ0.06～0.44mである。墳墓側が直線的であるのに対し外側は、やや柔らかに弧状を描いているとみられる。調査区外に向かって深くなっている。2号墓から5号墓にかけての西側の周溝と掘削の状況が異なっているが、2号墓から列状に墳墓を描えていることに変わりはない。



第18図 10号墓遺物出土状況図(1/20)



第19图 10号墓遗物出土状况图 (1/20)

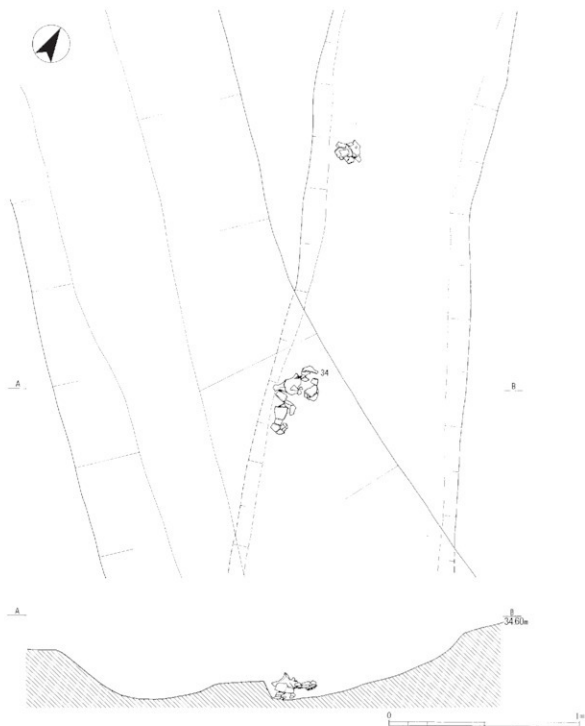


第20图 11号墓遗物出土状况图 (1/20)

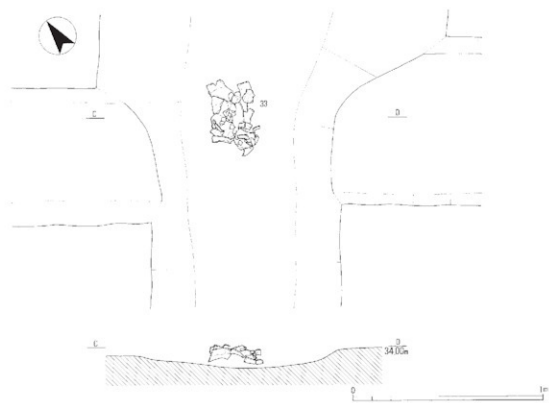
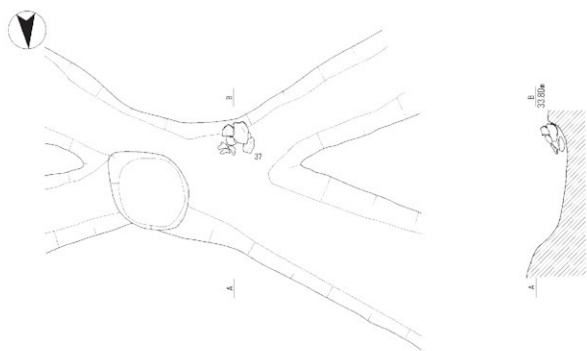
⑦7号墓 Aグループのなかで最も北側に位置している。Aグループの墳墓を揃えていない点を考慮するとAグループから外れる可能性もないわけではない。1号墓から空間地があって南西側で削平を受けているものの調査区のなかで標高が最も高い場所から北側への急斜面にかけての地形に造営されている。周溝は、北側から東側にかけての「L」字形の部分

だけを検出することができた。山田分類の「半辺陸橋型」とも考えられるが、削平を受けて偶然この部分が残っただけかも知れない。全体の規模は、東西4.3m以上・南北3.6m以上としか言えない。

東側周溝（S D 156）は、全体的に弧状である。周溝の規模は、幅0.86～1.38m・深さ0.07～0.15mである。北側の周溝の規模は、幅0.92～1.04m・深さ



第21図 11号墓遺物出土状況図 (1/20)



第22图 11号墓遺物出土状況図 (1/20)

0.08～0.2mである。共に非常に浅い。遺物は、溝底からやや浮いた状態で細頸壺(11)が出土している。遺物時期から中期中葉とみられる。

⑧8号墓 Bグループ東側のなかで最も北側に位置している。削平を受けているものの調査区のなかで標高が最も高い場所に造営されている。周溝は、西から東及び南側の一部まで残っている。丘陵頂上部であるため北及び西側の周溝は、崩れていると考えられ、本来は全周していたかもしれない。全体の規模は、東西6.88m・南北7.62m以上である。

東側及び南側周溝(SD151)は、墳墓側が直線的で周溝外縁部は弧状である。東側の周溝の規模は、幅1.47～2.12m・深さ0.28～0.38mである。南側の周溝の規模は、幅2.08～2.9m・深さ0.18～0.7mである。遺物は、溝底から浮いた状態で壺体部から底部(12・13・14)にかけてのものが出土している。

⑨9号墓 Bグループ東側の一角を占めている。8号墓と13～14mの空間が空いているものの墳墓を揃えるように造営されている。また、3～4mの空間地を挟んで1号墓の西側である。周溝は、四つのコーナー部分全てが陸橋状に残っている。全体の規模は、南北8.9m・東西8.8mである。平面形は、正方形である。

東側周溝(SD25)は、全体的に直線的である。周溝の規模は、検出長6.68m・幅1.1m・深さ0.36～0.53mである。遺物は、細頸壺(20)が溝底から浮いた状態で出土している。9号墓から転落したものである。

北側周溝(SD31)は、平面形で墳墓側が外縁部側よりも直線的である。周溝の規模は、検出長6.12m・幅1.28m・深さ0.4～0.5mである。遺物は、広口壺(22)・壺(23)・細頸壺(24)・壺体部から底部(25・27)が溝底から浮いた状態で出土している。9号墓から18号墓から転落したものとみられる。壺底部(26)がSD28から出土しているがSD31からの混じりこみとみて差し支えなからう。

南側周溝(SD23)は、10号墓と共有している。規模は、検出長7.16m・幅1.6m・深さ0.28～0.42mである。平面形は、一見して「ブーメラン」状に近く、墳墓側が直線的で外縁部側も緩やかな弧状である。遺物は、太頸壺等(15～17)が溝底から浮いた

状態で出土している。遺物は、9号墓から10号墓から転落したものであろう。

西側周溝(SD145)は、後世による削平によるものの僅かであるが確認できた。周溝の規模は、検出長1.32m・幅0.78m・深さ0.05～0.07mである。南側の周溝の延長線において弥生土器を検出している浅い窪みを確認している。そのため南側の周溝がそこまであったと考えられる。遺物は、上記のものを含めて底部穿孔の壺底部(18)や壺底部(19・21)が溝底からやや浮いた状態で出土している。遺物は、9号墓から転落したものとみられる。遺物の時期から中期後葉とみられる。

⑩10号墓 Bグループ東側の一角を占める。9号墓の南隣に位置している。ほぼ8・9号墓の墳墓を揃えて造営されている。周溝は、3つのコーナー部分が陸橋状に残っている。西南のコーナー部分だけが繋がっている。全体の規模は、南北11m・東西9.8mである。平面形は、やや長方形である。

東側周溝(SD20)の平面形は、「ブーメラン」状で墳墓側が直線的で周溝外縁部は、弧状である。周溝の規模は、検出長6.4m・幅1.63m・深さ0.19～0.46mである。遺物は、細頸壺(29・30)が溝底から浮いた状態で出土している。10号墓の墳丘から転落したものとみられる。

北側周溝(SD23)は、9号墓の南側の周溝と共有している。

南側周溝(SD19)は後世の擾乱によって削平を受け全体について明確にできないが、現状では直線的である。11号墓の北側の周溝と共有している。周溝の規模は、検出長7.48m・幅1.9m・深さ0.09～0.37mである。遺物は、細頸壺(28)が溝底からやや浮いた状態で出土している。10号墓ないし11号墓からの転落したものであろう。

西側周溝(SD32)は、平面形がほぼ直線的であるが全体的に浅い。12号墓の東側の周溝と共有している。周溝の規模は、検出長8.38m・幅0.8～1.5m・深さ0.05～0.07mである。9号墓の西側の周溝と若干不揃いである。しかしながら、この周溝のやや北側において検出面上において太頸壺が出土していることから周溝そのものは、もうすこし北側によっていたとみられる。さらに墳墓の規模を考えると南北

方向にやや広がり気味であること、周溝そのものかもうすこし北側によっているならば9号墓の墳墓と揃うことを考慮すると東西の規模は、9号墓と同じクラスであると言えよう。遺物は、溝底から浮いた状態で出土した大頭壺(31・32)がある。遺物は、12号墓との共有の周溝であるためどちらかからの転落したものとみられる。遺物の時期から中期中葉とみられる。

⑪11号墓 Bグループ東側の一角を占める。10号墓の南隣でほぼ9・10号墓に揃うように造営されている。周溝は、北東と南西のコーナー部分が陸橋状に残っている。「半辺陸橋型」と捉えることができそうである。全体の規模は、東西11m・南北12.4mである。平面形は、ほぼ正方形に近い。

東側周溝(SD16)は、平面形がやや直線的である。周溝の規模は、検出長10.81m・幅2.06m・深さ0.48~0.6mである。削平の状況にも左右されているであろうが9号墓と10号墓の東側の周溝と比較してもかなり大きく深い。遺物は、細頭壺(35)が溝底から浮いた状態で出土している。

北側周溝(SD19)は、10号墓と共有している。

南側周溝(SD71)は、かなり後世の遺構によって削平され、浅いもののある程度残存している。平面形は、やや直線的である。周溝の規模は、幅1.55m・深さ0.1~0.32mである。遺物は、大頭壺(33)が溝底から浮いた状態で出土している。

西側周溝(SD34・102)は、10号墓西側の周溝と同様に細長く、浅い。平面形は、全体的に緩いカーブを描く。また、SD19・32及び12号墓の北側の周溝と連結している。周溝の規模は、連結部分を含めると検出長9.12m・幅0.78~1m・深さ0.1~0.2mである。遺物は、細頭壺(34)・壺底部(36・37)が溝底から浮いた状態で出土しており転落したものであろう。遺物の時期から中期中葉とみられる。

⑫12号墓 Bグループ西側の1基である。10号墓西側に隣接するものである。北側及び南側は、10号墓の墳墓とほぼ揃えて造営されている。周溝は、北東のコーナー部分が陸橋状に残っている。全体の規模は、南北10.3m・東西10.3mである。平面形は、正方形である。東側の周溝(SD32)は、10号墓の西側の周溝と共有している。

南側周溝は、削平を受けているものの10号墓及び11号墓の周溝と連結している。平面形は、直線的である。周溝の規模は、連結部分を含めて検出長7.98m・幅1.15~1.2m・深さ0.1~0.3mである。

西側周溝(SD46)は、後世の削平を受けてしまっており全体を掴み難い。周溝の規模は、検出長5.44m・幅2.06m・深さ0.1~0.15mである。南東のコーナー部分において14号墓と連結していた可能性は、充分にある。遺物は、溝底から浮いた状態で細頭壺(38)・壺底部(39)が出土している。12号墓ないし13号墓からの転落とみられる。

北側周溝(SD49)は、後世の溝に削平されてしまっており不明な部分も多いが墳墓側でやや直線的である。周溝の規模は、検出長6.66m・幅1.4m・深さ0.12~0.3mである。遺物の時期から中期中葉とみられる。

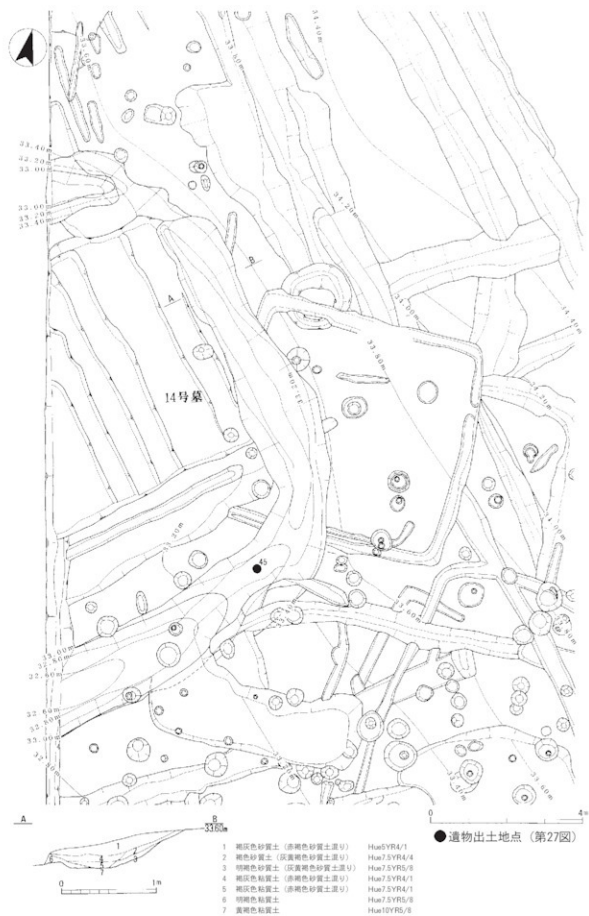
⑬13号墓 調査によって明確にできなかったがBグループ西側の最も南側に位置していると考えられる。全体の規模は11・12号墓と同等クラスとみられる。周溝は、僅かであるが一部確認できているが後世の削平を受けて消滅した可能性が強い。SD88周辺において弥生土器細頭壺(40)が出土している。

東側周溝は11号墓の西側周溝と、北側周溝は12号墓の南側周溝と共有しているとみられる。

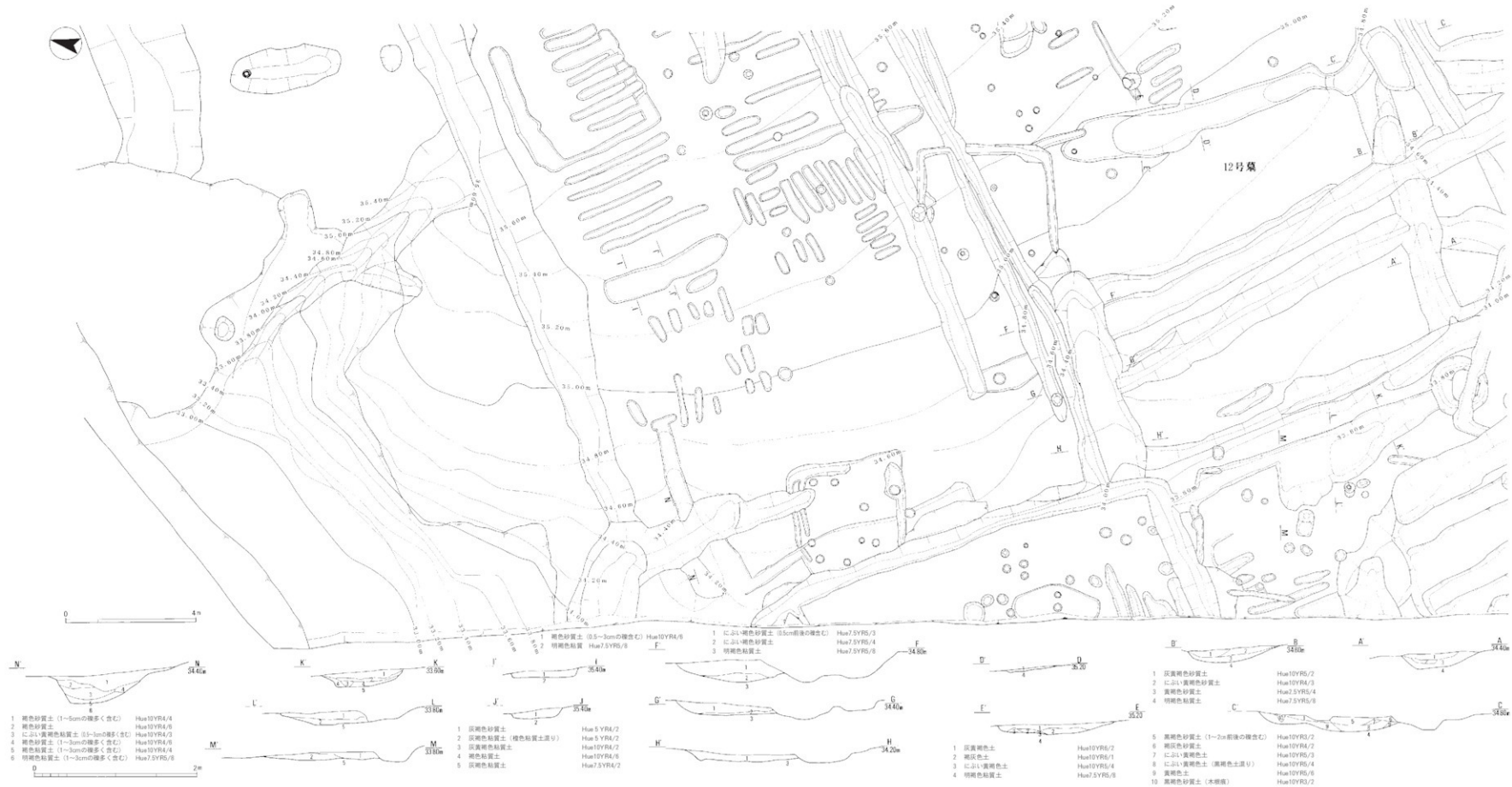
⑭14号墓 Cグループのなかで最も北側に位置している。調査区との兼ね合いもあって東半分を確認できた。周溝(SD57・75)は、ほぼ全周していると考えられそうである。周溝の南東と北東の2つのコーナー部分は、周溝の最深部と比較して非常に浅くなっている。平面形は、墳墓側が直線的で周溝外縁部は弧状である。全体の規模は南北10.6m、東西7m以上である。

周溝の規模は、東側で幅2.08m・深さ0.5mで、南側で幅1.92m・深さ0.25~0.4m、北側で幅1.16m・深さ0.46mである。東側のものが幅広でやや深い。遺物は、南東のコーナー部分の溝底近くから細頭壺(45)・底部に穿孔されている可能性がある壺底部(46)が出土しており転落したものであろう。遺物の時期から中期中葉とみられる。

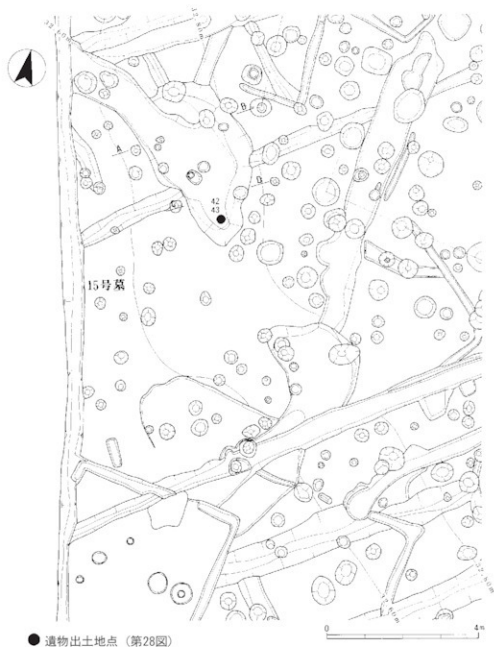
⑮15号墓 Cグループのなかで最も南側に位置している。14号墓と離れているため前後関係は、不明



第23図 14号墓平面図 (1/100)・周溝土層断面図 (1/40)



第24図 12号墓平面図 (1/100)・周溝土層断面図 (1/40)

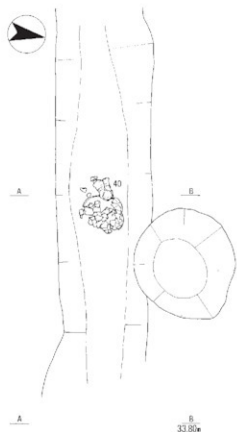


● 遺物出土地点 (第28図)

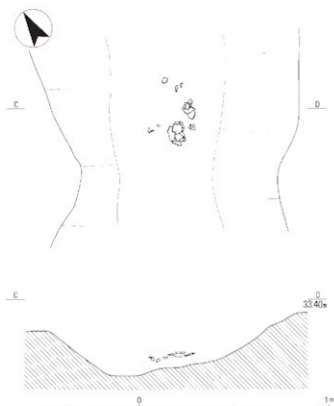


- | | | |
|----|-----------------------|-------------|
| 1 | 灰黄褐色砂質土 (1~3cm前後の層位C) | Hua10YR4/2 |
| 2 | 黄褐色粘土 | Hua7.5YR3/2 |
| 3 | 黄褐色砂質土 | Hua10YR7/1 |
| 4 | 暗褐色粘土 | Hua7.5YR3/3 |
| 5 | 褐色粘質土 | Hua10YR4/4 |
| 6 | にぶい黄褐色粘質土 | Hua10YR4/3 |
| 7 | 灰黄褐色粘質土 | Hua10YR4/2 |
| 8 | 明褐色粘質土 (灰褐色粘質土混り) | Hua7.5YR5/8 |
| 9 | 明褐色粘質土 | Hua7.5YR5/8 |
| 10 | 明褐色粘質土 (褐色粘質土混り) | Hua7.5YR5/8 |
| 11 | 黄褐色粘質土 | Hua10YR5/8 |
| 12 | 明褐色粘質土 (灰褐色粘質土混り) | Hua7.5YR3/2 |

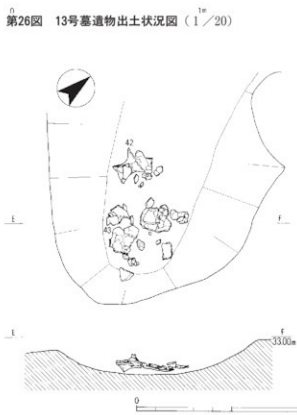
第25図 15号墓平面図 (1/100)・周溝土層断面図 (1/40)



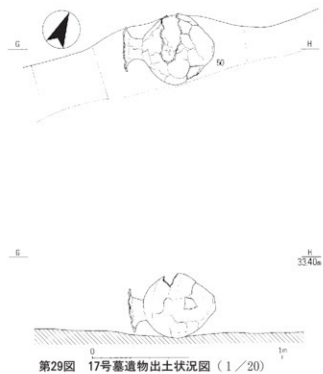
第26图 13号墓遗物出土状况图 (1/20)



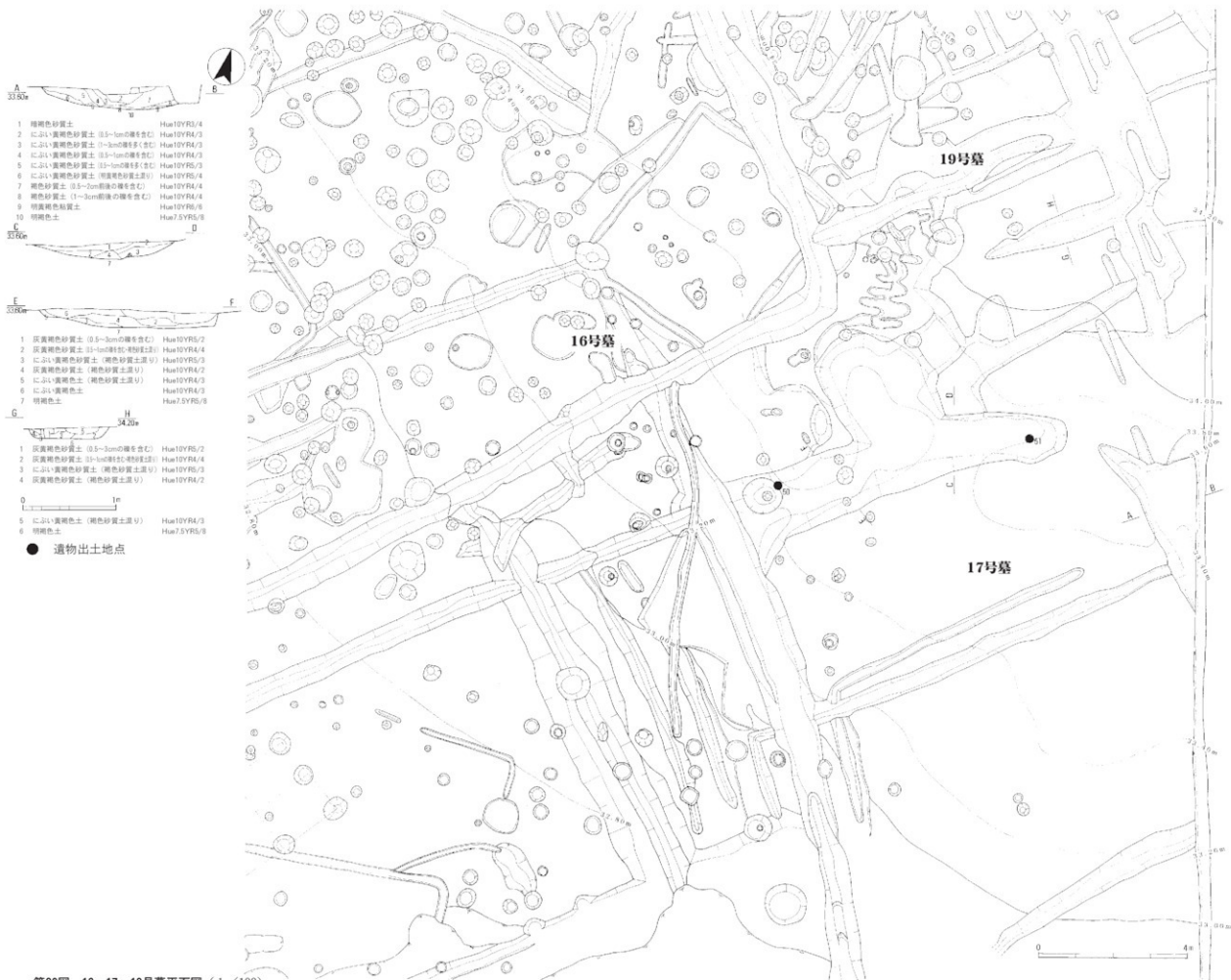
第27图 14号墓遗物出土状况图 (1/20)



第28图 15号墓遗物出土状况图 (1/20)



第29图 17号墓遗物出土状况图 (1/20)

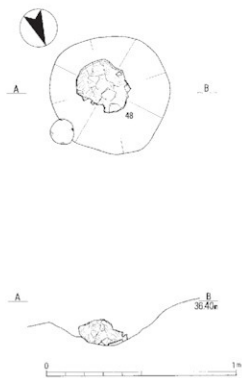


第30图 16・17・19号墓平面图 (1/100)
 ・周清土层断面图 (1/40)

である。周溝（SD89・147）は、東側において開口し、若干南に寄っている。一応ここでは、山田分類の「中央陸橋型」と判断できるかもしれない。開口部の幅2.5mである。全体の規模は、南北10.3m・東西6.8m以上とみられる。

東から南側にかけての周溝（SD147）は、平面形が開口部付近を中心に墳墓外に膨らみ先太りの形になっている。細くなっている部分で屈曲しコーナー部になっている。周溝の規模は、検出長5.7m・幅0.9～2.51m・深さ0.15～0.27mである。遺物は、細頸壺（41・44）が溝底から浮いた状態で出土しており、転落したものと考えられる。

東から北側にかけての周溝（SD89）は、後世の遺構によってかなり削平を受けてかなり浅い。平面形は、SD147に似通っている。周溝の規模は、検出長6.56m・幅0.9～2.65m・深さ0.02～0.19mである。全体的にみて墳墓側が直線的であるのに対し周溝外縁部は、やや柔らかに弧状を描いている。遺物は、細頸壺（42・43）が溝底から浮いた状態で出土しており、転落したものと考えられる。遺物の時期から中期中葉とみられる。



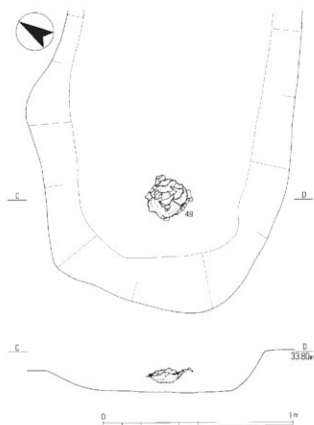
第31図 18号墓遺物出土状況図（1/20）

1616号墓 調査区のみなかでやや南側に位置している。Cグループの1基である。後世の遺構によってかなり削平を受けている。周溝は、コーナー部分（SD119・134）だけが残っており、少なくともコーナー部分が周溝の最深部で、全周ないし中央部に陸橋部を持つ可能性が高い。全体の規模は、東西8.6m・南北9.8m前後とみられる。ほぼ正方形であったであろうと推測される。

コーナー部分（SD119）は平面形が「L」字状で、規模は検出長3.6m・幅1.96m・深さ0.03～0.06mでかなり浅い。

もう一方のコーナー部分（SD134）も平面形が「L」字状で、規模は検出長3.3m・幅1～1.5m・深さ0.02mでこちらかなり浅い。おそらく17号墓の北側の周溝と連結していたとみられる。

17号墓 Cグループの1基である。調査区のみなかで最も南側に位置している。削平を受けているものの北側を中心に東及び西側の周溝の一部を検出することができた。周溝の北東のコーナー部に陸橋部分を確認できる。南側は、斜面の傾斜地であるため削平されているとみられ検出できなかった。全体の



第32図 19号墓遺物出土状況図（1/20）

規模は、東西11.8m・南北6m以上である。Bグループ東側の9・10・11・19号墓の墳墓群と揃えられていた造営された可能性が高い。

東側周溝（SD128）は、東半分が調査区外であるものの確認できた。平面形は、その加減もあり三角形形状である。規模は、検出長5.28m・幅1.96m・深さ0.03～0.2mである。

北側周溝（SD111）は、平面形が直線的な形状である。規模は、検出長9.15m・幅1.36～1.66m・深さ0.2～0.3mである。遺物は、溝底から浮いた状態で大型壺（50）・細頸壺（51・52）が出土している。大型壺は、溝底より上で横倒しの状態で出土しており、他のものも含めて転落したものであらうとみられる。

西側周溝（SD117）は、後世の遺構によってかなり削平を受けてかなり不明瞭である。遺物の時期から中期中葉とみられる。

1818号墓 Bグループ東側に属する8号墓と9号墓間の13～14mの空地に想定できそうである。その理由はSK150とその周辺から弥生土器が出土していることとその出土点は9号墓の北側の周溝北裾から9m前後である。その規模は、9号墓のものに相似することといったことである。後世の削平を受けていることで18号墓の周溝そのものが消滅してしまい、土坑状に遺物出土の部分だけが残存したのなかろうか。おおよその推定規模は9m前後で、平面形は正方形とみられる。SK150が18号墓の北側の周溝最深部辺りとも考えられる。遺物は、この18号墓付近出土の包含層のものを含めて細頸壺（47・48）・広口壺（53）・壺体部（54）・壺底部（55・56）が出土している。

1919号墓 Bグループ東側に属する11号墓と17号墓間の空地に想定できそうである。その理由は、弥生土器が出土している溝SD74がある。SD74から11号墓の南北間は、12mであり11号墓の南北方向の規模と一致するからである。ここに方形周溝墓が存在しないとSD74の存在する説明をつけることができない。よってSD74が南側の周溝とみなすことができよう。推定であるが全体の規模は、南北12.4mとみられる。平面形はやや長方形であろう。

南側周溝（SD74）は、平面形が直線的である。

規模は、検出長4.6m・幅1.28m・深さ0.06～0.4mである。遺物は、溝底から浮いた状態で壺体部（49）が出土している。

（2）奈良時代

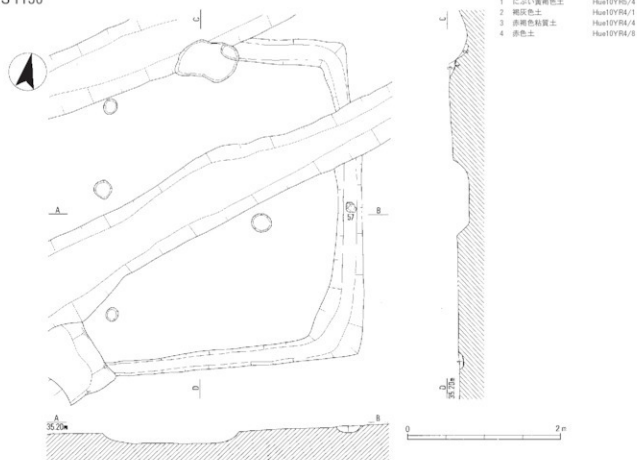
調査区の中央から西側にかけては、竪穴住居は点々と存在してまばらである。中央付近から東側にかけては、非常にかたまって検出することができた。そのため竪穴住居は、重複が著しく少なくとも3回以上の建て直しを行っていることが判明した。また、掘立柱建物は、3間×2間の総柱建物が調査区西北の位置に存在しており、その建物から南側にかけて建物群があったと判断される。

1）竪穴住居

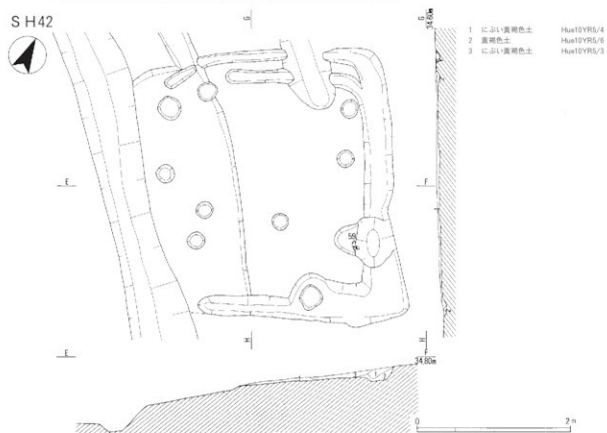
①SH36 D9区において検出した。調査区の西側中ほどに位置している。平面形は、長方形であろうか。規模は南北4.18m・東西3.3m以上で、床面積は約13.8㎡以上である。深さは、ほぼ遺構検出面で検出できほとんど深さはない。主柱穴とみられる西側の2つの柱穴間は、南北2.75mで柱穴の径はそれぞれ0.2m前後・深さ0.03mである。主柱穴でない可能性も捨てきれない。北側壁周溝中央付近において焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は、北から東西側にかけて幅0.25～0.5m・深さ0.06mである。東南隅がやや幅に残る。遺物には、土器器杯（57）が出土している。この竪穴住居の時期は、7世紀後半とみられる。

②SH42 B・C8区において検出した。調査区の最も南西側に位置している。平面形は、ほぼ正方形であろう。規模は南北3.62m・東西3.3m以上で、床面積は11.9㎡以上である。深さは全体的に浅く、遺構検出面から0.08mである。主柱穴と提えた柱穴間は、東西2.4mで柱穴の径は0.23～0.3m・深さ0.08mである。主柱穴でない可能性も捨てきれない。東側壁周溝の南寄りて焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴は検出できなかった。しかし南側の壁周溝やや東寄りに柱穴状の遺構が認められる。壁周溝は、北と東及び南側にかけて確認した。規模は、幅0.14～0.38m・深さ0.08mである。北側の壁周溝の内側にもう1条溝が認められた。一方の増築ないし建て直しとみられる。ここでは、東と南

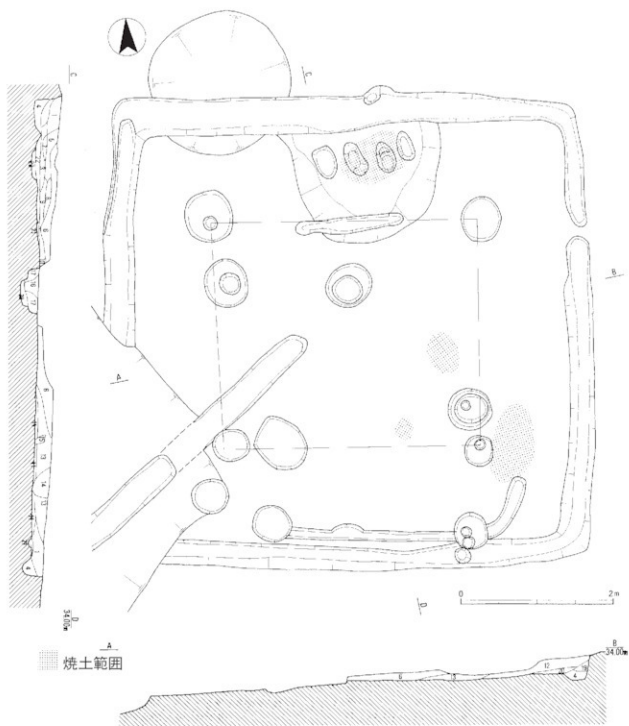
S H36



S H42

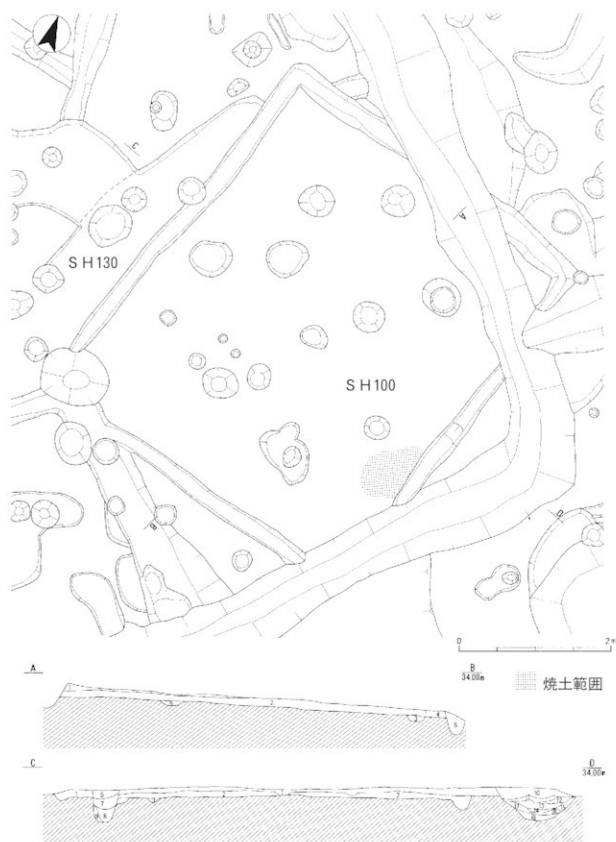


第33図 SH36・42実測図 (1/50)



- | | | | |
|----------|------------------------|------------|------------------------|
| 1 褐色土 | Hua7.5YR4/6 | 11 褐色土 | Hua7.5YR4/1 |
| 2 褐色土 | Hua7.5YR4/1 (褐色土粒子を含む) | 12 褐色土 | Hua7.5YR4/4 (黄褐色土を含む) |
| 3 褐色土 | Hua7.5YR4/1 | 13 暗褐色粘質土 | Hua7.5YR5/6 |
| 4 暗灰色粘質土 | Hua7.5YR4/1 | 14 褐色土 | Hua7.5YR6/4 |
| 5 暗褐色粘質土 | Hua7.5YR5/6 | 15 黄褐色土 | Hua10YR2/1 |
| 6 褐色土 | Hua7.5YR4/3 | 16 暗灰色粘質土 | Hua10YR4/1 |
| 7 灰褐色土 | Hua7.5YR4/2 | 17 暗褐色粘質土 | Hua7.5YR6/8 |
| 8 褐色土 | Hua7.5YR4/4 | 18 灰黄褐色粘質土 | Hua10YR6/8 |
| 9 暗褐色粘質土 | Hua7.5YR5/8 | 19 灰黄褐色土 | Hua10YR4/2 |
| 10 褐色土 | Hua7.5YR4/3 | 20 灰黄褐色砂質土 | Hua10YR4/2 (暗褐色土を多く含む) |

第34図 SH50実測図 (1/50)



第35図 SH100・130実測図 (1/50)

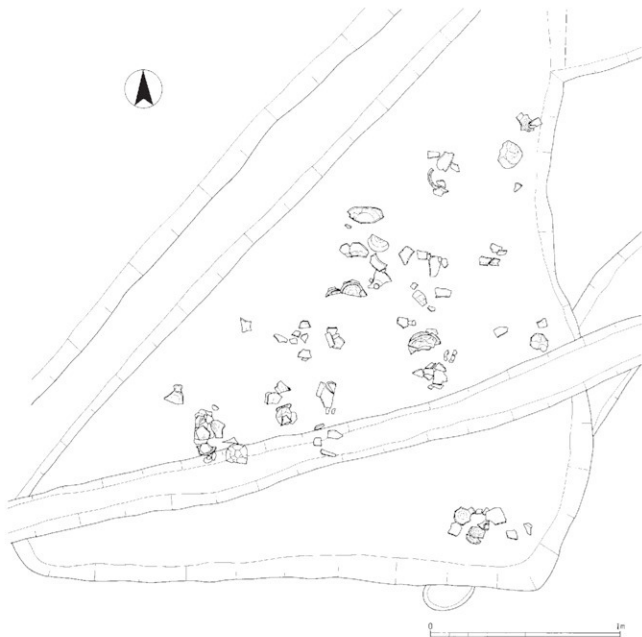
側の壁周溝が北側と比較して幅広であることから建て直しの可能性があろう。遺物には、須恵器杯蓋・杯身(58・59)が出土している。この竪穴住居の時期は、7世紀末から8世紀初頭とみられる。

③SH50 C・D13区からC・D14区にかけて検出した。調査区の中央やや南側に位置している。検出した竪穴住居のなかで最も大きいものである。平面形は、ほぼ正方形である。規模は南北6.23m・東西6.6mで、床面積は41.1㎡である。深さは、遺構検出面から最深度で0.25mである。主柱穴間は、南北3m・東西3.52mで柱穴の径は0.44~0.7m・深さ0.08~0.52mである。北側壁周溝中央付近におい

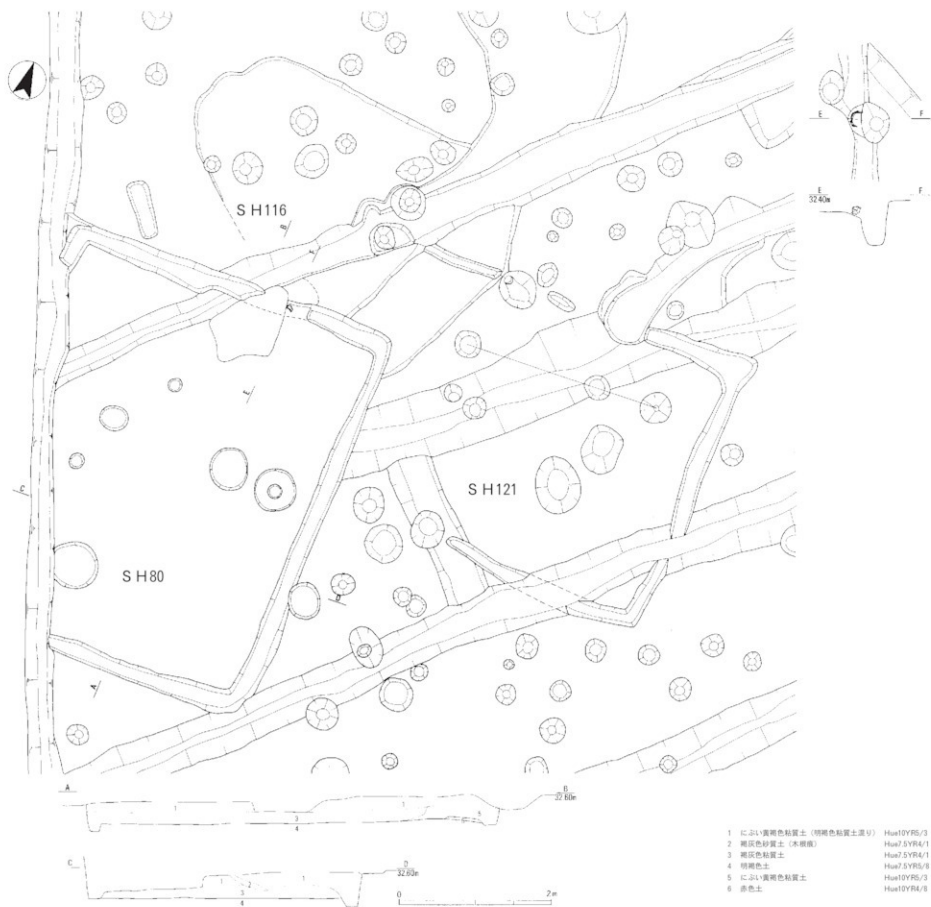
て焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は、ほぼ全周している。規模は、幅0.3m前後・深さ0.15m前後である。

また、建て替えがあったとみられ、竪穴住居内において壁周溝及び焼土痕跡が数カ所にわたってみとめられた。遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯蓋・高杯(60~65)が出土している。この竪穴住居の時期は、7世紀後葉とみられる。

④SH80 B20・21区において検出した。竪穴住居の一部は、調査区外であるが大部分を検出することができた。平面形は、長方形で南北に長い。規模



第36図 SH112遺物出土状況図(1/20)



第37図 SH80・116・121実測図 (1/50)



第38图 SH120・161・162平面图 (1/50)

は南北5.5m・東西4.54mで、床面積は約25㎡である。深さは、遺構検出面から0.3~0.4mである。柱穴を確認しているものの主柱穴と判断し難い。北側やや東寄り付近において焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は、ほぼ全周している。溝の規模は、幅0.26m前後・深さ0.1m前後である。遺物には、土師器皿・甕・須恵器杯蓋・鉢・製塩土器(66~72)が出土している。この堅穴住居の時期は、8世紀初頭とみられる。

⑤SH93 B15区からC15区にかけて検出した。調査区の中程南側に位置している。平面形は、やや長方形であろう。規模は一辺3m以上である。壁周溝は、北側から東側にかけて確認できた。SD98もこの堅穴住居の壁周溝の可能性が高い。カマド跡や貯蔵穴は、確認できなかった。遺物は、須恵器杯蓋・杯身(73・74)が出土している。この堅穴住居の時期は、8世紀前葉から中葉とみられる。

⑥SH100 G18・19区において検出した。調査区のやや東側中ほどに位置している。平面形はほぼ長方形で長辺5.55m・短辺4.77mで、床面積は26.5㎡である。検出面からの深さは0.12m前後である。確実性にやや欠けるものの主柱穴間は、東西1.8m・南北3.1mである。柱穴の径は0.24~0.5m・深さ0.1~0.29mである。東側の壁周溝南寄りにおいて焼土痕跡があり、カマド跡とみられる。貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝はほぼ全周する。溝の規模は、幅0.26~0.3m、深さ0.07~0.2mである。SD136は、この堅穴住居の排水溝の可能性が高い。遺物には、土師器皿・甕・須恵器杯身・椀・甕(79~85)が出土している。この堅穴住居の時期は、7世紀後葉から8世紀前葉にかけてとみられる。

⑦SH112 G20区からG21区にかけて検出した。調査区の北東部に位置している。平面形は後世の溝によって削平されており不明であるが、検出長で長辺3.2m以上・短辺2.9m以上である。深さは、検出面から0.1m前後である。主柱穴とみられるものは、確認できなかった。また、南東寄りの箇所で焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴や壁周溝も確認できなかった。遺物は、まとまっており良好な一括資料である。出土したものは、土師器甕・

鍋か甕の把手部分・須恵器杯蓋・杯身・椀・高杯・鉢(86~109)がある。堅穴住居の時期は、7世紀後葉から8世紀前葉にかけてとみられる。

⑧SH116 C19区からC20区にかけて検出した。調査区の南東側に位置している。SH80とSH121によって東側半分は削平されているが、僅かであるが西側を中心に確認できた。平面形は、現状では判断できない。規模は、一辺4.4m以上である。主柱穴は、判断つかない。カマド跡や貯蔵穴、壁周溝は検出できなかった。SH80・121との重複関係からみると最も古い堅穴住居とみられる。

⑨SH120 D23区からE23区にかけて検出した。調査区の最も東側に位置している。平面形は、長方形か正方形か断定できない。規模は、長辺6.25m・短辺3.49m以上である。深さは、遺構検出面において壁周溝を確認しているためほとんどない。主柱穴は、判断しがたい。カマド跡や貯蔵穴は検出できなかった。壁周溝は、西側を中心に検出できた。溝の規模は、幅0.22m前後・深さ0.1m前後である。堅穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよ他の堅穴住居と兼ね合いを考えると7世紀末から8世紀初頭と考えてよからう。

⑩SH121 C20区からD20区にかけて検出した。調査区の南東側に位置している。平面形は、長方形である。規模は長辺4.58m・短辺3.98mで、床面積は約18.2㎡である。深さは、遺構検出面で壁周溝を確認した。主柱穴は、判断し難い。カマド跡や貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は、ほぼ全周しており、幅0.3m前後・深さ0.2m前後である。堅穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよ他の堅穴住居と兼ね合いを考えると7世紀末から8世紀初頭と考えてよからう。SH80との重複関係からみるとSH80よりも古いと考えられる。

⑪SH130 F18区からG18地区にかけて検出した。堅穴住居SH100によってかなり削平を受けている。平面形は、正方形であろうか。一辺3.5m前後・もう一辺が0.28m以上である。主柱穴は、他の堅穴住居でも判断つかないものがある。貯蔵穴・壁周溝・カマド跡は、確認できなかった。堅穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよ他の堅穴住居と兼ね合いを考えると7世紀

末から8世紀初頭と考えるとよからう。さらにSH100との重複関係からSH100よりも古いとみられる。

⑫ SH149 B11・12区において検出した。調査区の南側壁際に位置している。平面形は、断定できないが長方形であろう。規模は、一辺3.9mである。もう一辺は、不明である。主柱穴は、判断し難い。西壁や北寄りで焼土痕跡をのこす。カマド跡とみられる。貯蔵穴は検出できなかった。壁周溝は北から東側にかけて部分的に残り、規模は幅0.18m・深さ0.05mである。竪穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよそ他の竪穴住居と兼ね合いを考えると7世紀末から8世紀初頭と考えるとよからう。

⑬ SH161 D22区からF22区にかけて検出した。調査区の東側中ほどに位置している。竪穴住居SH120・162と重複している。平面形は、長方形であろう。壁周溝は、北側の一部及び西側にかけて幅0.15m前後・深さ0.05m前後である。貯蔵穴の可能性のある遺構(SK137)を検出している。SK137は平面形がほぼ円形で、規模は長径0.95m・短径0.89m・

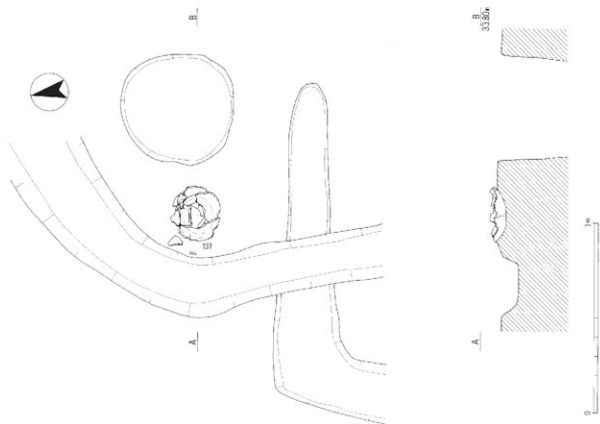
深さ0.04mである。かなり浅い。竪穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよそ他の竪穴住居と兼ね合いを考えると7世紀末から8世紀初頭と考えるとよからう。

⑭ SH162 D23区からF23区にかけて検出した。調査区の東側中ほどに位置している。SH120と重複している。平面形は、長方形であろうか判断できかねる。西側の壁周溝のみ確認できた。規模等は、全く不明である。西側の壁周溝は、幅0.2m前後・深さ0.03m前後である。竪穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよそ他の竪穴住居と兼ね合いを考えると7世紀末から8世紀初頭と考えるとよからう。

⑮ SH176 C15区周辺においてあったとみられる。遺物は、137が出土している。おそらく貯蔵穴用の土師器と考えられる。

2) 掘立柱建物

① SB163 C22区からC23区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で南北棟であ

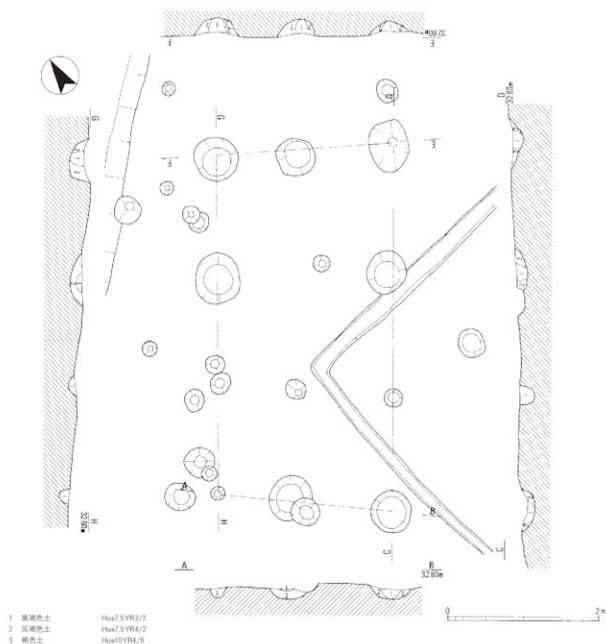


第39図 SH176遺物出土状況図(1/20)

る。棟方向は北で西に32度振れる。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.2～0.6mである。深さ0.1～0.2mで浅く、削平されたと考えられる。柱痕跡は、明瞭に残り径0.2～0.3mを測る。建物規模は、桁行4.49～4.9m・梁行2.32～2.34mで、柱間寸法は桁行5.5尺+5.5尺+5尺・梁行4尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.85m(16尺)、梁行が2.42m(8尺)となる。出土遺物がなく時期を判断するのに決めてを欠く。また、建物の方位も他の掘立柱建物と異なるため、奈良時代で

なく中世の可能性も捨てきれない。

② S B 164 G・H 5区からG・H 6区にかけて検出した。調査区の北西側中央部付近に位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の総柱建物で東西棟である。建物の方位は、北で西に8度振れる。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形ないし楕円形で0.8～1.1mである。深さ0.2～0.6mである。柱痕跡の径は0.25～0.3mである。建物規模は、桁行4.82～4.96m・梁行3.94～4mで、柱間寸法は桁行5.5尺+5.5尺+5尺・梁行6.5尺等間と推定される。し



第40図 SB 163実測図 (1/50)

たがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.85m (16尺)、梁行が3.94m (13尺)となる。出土遺物は、土師器甕(110)がある。掘立柱建物の時期は、およそ8世紀中葉から後葉であろう。

③SB165 B・C16区からB・C17区にかけて検出した。調査区中央部の西側に位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で南北棟である。柱掘形は、大体が円形で0.5～0.6m・深さ0.3～0.65mである。建物は桁行が北で西に振れる。建物規模は、桁行5.2～5.3m・梁行4.2～4.7mで、柱間寸法は桁行5.5尺等間・梁行7尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が5m (16尺5寸)、梁行が4.24m (14尺)となる。出土遺物は、須恵器壺蓋(111)がある。掘立柱建物の時期は、およそ8世紀後半とみられる。

④SB167 F・G15区からF・G16区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で東西棟である。建物の方位は、北である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.3～0.55mである。深さ0.3～0.5mである。建物規模は、桁行3.88～4.15m・梁行3.75～3.85mで、柱間寸法は桁行4.5尺等間・梁行6尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.09m (13.5尺)、梁行が3.64m (12尺)となる。出土遺物は、須恵器鉢(112)がある。掘立柱建物の時期は、およそ8世紀中葉から後葉であろう。

⑤SB168 F・G15区からF・G16区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で東西棟である。建物の方位は、北である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で径0.2～0.5mで、深さ0.3～0.6mである。建物規模は、桁行3.28～3.62m・梁行3.2～3.4mで、柱間寸法は桁行4尺+4尺+3尺・梁行4尺+6尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が3.33m (11尺)、梁行が3.03m (10尺)となる。出土遺物はないため、掘立柱建物の時期の決め手に欠く。

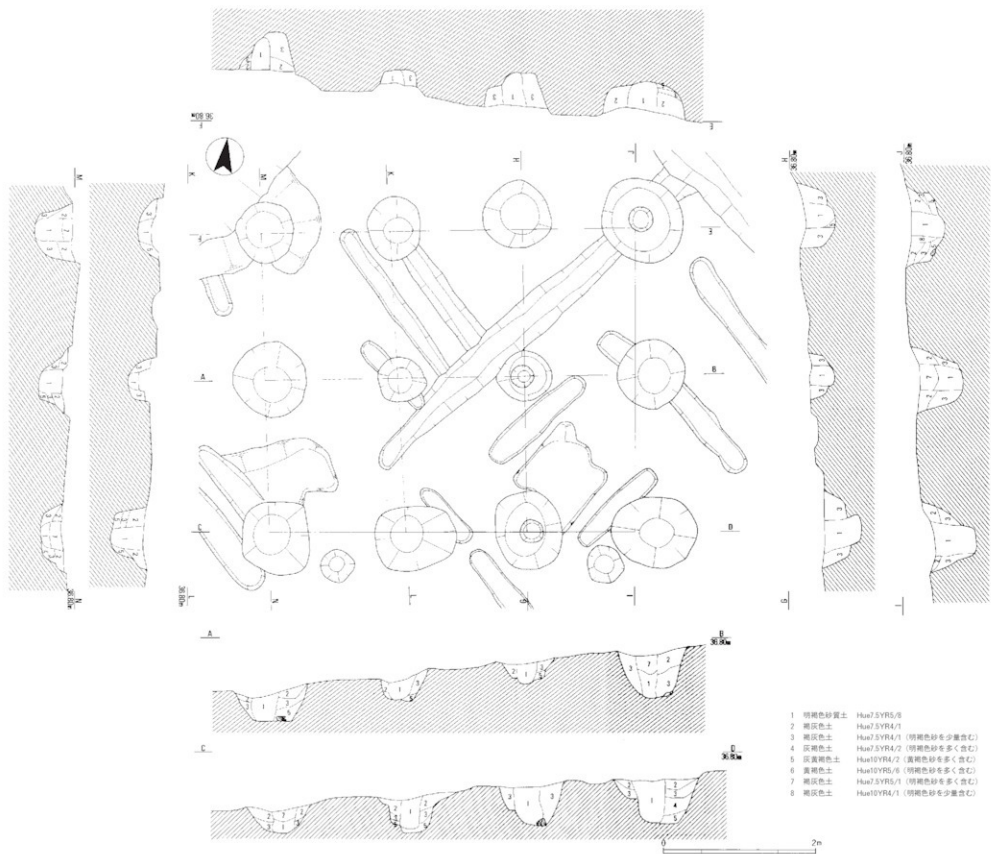
⑥SB169 E・F20区からE・F21区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で東

西棟である。建物の方位は、北である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.5～0.6mである。深さ0.2～0.35mである。南側柱は後世の溝によって削平されたとみられる。建物規模は、桁行4.5～4.6m・梁行3.28mで、柱間寸法は桁行5尺+5.5尺+5尺・梁行5尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.7m (15.5尺)、梁行が3.03m (10尺)となる。出土遺物はないため、掘立柱建物の時期の決め手に欠く。

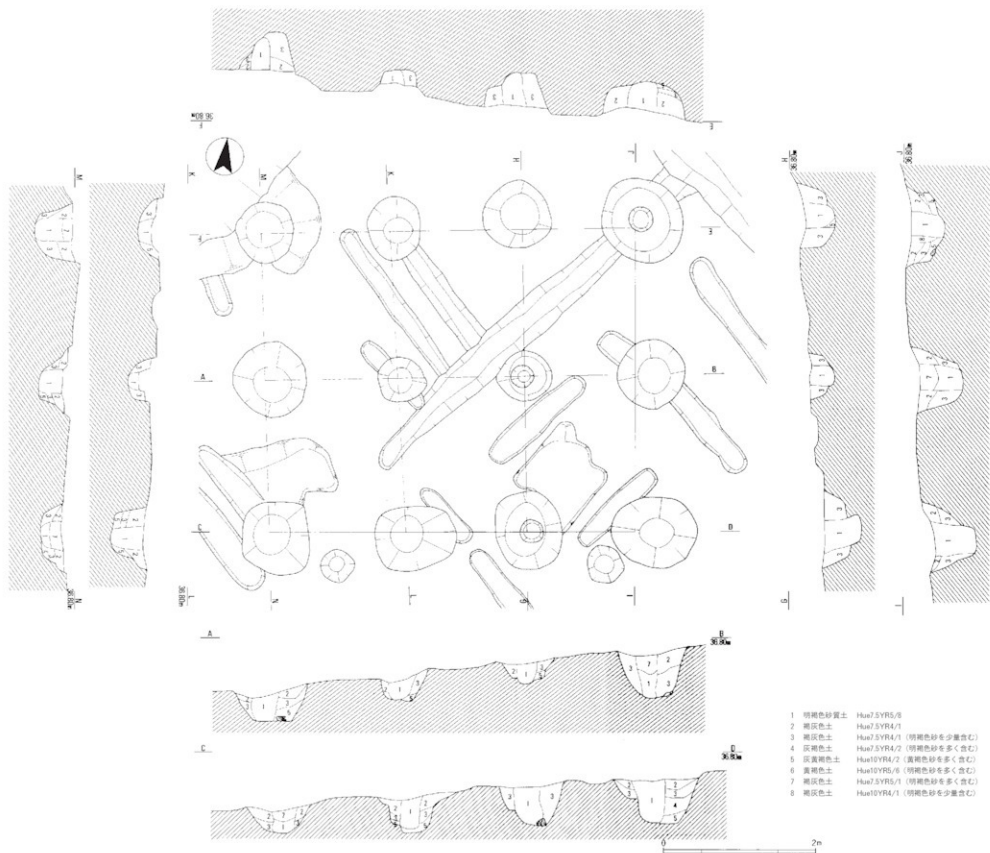
⑦SB170 D・E14区からD・E15区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で東西棟である。建物方位は、北で東に振れる。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.3～0.7mで、深さ0.3～0.7mでやや西側の柱が深い。建物規模は、桁行3.7～3.75m・梁行3.2～3.25mで、柱間寸法は桁行4.5尺+4尺+4尺・梁行5.5尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が3.79m (12.5尺)、梁行が3.33m (11尺)となる。出土遺物は、土師器甕・製塩土器(113～115)がある。掘立柱建物の時期は、およそ8世紀中頃以降であろう。

⑧SB171 E・F23区からE・F24区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で南北棟である。建物の方位は北で西に振れる。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.35～0.7mで、深さ0.1～0.5mで南側の柱穴は、浅く後世の削平によるものとみられる。建物規模は、桁行6.62～6.7m・梁行4.06～4.28mで、柱間寸法は桁行5.5尺+10尺+6.5尺・梁行6.5尺+7尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が6.67m (22尺)、梁行が4.09m (13.5尺)となる。出土遺物はないため、掘立柱建物の時期の決め手に欠く。

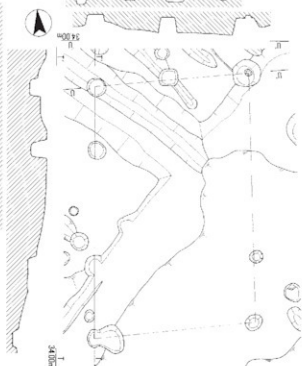
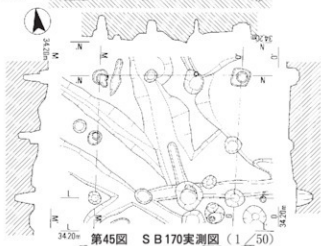
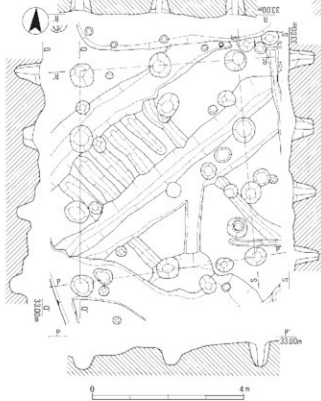
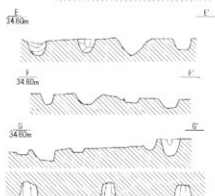
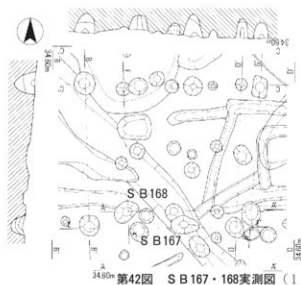
⑨SB172 C・D・E17区からC・D・E19区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行3間の側柱建物である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.4～0.65m、深さ0.35～0.6mである。建物の方位は、梁行が北で東に振れる。建物規模は桁行4.32～4.5m・梁行4.45～4.52mで、柱間寸法は桁行5.5



第41图 SB164美国图 (1/30)



第41图 SB164美渊图 (1/50)



第43图 SB165实测图 (1/50)

第46图 SB171实测图 (1/50)

尺+4尺+5.5尺・梁行4.5尺+5.5尺+5.5尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.55m(15尺)、梁行が4.7m(15.5尺)となる。出土遺物は、須恵器杯蓋(116)がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ8世紀中葉から後葉であろう。

10 SB173 C・D・E17区からC・D・E19区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行3間の側柱建物である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.4~0.7mで、深さ0.15~0.5mである。建物の方位は北である。建物規模は、桁行6.32~6.42m・梁行6.32~6.48mで、柱間寸法は桁行7尺+5.5尺+8.5尺・梁行7尺+7尺+8尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が6.36m(21尺)、梁行が6.67m(22尺)となる。出土遺物は、土師器杯・高杯・須恵器杯蓋・甕(117~120)がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ8世紀中頃以降であろう。

11 SB174 C・D・E17区からC・D・E19区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行4間×梁行3間の側柱建物で南北棟である。建物の方位は北である。掘立柱建物の柱掘形はほとんどが円形で0.3~0.75mで、深さ0.3~0.8mである。建物の方位は、北である。建物規模は、桁行7.2~7.7m・梁行6.86~7.42mで、柱間寸法は桁行6.5尺+6.5尺+7尺+4.5尺・梁行6.5尺+9.5尺+8.5尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が7.42m(24.5尺)、梁行が7.42m(24.5尺)となる。出土遺物はないため、掘立柱建物の時期の決め手に欠く。

12 SB175 A・B18区からA・B19区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で南北棟である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.3~0.6m、深さ0.2~0.6mである。建物の方位は、北で西に振れる。建物規模は、桁行5.72~5.96m・梁行3.94~4.06mで、柱間寸法は桁行6尺+6.5尺+6.5尺・梁行6.5尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が5.76m(19尺)、梁行が3.94m(13尺)となる。出土遺物は、土師器甕(121)がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ8世

紀中頃以降であろう。

3) 土坑

① SK81 G19区からG20区において検出した。調査区の東側やや北よりである。平面形はやや楕円形で、長径1.91m・短径1.82m・深さ0.15mである。遺物は土師器杯・須恵器杯身(138~140)が出土している。遺構の時期は、おおよそ8世紀中葉であろう。

② SK90 E16区において検出した。調査区の中央やや東よりである。平面形はやや楕円形で、長径1m・短径0.88m・深さ0.47mである。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

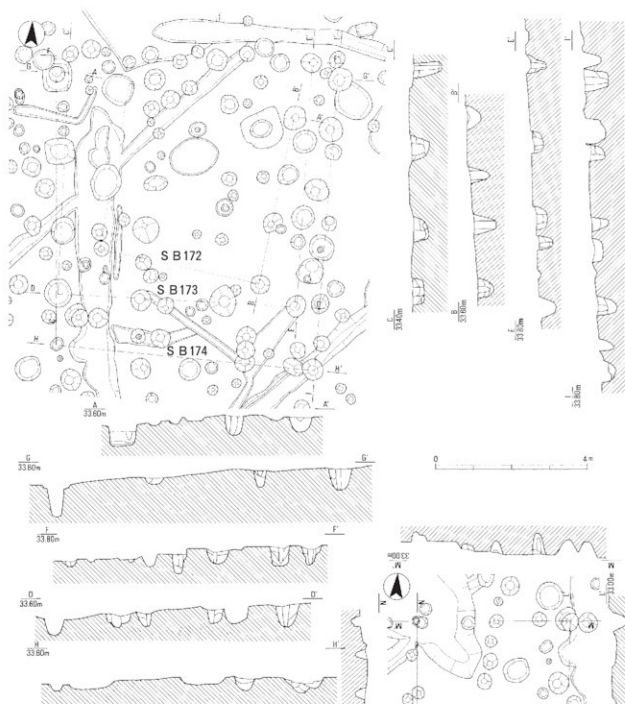
③ SK142 A9区において検出した。調査区西側南壁そばである。調査区によって全面検出できなかったが平面形はやや楕円形で、長径0.64m・短径0.52m・深さ0.18mである。すぐ東側には、竪穴住居が存在しておりその貯蔵穴の可能性もある。遺物は土師器甕(141)が出土している。遺構の時期は、おおよそ8世紀中葉であろう。

④ SK143 B16区において検出した。方形周溝墓の14号墓そばである。平面形は長方形で、長辺5.62m・短辺1.73m・深さ0.33~0.47mである。現状では、何の遺構か不明である。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

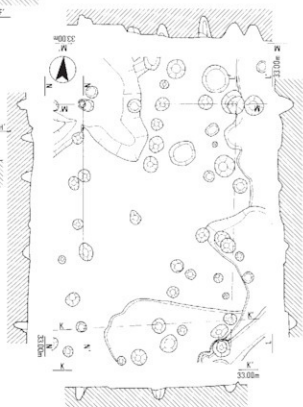
4) 溝

① SD47 調査区中央部やや南よりのD14区からD15区にかけて検出した。竪穴住居SH50のほぼ北隣に位置している。ほぼ「コ」の字状に掘削されたものである。西側から北側にかけてのコーナー部分は、やや緩やかに屈折して、北側から東側にかけては、やや鋭角に屈折し途中でなくなる。溝の規模は、幅0.64~0.81m・深さ0.1~0.3mである。竪穴住居の壁周溝の可能性は、充分ある。遺物は、知多式製塩土器(144)が出土している。遺構の時期は、おおよそ8世紀中葉であろう。

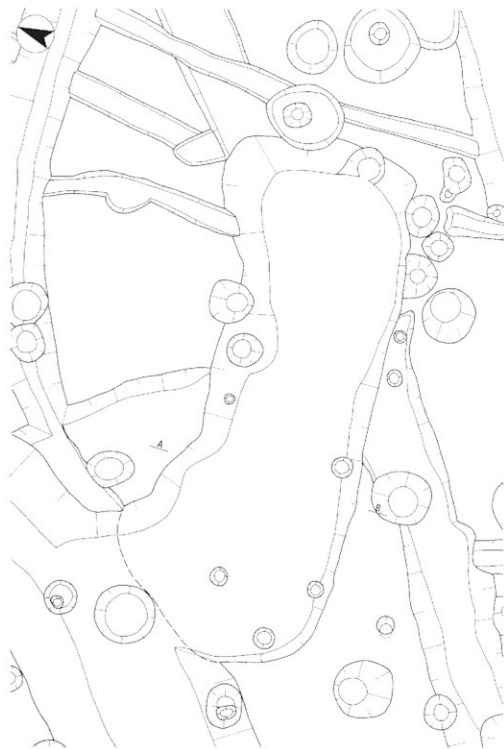
② SD76 調査区中央部やや南よりのD17・18区からB19・20区にかけて検出した。東西方向に掘削されたものである。幅0.61~1.02m・深さ0.05~0.2mである。耕作溝と比較して掘削の方向が異なり、竪穴住居の壁周溝にしては長すぎである。区画に伴う溝であろうか。遺物は、須恵器杯身・短頸甕(150・



第47图 SB 172·173·174实测图 (1/50)



第48图 SB 175实测图 (1/50)



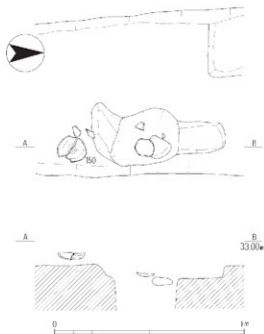
- 1 褐色砂質土 (C-24)・黄褐色砂質土混り・0.5~1cm礫含C)
- 2 褐色砂質土 (0.5~2cm礫含C)
- 3 褐色砂質土 (1~3cm礫含C)
- 4 褐色砂質土 (明褐色砂質土混り)
- 5 褐色砂質土 (0.5~1cm礫含C)
- 6 褐色砂質土 (明褐色砂質土混り・0.3~0.5cm礫含C)
- 7 褐色砂質土 (C-24)・黄褐色砂質土混り・0.5~1cm礫含C)
- 8 C-24・黄褐色土 (明褐色砂質土・0.5~1cm礫含C)
- 9 褐色土 (C-24)・黄褐色土混り)
- 10 褐色土 (明褐色砂質土・0.5~1cm礫含C)

第49図 SK143実測図 (1/40)

151) が出土している。建物の時期は、おおよそ 8 世紀中葉以降であろう。

③ S D 84 調査区中央部中程の E17・18区にかけて検出した。幅0.4m・深さ0.07mである。耕作溝と比較して掘削の方向が異なり、竪穴住居の壁周溝にしては長すぎである。竪穴住居の排水溝や区画に伴う溝の可能性もある。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

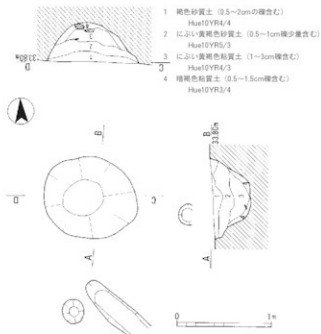
④ S D 92 (S D 95・S D 101・S D 104) 調査区



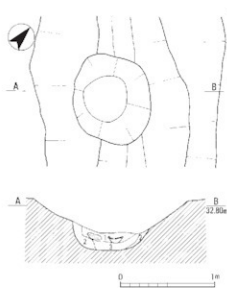
第50図 S D 76遺物出土状況図 (1/20)

中央部やや南よりの D15・16区から H17区にかけて検出した。幅0.27~0.41m・深さ0.05~0.12mである。耕作溝と比較して掘削の方向が異なり、竪穴住居の壁周溝にしては長すぎである。区画溝の可能性がありえる。遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯身・碗 (155~157・161) が出土している。遺構の時期は、おおよそ 8 世紀中葉であろう。

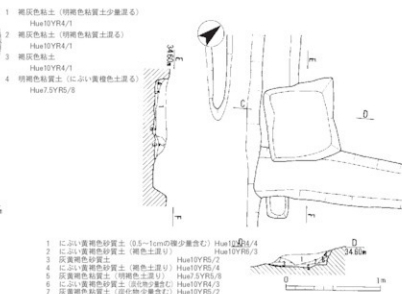
⑤ S D 98 調査区中央部やや南よりの D15区にかけて検出した。ほぼ「コ」の字状に掘削されたもの



第51図 S K 90実測図 (1/40)



第52図 S K 166実測図 (1/40)



第53図 S K 73実測図 (1/40)

である。溝の規模は、幅0.41m・深さ0.05mである。竪穴住居の壁周溝の可能性が高い。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

⑥SD108（竪穴住居SH157） 調査区中央部北よりH16区において検出した。ほぼ「コ」の字状に掘削されたものである。溝の規模は、幅0.3m・深さ0.05～0.1mである。竪穴住居の壁周溝とみられる。遺物は、須恵器甕（158）が出土している。遺構の時期は、およそ7世紀末頃から8世紀中葉であろう。

⑦SD109 調査区中央部北よりのH16区において検出した。溝SD108のすぐ北側である。ほぼ直線的であるが、溝の規模は幅0.39m・深さ0.05～0.18mである。竪穴住居の壁周溝もしくは排水溝の可能性が高い。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

⑧SD147 調査区中央部南よりのC19区において検出した。溝の規模は、幅1.86m・深さ0.15～0.2mである。竪穴住居の壁周溝もしくは排水溝の可能性が高いとみられる。遺物は、須恵器杯身（169）が出土している。遺構の時期は、およそ7世紀末頃から8世紀中葉であろう。

⑨SD159 調査区中央部北よりのG15区において検出した。溝の規模は、幅0.2m・深さ0.1mである。竪穴住居の壁周溝もしくは排水溝の可能性が高いとみられる。遺物は、須恵器杯身・甕（167・168）が出土している。遺構の時期は、およそ7世紀末頃から8世紀中葉であろう。

（3）平安時代

全体的に遺構として確認できるものは、少ない。集落跡とみられるが、遺物に緑釉陶器・製塩土器などが出土しており一般的な集落と異なる要素を有していたと推測されそうである。

2）土坑

①SK12 調査区西側北よりのI10区において検出した。ほぼ1号墓の東側の周溝上に位置している。平面形はやや不整な楕円形で、長径1.58m・短径0.98m・深さ0.08～0.36mである。遺物は灰釉陶器碗・ロクロ土師器（222～224）が出土している。遺構の時期は9世紀中葉であろう。

②SK107 調査区中央部やや東よりE18区にお

いて検出した。SH100の南コーナー部分に位置している。平面形は楕円形で、長径0.96m・短径0.75m・深さ0.19mである。遺物は灰釉陶器碗・皿・鉢・双耳壺（230～236）が出土している。良好な資料である。遺構の時期は9世紀中葉であろう。

3）溝

①SD129 調査区中央部北よりのF16区において検出した。溝の規模は幅0.3～0.86m・深さ0.1～0.2mである。遺物は灰釉陶器碗等（225～229）が出土している。遺構の時期は9世紀中葉であろう。

（4）鎌倉時代

平安時代から比べて最も遺構が少ない。確認できた遺構は、土坑ないし溝であり山村遺跡のこの時期は、完全に衰退してしまっていたとみられる。

1）土坑

①SK73 調査区中央部北よりであるI17区において検出した。平面形は、やや長方形に近い。長径0.8m・短径0.75m・深さ0.18mである。土坑の埋土は、炭を非常に多く含んでおり、遺構の底面は被熱を受けて赤く変色している。中世墓である可能性も充分ある。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

②SK166 調査区東側やや北よりであるF21区において検出した。SD123掘削後に確認した。平面形はほぼ円形で、長径1m・短径0.84m・深さ0.23mである。この遺構の埋土中から完形の陶器碗が出土している。陶器碗（山茶碗）（249）は、藤澤良祐氏の編年で尾張型の第5形式で時期は13世紀中頃とみられる。

（5）近世以降

丘陵斜面全体に東西及び南北方向に掘削された溝が無数に存在する。昭和時代において耕作地であったことが判明しており、耕作に伴う溝であろうことは、間違いないであろう。ここでは、近世以降として扱っているが実際は、もっと新しい時代である可能性が高い。

1）溝

①SD29（SD66・SD77） 調査区の中ほどを東西方向に掘削されたものである。幅1.2m・深さ0.22mである。西側は、SD29と結合して止まる。東側は、ほぼ直角に屈折して南方向に掘削されてい

る。耕作に伴う溝であろうとみられる。遺物には、須恵器杯蓋・杯身・土師器杯(142・143・147～149)が出土しているが、他の時代の遺構を削平した際の混じりこみであろうとみられる。

② S D 56 G16からG17区にかけて検出した調査区の中ほど北よりにおいて東西方向に掘削されたものである。幅0.5m・深さ0.11mである。耕作溝であろう。遺物は須恵器甕(145)が出土しているが、他の時代の遺構を削平した際の混じりこみであろうとみられる。

③ S D 63 調査区の中央部中程のE17区からF18区にかけて検出した。溝の規模は、幅0.26m・深さ0.06mである。耕作溝とみられ東西方向に掘削されたものである。西側は、S D 59・130と同一の溝とみられる。

遺物は、土師器杯(146)があるが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑤ S D 65 調査区はやや東側北よりのH18区からI18区にかけて検出した。南北方向に掘削された耕作溝とみられる。溝の規模は、幅0.96m・深さ0.08～0.2mである。遺物は、土師器甕・壺底部(165・166)が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑥ S D 83 調査区中央部北よりのF15区において検出した。東西方向に掘削されたものである。幅1.17m・深さ0.2mである。耕作溝であろう。遺物は、土師器杯・須恵器杯身(152・153)が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑦ S D 86 調査区東側南よりのC20区において検出した。南北方向に掘削されたものである。幅0.42m・深さ0.07～0.1mである。耕作溝であろう。遺物は、須恵器杯身(154)が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑧ S D 110 調査区中央部北よりのG17区において検出した。東西方向に掘削されたものである。溝の規模は、幅0.28m・深さ0.03mである。耕作溝であろう。遺物は、須恵器長頸壺・短頸壺(159・160)が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑨ S D 114 調査区中央部東よりのF21区において検出した。東西方向に掘削されたものである。溝

の規模は、幅0.38m・深さ0.04～0.1mである。耕作溝とみられる。遺物は、須恵器杯蓋(163)が出土しているが堅穴住居SH112からの混じりこみである可能性が大である。

⑩ S D 122 調査区東側やや北よりであるF21区において検出した。東西方向に掘削されたものである。溝の規模は、幅0.19～0.49m・深さ0.03～0.14mである。耕作溝とみられる。遺物は陶器碗(山茶碗)(252)が出土している。藤澤良祐氏の編年の尾張型第6形式で、時期は13世紀中頃とみられる。

⑪ S D 123 調査区中央部東よりのF20区からG22区にかけて検出した。東西方向に掘削されたもので、S D 29に取り付く。この溝の下層から土坑SK166を確認している。溝の規模は、幅1.29～1.86m・深さ0.23～0.28mである。耕作溝とみられる。遺物は、須恵器杯身(164)が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

遺構番号	地区名	遺構名	形状	検出規模	時期	備考
S D 1	G 6他	溝	—	幅0.4~0.9m・深さ0.2~0.23m	近世以降	耕作溝・SD33と繋がる
S D 2	I 11他	溝	—	幅0.82~1.02m・深さ0.15~0.3m	近世以降	耕作溝・SD5と繋がる
S D 3	I 13他	溝	—	幅0.78m・深さ0.1~0.2m	近世以降	耕作溝・SD8と繋がる
S D 4	H 8他	溝	—	東側田溝幅1.16m・深さ0.2m 南側田溝幅2.72m・深さ0.75m 西側田溝幅2.14m・深さ0.4m	弥生時代中期	方形田溝第1号田溝
S D 5	I 10他	溝	—	幅0.52~0.66m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝・SD2と繋がる
S D 6	G 7他	溝	—	幅1.3m・深さ0.2m	近世以降	耕作溝・SD18・56と重なる
S D 7	I 13他	溝	—	幅0.54~0.66m・深さ0.2~0.3m	弥生時代中期	方形田溝第3号田溝
S D 8	H 13他	溝	—	幅0.6m・深さ0.1~0.15m	近世以降	耕作溝・SD3と繋がる
S D 9	I 12他	溝	—	幅1~1.38m・深さ0.1~0.27m	弥生時代中期	方形田溝第2・3号田溝
S D 10	I 8他	溝	—	幅1.5m・深さ0.3m	近世以降	耕作溝
S D 11	I 13他	溝	—	幅0.61m・深さ0.32~0.5m	弥生時代中期	方形田溝第2・4号田溝
S K 12	I 10他	土坑	不整形	長径1.58m・短径0.98m・深さ0.08~0.36m	平安時代	灰釉陶器等
S D 13	I 14他	溝	—	幅0.72m・深さ0.1~0.2m	近世以降	耕作溝・SD22と同一
S D 14	I 15他	溝	—	全長2.13m・幅0.75m・深さ0.2~0.3m	弥生時代中期	方形田溝第4・5号田溝
S D 15	H 15他	溝	—	幅0.5m・深さ0.12m	近世以降	耕作溝・SD17・56と繋がる
S D 16	H 16他	溝	—	全長10.81m・幅2.06m・深さ0.48~0.6m	弥生時代中期	方形田溝第11号田溝
S D 17	H 15他	溝	—	幅0.55m・深さ0.08m	近世以降	耕作溝・SD15・56と繋がる
S D 18	G 7他	溝	—	幅0.42m・深さ0.2m	近世以降	耕作溝・SD6・56と重なる
S D 19	F 12他	溝	—	全長7.48m・幅1.9m・深さ0.09~0.37m	弥生時代中期	方形田溝第10・11号田溝
S D 20	G 11他	溝	—	全長6.4m・幅1.63m・深さ0.19~0.46m	弥生時代中期	方形田溝第10号田溝
S D 21	G 14他	溝	—	幅0.25m・深さ0.05~0.07m	近世以降	耕作溝
S D 22	G 14他	溝	—	幅1m・深さ0.03~0.2m	近世以降	耕作溝・SD13と同一
S D 23	G 9他	溝	—	全長7.16m・幅1.6m・深さ0.28~0.42m	弥生時代中期	方形田溝第9・10号田溝
S D 24	H 8他	溝	—	幅0.45~0.6m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝・SD18・56と繋がる
S D 25	G 8他	溝	—	全長6.68m・幅1.1m・深さ0.36~0.53m	弥生時代中期	方形田溝第9号田溝
S D 26	G 8他	溝	—	幅0.3m・深さ0.08m	近世以降	耕作溝
S D 27	G 7他	溝	—	幅1.07m・深さ0.5m	近世以降	耕作溝・SD18・57と繋がる
S D 28	E 7他	溝	—	幅0.22m・深さ0.04m	近世以降	耕作溝
S D 29	D 12他	溝	—	幅1.2m・深さ0.22m	近世以降	耕作溝・SD66・77と同一
S D 30	C 12他	溝	—	幅1.26m・深さ0.3m	近世以降	耕作溝・SD65と同一
S D 31	E 7他	溝	—	全長6.12m・幅1.28m・深さ0.4~0.5m	弥生時代中期	方形田溝第9・18号田溝
S D 32	E 11他	溝	—	全長8.38m・幅0.8~1.5m・深さ0.05~0.07m	弥生時代中期	方形田溝第10・12号田溝
S D 33	D 6他	溝	—	幅1.48~2.12m・深さ0.3~0.66m	近世以降	耕作溝
S D 34	E 13他	溝	—	全長9.12m・幅0.78~1m・深さ0.1~0.2m	弥生時代中期	方形田溝第11・13号田溝
S D 35	D 13他	溝	—	幅1.4m・深さ0.3m	近世以降	耕作溝・SD30と同一
S H 36	D 10他	竪穴住居	正方形?	長辺4.18m・短辺3.3m	奈良時代	耕作溝
S D 37	A 8他	溝	—	幅0.35m・深さ0.1~0.2m	近世以降	耕作溝
S D 38	A 9他	溝	—	幅0.4~0.7m・深さ0.1~0.15m	近世以降	耕作溝・SD18と繋がる
S D 39	A 7他	溝	—	幅0.44~1.05m・深さ0.05~0.13m	弥生時代中期?	耕作溝
S D 40	A 7他	溝	—	幅0.7~0.8m・深さ0.07~0.15m	近世以降	耕作溝
S D 41	A 7他	溝	—	幅1.36~1.46m・深さ0.39~0.51m	近世以降	耕作溝・SD40と同一
S H 42	B 8他	竪穴住居	長方形?	長辺3.62m・短辺3.3m	奈良時代	耕作溝
S D 43	欠番					
S D 44	C 14他	溝	—	幅0.48m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
S D 45	欠番					
S D 46	B 12他	溝	—	全長5.44m・幅2.06m・深さ0.1~0.15m	弥生時代中期	方形田溝第12号田溝
S D 47	D 14他	溝	—	幅0.64~0.81m・深さ0.1~0.3m	時期不明	竪穴住居住居壁田溝?
S D 48	A 11他	溝	—	幅0.86m・深さ0.24m	近世以降	耕作溝・SD28と繋がる
S D 49	C 10他	溝	—	全長6.66m・幅1.4m・深さ0.12~0.3m	弥生時代中期	方形田溝第12号田溝
S H 50	C 14他	竪穴住居	正方形	長辺6.6m・短辺6.23m	奈良時代	耕作溝
S D 51	A 11他	溝	—	幅0.18m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居S H 149の壁田溝
S H 52	F 15他	竪穴住居	正方形?	長辺3.7m以上・短辺2.55m以上・深さ0.03~0.27m	奈良時代	耕作溝
S D 53	H 17他	溝	—	幅0.24m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
S D 54	G 17他	溝	—	全長6.78m・幅1.14m・深さ0.1~0.2m	弥生時代中期?	方形田溝第19号田溝
S D 55	I 16他	溝	—	幅0.48m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝
S D 56	H 17他	溝	—	幅0.5m・深さ0.11m	近世以降	耕作溝
S D 57	A 12他	溝	—	幅1.16m・深さ0.46m	弥生時代中期	方形田溝第14号田溝
S D 58	I 18他	溝	—	幅0.58m・深さ0.05~0.11m	近世以降	耕作溝
S D 59	D 14他	溝	—	幅0.39~0.59m・深さ0.16~0.17m	近世以降	耕作溝・SD130・63と同一
S D 60	D 17他	溝	—	幅0.45m・深さ0.07~0.1m	近世以降	耕作溝
S D 61	A 17他	溝	—	幅0.42m・深さ0.09m	近世以降	耕作溝

第2表 遺構一覧表(1)

遺構番号	地区名	遺構名	形状	検出規模	時期	備考
S D61	A17他	溝	—	幅0.42m・深さ0.09m	近世以降	耕作溝
S D62	E18他	溝	—	幅1.44m・深さ0.2~0.3m	近世以降	耕作溝
S D63	F18他	溝	—	幅0.26m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
S D64	G17他	溝	—	幅0.33m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
S D65	H18他	溝	—	幅0.96m・深さ0.08~0.2m	近世以降	耕作溝
S D66	G18他	溝	—	幅0.82m・深さ0.25~0.45m	近世以降	耕作溝・SD29・77と同一
S D67	D19他	溝	—	幅0.7m・深さ0.15~0.3m	近世以降	耕作溝
S D68	D16他	溝	—	幅0.62m・深さ0.04m	近世以降	耕作溝
S D69	I16他	溝	—	検出長3.4m・幅1.28m・深さ0.06~0.44m	弥生時代中期	方形周溝第6号墓周溝
S D70	B16他	溝	—	幅0.62m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
S D71	H15他	溝	—	幅1.55m・深さ0.1~0.32m	弥生時代中期	方形周溝第11・19号墓周溝
S D72	I15他	溝	—	幅0.28m・深さ0.02~0.06m	近世以降	耕作溝
S K73	土坑	楕円形	—	長径0.8m・短径0.75m・深さ0.18m	鎌倉時代?	焼土痕跡残る。中世墓?
S D74	I18他	溝	—	全長4.6m・幅0.78m・深さ0.12~0.18m	弥生時代中期	方形周溝第19号墓周溝
S D75	A15他	溝	—	北側側溝幅2.08m・深さ0.5m 東側側溝幅1.92m・深さ0.25~0.4m	弥生時代中期	方形周溝第14号墓周溝
S D76	C17他	溝	—	幅0.61~1.02m・深さ0.05~0.2m	奈良時代	直立柱建物に伴う溝?
S D77	B21他	溝	—	幅0.86m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝
S D78	A20他	溝	—	幅0.9m・深さ0.17~0.2m	近世以降	耕作溝
S D79	B22他	溝	—	幅0.63m・深さ0.1~0.2m	近世以降	耕作溝
S H80	A21他	竪穴住居	長方形	長径5.5m・短径4.54m	奈良時代	
S K81	G19他	土坑	楕円形	長径1.91m・短径1.82m・深さ0.15m	奈良時代	
S D82	I17他	溝	—	幅0.26m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
S D83	G15他	溝	—	幅1.17m・深さ0.2m	奈良時代	不明
S D84	E17他	溝	—	幅0.4m・深さ0.07m	奈良時代	
S H85	G19他	竪穴住居	不明	焼土範囲長径0.57m・短径0.47m	奈良時代	
S D86	C20他	溝	—	幅0.42m・深さ0.07~0.1m	近世以降	耕作溝
S H87	B17他	竪穴住居	正方形	一辺5.4m以上	奈良時代	
S D88	D15他	溝	—	幅0.54m・深さ0.2m	弥生時代中期	方形周溝第13号墓周溝
S D89	A17他	溝	—	全長5.7m・幅0.9~2.51m・深さ0.15~0.27m	弥生時代中期	方形周溝第14号墓周溝
S K90	E16他	土坑	—	長径1m・短径0.88m・深さ0.47m	奈良時代	
S D91	B19他	溝	—	幅0.61~1.02m・深さ0.05~0.2m	奈良時代	SD76と同一遺構
S D92	C15他	溝	—	幅0.27m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
S H93	B15他	竪穴住居	正方形	一辺3m以上	奈良時代	
S H94	E14他	竪穴住居	長方形	長径3.14m以上・短径2.35m以上・深さ0.1~0.2m	奈良時代	
S D95	D15他	溝	—	幅0.41m・深さ0.11m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
S D96	C15他	溝	—	幅0.27m・深さ0.03~0.05m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
S D97	E6他	溝	—	長4.31m・幅0.56~0.75m・深さ0.03~0.12m	近世以降	耕作溝
S D98	C16他	溝	—	幅0.41m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居 S H93の壁周溝?
S K99	E15他	土坑	長方形	長径1.2m・短径0.86m・深さ0.05m	時期不明	
S H100	F18他	竪穴住居	正方形	長径5.55m・短径4.77m	奈良時代	
S D101	G17他	溝	—	幅0.26m・深さ0.06m	奈良時代	
S D102	E15他	溝	—	全長9.12m・幅0.78~1m・深さ0.1~0.2m	弥生時代中期	SD34と同一遺構・方形周溝第11号墓周溝
S D103	G17他	溝	—	幅0.2m・深さ0.05m	時期不明	竪穴住居の壁周溝・排水路?
S D104	F16他	溝	—	幅0.29m・深さ0.12m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝?
S D105	G17他	溝	—	幅0.5m・深さ0.2m	奈良時代	竪穴住居の排水路
S K106	F17他	土坑	楕円形	長径1.55m・短径0.62m・深さ0.1~0.15m	平安時代	ロ?ロ土器器
S K107	F18他	土坑	楕円形	長径0.96m・短径0.75m・深さ0.19m	平安時代	灰輪陶器
S D108	G16他	溝	—	幅0.3m・深さ0.05~0.1m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
S D109	G15他	溝	—	幅0.39m・深さ0.05~0.18m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
S D110	G17他	溝	—	幅0.28m・深さ0.03m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
S D111	G19他	溝	—	全長9.15m・幅1.36~1.66m・深さ0.2~0.3m	弥生時代中期	方形周溝第17号墓周溝
S H112	F21他	竪穴住居	?	長径3.3m以上・短径2.9m以上	奈良時代	出土遺物良好
S D113	欠番					
S D114	F21他	溝	—	幅0.38m・深さ0.04~0.1m	近世以降	耕作溝
S D115	C7他	溝	—	全長4.13m・幅0.64~0.82m・深さ0.09~0.13m	弥生時代中期?	
S H116	B20他	竪穴住居	長方形	一辺4.4m以上	奈良時代	
S D117	F22他	溝	—	幅1.1m・深さ0.07m	弥生時代中期	方形周溝第17号墓周溝
S H118	D16他	竪穴住居	長方形	長径4.72m・短径4.28m・深さ0.3m	奈良時代	
S D119	D20他	溝	—	全長3.6m・幅1.96m・深さ0.03~0.06m	弥生時代中期	方形周溝第16号墓周溝
S H120	D23他	竪穴住居	長方形	長径6.25m・短径3.49m以上	奈良時代	

第3表 遺構一覧表(2)

遺構番号	地区名	遺構名	形状	検出規模	時期	備考
S H121	C 21他	竪穴住居	長方形	長辺4.58m・短辺3.98m	奈良時代	
S D122	F 21他	溝	—	幅0.19～0.49m・深さ0.03～0.14m	近世以降	耕作溝
S D123	E 21他	溝	—	幅1.29～1.86m・深さ0.23～0.28m	近世以降	耕作溝
S D124	D14他	溝	—	幅0.24m・深さ0.13m	奈良時代	竪穴住居の壁間溝
S D125	C13他	溝	—	幅0.18m・深さ0.03m	奈良時代	SH450内の壁間溝（別の竪穴住居?）
S D126	C14他	溝	—	幅0.13m・深さ0.05m	奈良時代	SH450内の壁間溝（別の竪穴住居?）
S D127	F 22他	溝	—	幅0.2～0.26m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居の排水路・SD136と同一
S D128	I 20他	溝	—	全長5.28m・幅1.96m・深さ0.03～0.2m	弥生時代中期	方形周溝第17号周溝溝
S D129	F16他	溝	—	幅0.3～0.86m・深さ0.1～0.2m	時期不明	竪穴住居の壁間溝・排水路
S H130	E17他	竪穴住居	?	長辺3.5m以上・短辺0.82m以上	奈良時代	竪穴住居SH100によって削平される
S D131	F18他	溝	—	幅0.21m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居SH100の壁間溝
S D132	C 20他	溝	—	幅0.18m・深さ0.05m	時期不明	
S D133	G18他	溝	—	幅0.39～1m・深さ0.09～0.25m	奈良時代	竪穴住居SH100の壁間溝
S D134	E18他	溝	—	全長3.3m・幅1～1.5m・深さ0.02m	奈良時代	方形周溝第16号周溝溝
S K135	E18他	土坑	—	長径1.34m・短径1.12m・深さ0.05m	時期不明	
S D136	F 20他	溝	—	幅0.2～0.26m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居の排水路
S K137	E 22他	土坑	楕円形	長径0.95m・短径0.89m・深さ0.04m	奈良時代	竪穴住居の貯蔵穴
S K138	G 23他	土坑	円形	長径1.11m・短径1.08m・深さ0.45m	時期不明	
S D139	E16他	溝	—	幅0.16m・深さ0.03～0.1m	時期不明	竪穴住居の壁間溝・排水路
S D140	D17他	溝	—	幅0.08～0.1m・深さ0.03m	時期不明	
S D141	G18他	溝	—		時期不明	土坑か竪穴住居とみられる。
S K142	A 9他	土坑	楕円形	長径0.64m・短径0.52m・深さ0.18m	時期不明	
S K143	B16他	土坑	長方形	長径5.62m・短径1.73m・深さ0.33～0.47m	時期不明	
S D144	F19他	溝	—	幅0.22m・深さ0.14m	奈良時代	SH100の壁間溝
S D145	E 9他	溝	—	全長1.32m・幅0.78m・深さ0.05～0.07m	弥生時代中期	方形周溝第9号周溝溝
S D146	D19他	溝	—	幅0.55m・深さ0.03m	奈良時代	竪穴住居の壁間溝・排水路
S D147	C19他	溝	—	幅1.86m・深さ0.15～0.2m	弥生時代中期	方形周溝第15号周溝溝
S K148	I12他	土坑	—	長径1.03m・短径0.97m・深さ0.16m	時期不明	
S D149	A11他	竪穴住居	—	一辺3.9m	奈良時代	
S K150	E 5他	土坑	—	長径0.6m・短径0.48m・深さ0.24m	弥生時代中期	方形周溝第7号周溝溝
S D151	F 2他	溝	—	北側周溝全長6.25m・幅1.47～2.12m・深さ0.28～0.38m 東側周溝全長8m・幅2.08～2.9m・深さ0.18～0.7m	弥生時代中期	方形周溝第8号周溝溝
S D152	I 2他	溝	—	幅0.3m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝
S D153	D 5他	溝	—	幅2.7m・深さ0.5m	時期不明	
S D154	C 4他	溝	—	全長2.6m・幅0.93～1.04m・深さ0.15～0.25m	時期不明	
S K155	I14他	溝	—	長径1.12m・短径0.96m・深さ0.19m	時期不明	
S D156	I 2他	溝	—	北側周溝全長4.98m・幅0.86～1.38m・深さ0.07～0.15m 南側周溝全長5.06m・幅0.92～1.04m・深さ0.08～0.2m	弥生時代中期	方形周溝第1号周溝溝
S H157	G16他	竪穴住居	—	一辺7.16m以上	奈良時代	
S H158	B19他	竪穴住居	不明	焼土範囲長径1.28m・短径0.6m	奈良時代	
S H159	—	竪穴住居	不明	焼土範囲長径0.97m・短径0.8m	奈良時代	
S H160	—	竪穴住居	不明	長辺3.74m以上・短辺1.46m以上	奈良時代	
S H161	—	竪穴住居	長方形	長辺4.41m以上・短辺1.1m以上	奈良時代	
S H162	—	竪穴住居	長方形	一辺2.8m以上	奈良時代	
S B163	—	掘立柱建物	東西棟	3間×2間	奈良時代	竪柱建物
S B164	—	掘立柱建物	東西棟	3間×2間	奈良時代	竪柱建物
S B165	—	掘立柱建物	南北棟	3間×2間	奈良時代	竪柱建物
S K166	E 21	土坑	楕円形	長径1m・短径0.84m・深さ0.23m	鎌倉時代	
S B167	—	掘立柱建物	東西棟	3間×2間	奈良時代	竪柱建物
S B168	—	掘立柱建物	東西棟	3間×2間	奈良時代	竪柱建物
S B169	—	掘立柱建物	東西棟	3間×2間	奈良時代	竪柱建物
S B170	—	掘立柱建物	東西棟	3間×2間	奈良時代	竪柱建物
S B171	—	掘立柱建物	東西棟	3間×2間	奈良時代	竪柱建物
S B172	—	掘立柱建物	東西棟	3間×3間	奈良時代	竪柱建物
S B173	—	掘立柱建物	東西棟	3間×3間	奈良時代	竪柱建物
S B174	—	掘立柱建物	東西棟	3間×3間	奈良時代	竪柱建物
S B175	—	掘立柱建物	東西棟	3間×2間	奈良時代	竪柱建物
S H176	—	竪穴住居	不明	—	奈良時代	貯蔵穴?

第4表 遺構一覧表（3）

IV 遺 物

今回の発掘調査によって出土した遺物は、コンテナ箱に整理して80箱である。遺物の時期は、おおよそ弥生時代中期中葉から後葉・奈良時代・平安時代・鎌倉時代に及ぶものである。遺物の多くは、弥生時代と奈良時代のものが主である。また、土器が中心であって金属製品・石製品を若干含む。なお、個々の遺物の詳細については、遺物観察表（第5～8表）を参照されたい。

1 弥生時代

調査での弥生時代の遺物は、方形周溝墓の周溝からの出土のものが全てである。また、出土した土器は、器種別にみると細頸壺が圧倒的に多数を占めている。甕及び高杯は、ほとんど出土していない。

(1) 1号墓 (1～4)

SD 4 出土遺物 1～4は、全て細頸壺である。1は、体部が欠損しているだけでなく全体的に風化が著しく、調整が不明瞭である。おそらく体部は球形とみられる。僅かに頸部外面にハケらしき痕跡を留める。口縁端部は、やや内傾し断面方形状である。体部下半部に一次焼成の痕跡を若干残す。2は、全体的に風化が著しい。口縁部から頸部にかけては欠損している。頸部から体部にかけ横方向を中心に櫛描文が施され、縦方向に同一の原体を用いてある程度の間隔をあけて施している。下ノ庄東方遺跡2号墓のものに似ている。3は、体部が欠損しているものおそらく下膨れし球形状であろうとみられる。口縁端部は、やや内傾し尖り気味である。口縁部には、棒状浮文が2条、外面に3ヶ所に貼り付けられていたようである。遺存状況は僅かに良い程度である。4は、遺存状況があまり良くないが、頸部から体部にかけては、上から櫛描波状文、櫛描横線文、円形浮文、刺突文、櫛描横線文が施される。遺存状況は、これもあまり良い状況ではない。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

(2) 2号墓 (5～7)

SD 9 出土遺物 5は、広口壺、6・7は細頸壺とみられる。5は、風化著しく調整等不明瞭である。6は、全体的に風化著しい。頸部には横方向に4条

のヘラ描き沈線が巡る。7は、体部に4条のヘラ描き沈線が巡る。1条目の沈線に縦方向のハケ、沈線間に横方向のミガキが施されている。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

(3) 3号墓 (8・9)

SD 11 出土遺物 8は太頸壺、9は細頸壺である。8は、全体的に風化が著しく調整が不明瞭である。口縁部の瘤状突起が2個だけ残る。頸部にヘラ描き沈線が5条巡る。9は、全体的に調整が不明瞭である。頸部にはヘラ描き沈線が3条巡る。遺物の時期は、中期中葉から後葉とみられる。

(4) 4号墓 (10)

SD 14 出土遺物 10は、小型の壺とみられる。全体的に風化著しく調整が不明瞭である。口縁部から頸部にかけての形状は、全く不明である。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

(5) 7号墓 (11)

SD 156 出土遺物 11は、細頸壺とみられる。体部には細かいハケが縦方向に施される。遺物の時期は、中期中葉のものとみられる。

(6) 8号墓 (12～14)

SD 151 出土遺物 12は、壺肩部である。13・14は壺底部である。全て細頸壺で有る可能性が高い。遺物の時期は、中期後葉のものとみられる。

(7) 9号墓 (15～27)

SD 25 出土遺物 20は、細頸壺口縁部である。凹線文が3条巡る。遺物の時期は、中期後葉のものとみられる。

SD 31 出土遺物 22・23は広口壺、24は細頸壺、25は壺体部、27は壺底部である。全て全体的に風化著しく調整不明瞭な部分も認められる。22は、肩部に円形浮文、沈線が7条施される。25は、沈線が体部を巡る。しかしながら体部下半については、接合できたがやや難点があり、体部上半部という可能性も残している。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

SD 28 出土遺物 26は、中期中葉のものであろう。壺の底部とみられる。SD 31からの流れ込みとみられる。

S D 23出土遺物 15は広口壺で、瘤状突起を口縁部内面に2個一対である。口縁部は上下にがっていない。16は壺の底部で、細頸壺の可能性が高い。17は甕底部の可能性が高い。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

S D 145出土遺物 18～19・21はいずれも壺底部である。なかでも18は壺底部で穿孔されている。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

(8) 10号墓 (28～32)

S D 19出土遺物 28は細頸壺である。口縁部に凹線文はない。頸部に沈線巡る。中期中葉のものであろう。

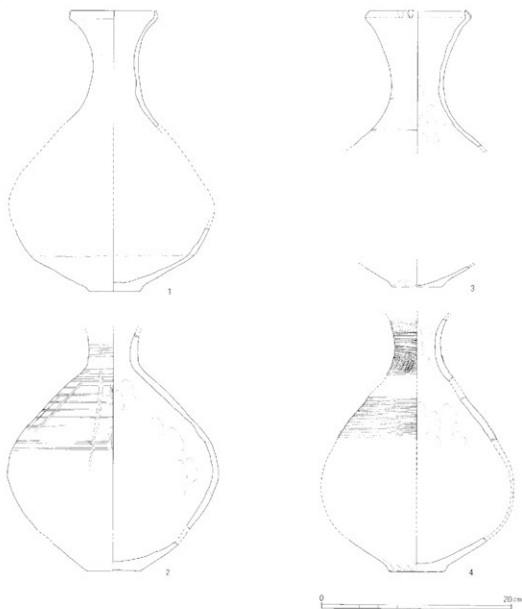
S D 20出土遺物 29・30は広口壺である。全体的に風化著しい。

S D 32出土遺物 32は太頸壺である。全体的に風化著しい。頸部から口縁部にかけて器壁は厚い。口縁部内面に瘤状突起が5個一対であろう。中期中葉のものともみられる。

(9) 11号墓 (33～37)

S D 16出土遺物 35は、細頸壺である。口縁部から頸部にかけて刺突が施された上に沈線が1条巡る。体部には、櫛描横線文の上に棒状浮文が縦方向に貼り付けられる。頸部付近に貼り付けられる類例があるものの体部に至るまでのはなく、初出のもの

1号墓



第54図 出土遺物実測図(1)

と言える。

SD34出土遺物 34は細頸壺、36は34と同一個体であろうか。37は、体部下半において最大径で下膨れの器形とみられる。細頸壺の底部であろうか。遺物の時期は、中期中葉から後葉のものであろう。

SD71出土遺物 33は、太頸壺である。4条の沈線が頸部を巡る。体部下半において最大径で下膨れの器形であろう。中期中葉のものであろう。

(10) 12号墓 (38・39)

SD46出土遺物 38は細頸壺、39は壺底部である。同一個体の可能性が高い。38の口縁部には凹線文が2条巡る。遺物の時期は、中期後葉のものである。

(11) 13号墓 (40)

SD88出土遺物 40は、細頸壺の頸部とみられる。全体的に風化著しく調整等不明瞭である。

(12) 14号墓 (45・46)

SD75出土遺物 45・46は、細頸壺である。同一個体の可能性が高い。全体的に風化著しく、調整等不明瞭である。底部が穿孔されているように見えるが、器壁が薄いことで剥落したとみられる。遺物の時期

は、中期中葉から後葉のものである。

(13) 15号墓 (41~44)

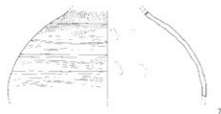
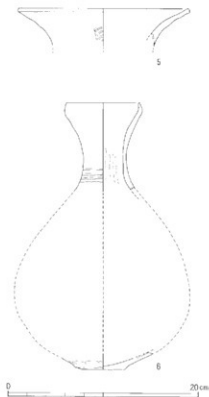
SD89出土遺物 42・43は、細頸壺である。42は、口縁部から体部にかけての部分と底部は、同一個体と考える。異なる個体であるかもしれない。口縁部に凹線文は、ない。43は、同一個体とみられる。同じく口縁部に凹線文は、見られない。遺物の時期は、中期中葉から後葉にかけてのものであろう。

SD158出土遺物 土器は、全て細頸壺である。44は、口縁部に凹線文が入り始めるものとみられる。広めで浅い凹線文状のものが1条巡る。41は、口縁部から頸部にかけてのものである。全体的に風化著しいために調整は不明である。堅穴住居から出土しており方形周溝墓から混じり込んだものとみられる。遺物の時期は、中期中葉である。

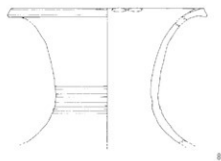
(14) 17号墓 (50~52)

SD111出土遺物 50は、大型で広口壺である。全体的に風化著しく調整等不明瞭である。体部の一部に一次焼成の痕跡を留める。51・52は、壺底部である。共に細頸壺の可能性が高い。52も底部がないた

2号墓



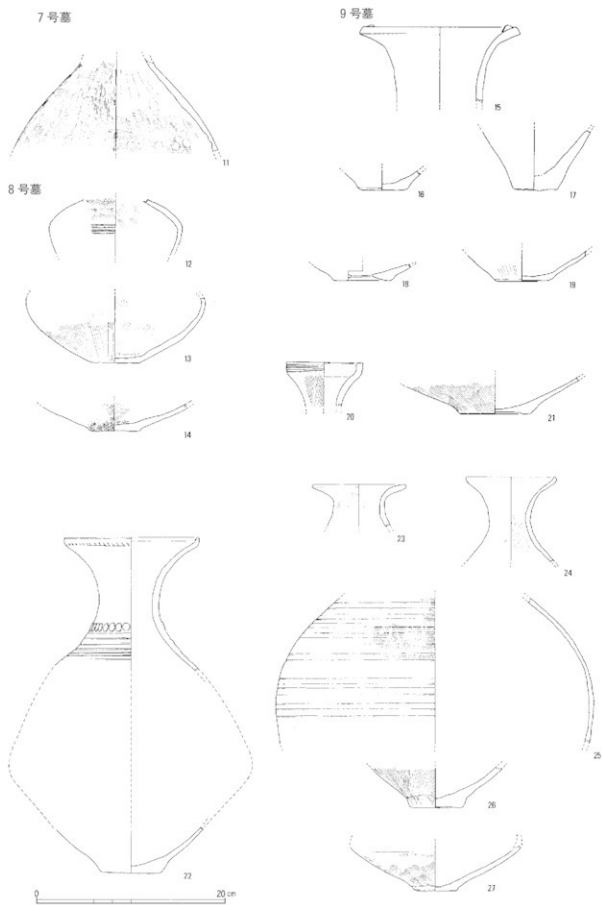
3号墓



4号墓

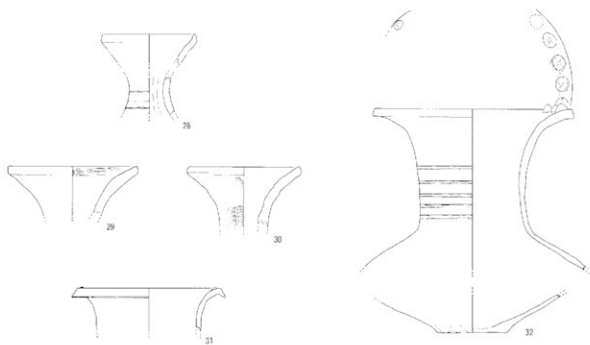


第55図 出土遺物実測図(2)

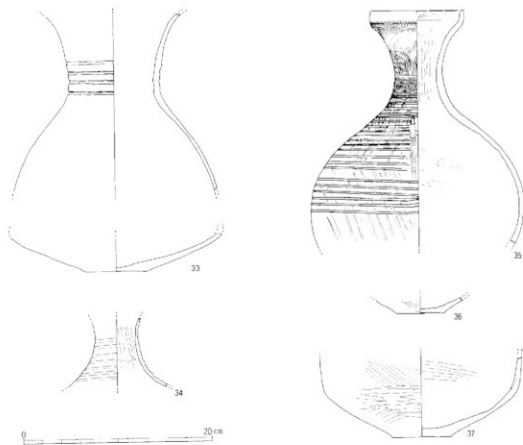


第56图 出土遗物实测图(3)

10号墓



11号墓

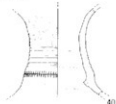


第57图 出土遗物实测图(4)

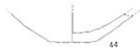
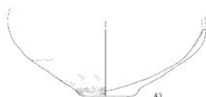
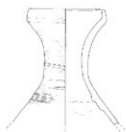
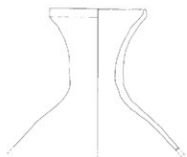
12号墓



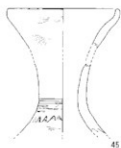
13号墓



15号墓



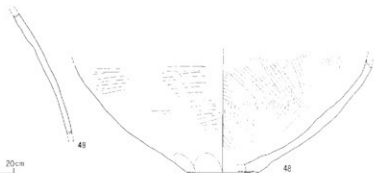
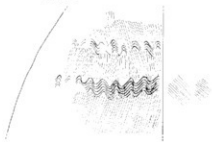
14号墓



18号墓



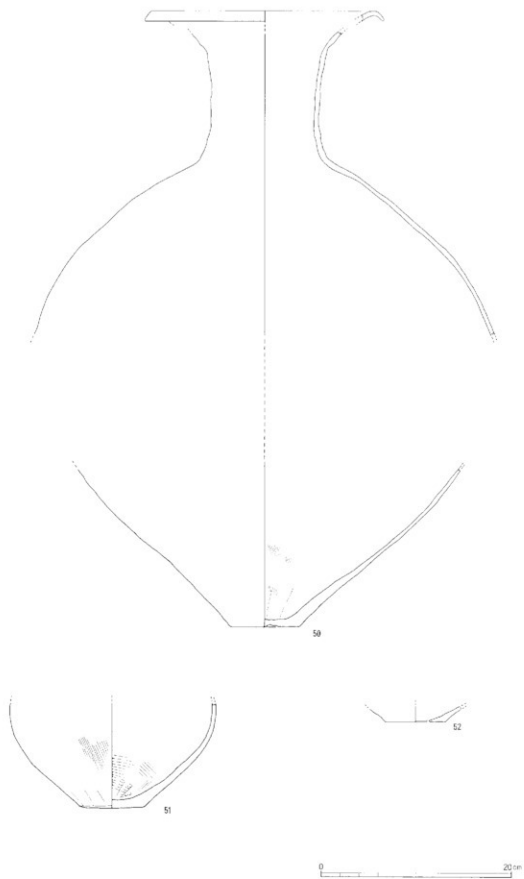
19号墓



0 20cm

第58图 出土文物实测图(5)

17号墓



第59图 出土遺物実測図(6)

め底部穿孔の可能性が高い。遺物の時期は中期後葉であろう。

(15) 18号墓 (47・48)

S K 150出土遺物 47・48は、細頸壺である。全体的に遺存状況は良くない。47では、口縁端部の断面形が三角形を呈しながら斜め上方に立ち上がる。48の口縁部には凹線文が2条巡る。遺物の時期は、中期後葉のものとみられる。

(16) 19号墓 (49)

S D 74出土遺物 49は、壺か甕の体部であろう。甕の体部とするともう少し亀井遺跡出土のものに似ている。遺物の時期は、中期中葉のものであろう。

(17) 包含層出土遺物 (53~56)

53は、広口壺の口縁部である。口縁端部内面には円形浮文及び扇形文で飾られている。54は、細頸壺の体部である。体部に縦方向のヘラ描き沈線が認められる。55・56は、壺底部である。おそらく細頸壺であろうとみられる。遺物の時期は、中期後葉を主体としている。

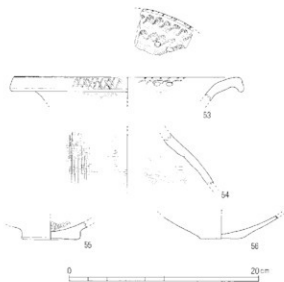
2 奈良時代

1) 竪穴住居

① S H 36出土遺物 (57)

57は、土師器椀である。全体的に作りの粗いものであり、磨減著しい。遺物の時期は、7世紀後半とみられる。

包含層



第60図 出土遺物実測図 (7)

② S H 42出土遺物 (58・59)

58は、須恵器杯蓋である。天井部から緩やかに広がる。口縁部付近で稜を有している。口縁端部は、やや丸みを帯びてまとまる。59は、須恵器杯身である。底部は、欠損しているもののケズリによって、途中から回転ナデによって調整されている。立ちあがりは、やや内傾している。受部は、体部外面に沈線をめぐらした後にやや斜め上方に延びて丸くまとまる。遺物の時期は、7世紀末から8世紀初頭とみられる。

③ S H 50出土遺物 (60~65)

遺物には、土師器杯・高杯・甕・須恵器杯蓋・杯身がある。60は、土師器杯であろう。底部・口縁部が欠損し、調整も磨減によって不明瞭である。やや器壁は厚い。62は、土師器甕である。体部以下は、欠損してない。頸部は強く屈曲して外方に開き、口縁端部は、外面に面を持つようにつまみあげられている。体部外面は縦方向のハケで調整される。65は、土師器高杯である。接合部以下の脚部は、欠損している。器壁はやや一定し、口縁端部は、やや尖り気味にまとまる。61は、須恵器杯身であろう。底部から柔らかい曲線で開き器壁は、底部を除き一定である。口縁部内面に沈線が巡る。底部外面はヘラ切後ナデられている。63は、須恵器杯蓋である。宝珠つまみは欠けてない。かえりは、短く厚い。64は、須恵器杯身である。高台部分が接地面側から押し潰され、左右に間延びした様な断面形をしている。体部は、腰部において強く屈曲して垂直に上へ伸びる。遺物の時期は、7世紀後葉とみられる。

④ S H 80出土遺物 (66~72)

遺物は、土師器皿・甕・製塩土器・須恵器杯蓋・鉢がある。66・67は、土師器皿である。66は小型、67は大型品で内面にミガキとみられる痕跡を留める。69・70は須恵器杯蓋で69は、体部が著しく歪んでいる。70は口縁端部外面に浅い沈線が巡る。71は、須恵器鉢で緩やかな体部と外反する口縁部を有している。やや口縁部にかけて歪みが著しい。72は、志摩式製塩土器で底部から体部にかけてのものである。遺物の時期は、8世紀初頭とみられる。

⑤ S H 85出土遺物 (76)

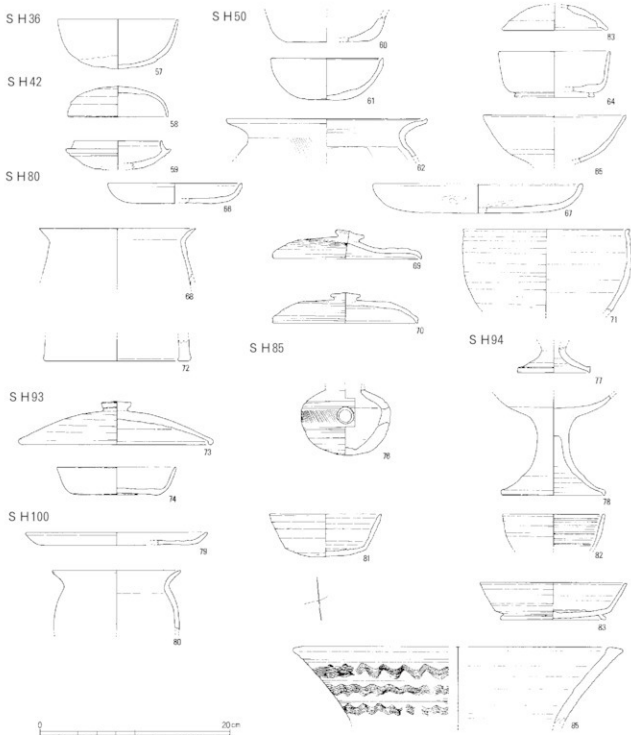
遺物は、須恵器甕がある。76は、須恵器甕である。

体部中ほどに孔が穿たれており、斜め線状に刺突文が巡る。上下に2条の沈線が巡る。遺物の時期は、8世紀初頭とみられる。

⑥ SH93出土遺物 (73・74)

遺物は、須恵器杯蓋・杯身がある。73は器形がやや大きめで、宝珠つまみはやや扁平である。体部は、

やや緩やかに開く。口縁端部は、ほぼ垂直に下りて丸みを帯びてまとまる。口径は、かなり大きい。74は、色調が明るい灰色で、胎土がオレンジ色である。須恵器の産地を特定できそうである。遺物の時期は、8世紀前葉から中葉にかけてみられる。



第61図 出土遺物実測図(8)

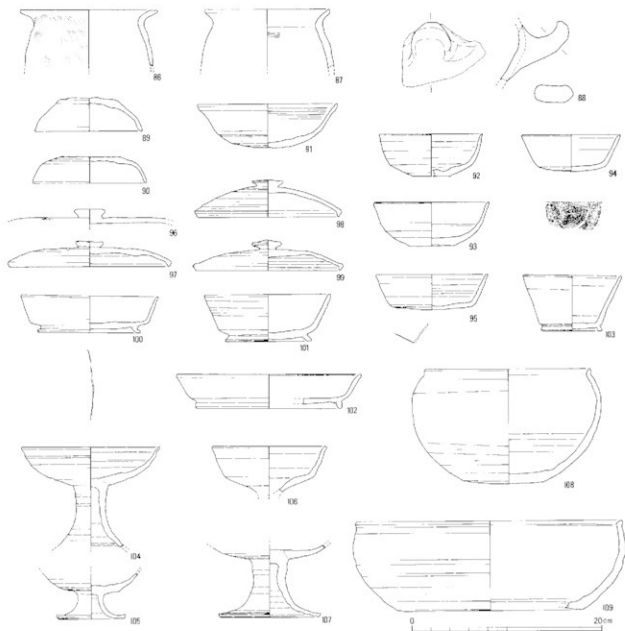
⑦ SH94出土遺物 (77・78)

77・78は、須恵器高杯である。77は、脚部が柔らかな曲線を描いて開くもの種を有する。接地部分には、脚部の先端を垂下させ、断面逆三角形形状になるように成形される。78は、杯部接合部から欠ける。脚部接地面は、外面に面が有る様に成形される。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

⑧ SH100出土遺物 (79～83・85)

遺物は、土師器皿・甕・須恵器杯身・甕がある。79は、表面剥離が著しいため調整不明である。口径は20cmとやや大きい。80は、表面剥離や磨滅のため調整不明である。81は、須恵器杯身である。底部はやや丸みを帯びており、「×」「+」とみられるへら記号がみとめられる。腰部で屈曲し立ちあがり口縁端部は、やや尖り気味にまとまる。器壁は口縁部付近で厚みを増している。82は、須恵器杯身であろう。器表面は、調整によるものとみられる。段差が著しくみとめられる。また、色調は74と同じオレンジ色で他の須恵器に比べて異なるものである。83は、高台部が押し潰され外方に拉げている。体部は腰部においてやや弱く屈曲し、斜め外上方に伸びる。口縁端部は、丸みを帯びてまとまる。

SH112



第62図 出土遺物実測図 (9)

85は、口径が不確定である。口縁端部は、上面に面があるようにやや平坦である。上から沈線が2条、波状文、沈線、波状文、沈線が2条、波状文がめぐり、遺物の時期は、7世紀後葉から8世紀前葉にかけてみられる。

⑨ S H 112出土遺物 (86~109)

遺物には、土師器鍋把手部分・甕・須恵器杯蓋・杯身・鉢・高杯・碗がある。86は、体部下半は欠損してない。体部の外面の調整が磨滅著しい。87は、磨滅著しく調整不明である。ハケで調整されていたとみられる。88は、土師器鍋か甕の把手部分である。89は、天井部がヘラ切りによって調整される。体部外面から内面にかけて回転ナデによって調整されている。90は、天井部がヘラ切後木調整である。全体的にやや粗雑な作りである。91は、底部から緩やかに立ちあがり、外方に開く。口縁端部は、丸くまとまる。杯身の器形としては、異色のものである。本来は、高杯の杯部を考えるべきであろうか。類例は、なく珍しいものである。92は、底部がやや厚みがあり腰部においてやや強めに屈曲する。底部外面は、ヘラ切りによって平らに成形される。93は、底部外面が丁寧にナデによって調整されて、やや斜め外方に開く。口縁端部は、丸みを帯びてまとまる。94は、須恵器杯身である。底部外面にヘラ書きある。全体的に器壁が一定で丁寧な作りをしている。また、色調は、明るい灰色であり、胎土は、オレンジ色に近い。95は、高台がない。底部外面は、丁寧に調整されている上にヘラ記号がある。おそらく「×」「+」であろう。底部から体部の腰部において強く屈曲し、やや外方に直線的に開く。口縁端部は、やや丸みを帯びてまとまる。96・97・98・99は宝珠つまみややや扁平で、体部もやや直線的ないし緩やかに開く。口縁部は、ほぼ垂直に下り、断面形が三角である。100は、底部外面にヘラ描沈線が1条直線状に走る。高台部が外方に屈曲している。体部は丁寧に回転ナデによって調整され、口縁端部は、丸くまとまる。101は高台を持ち、体部外面は丁寧に調整され仕上げられる。腰部において強く屈曲してやや外方に直線的に伸びる。器壁の厚みはやや厚い。高台部分は、貼り付け後やや丸みを帯びてまとめられている。102は、全体的に磨滅著しい。103は底部から体部にか

けて強く屈曲し、直線的に斜め外方に開き、口縁端部において丸くまとまる。外面上では灰色であるが、胎土は赤色である。104は、杯部が口縁部にかけて順次器壁が薄くなり、口縁部付近で段を持つように屈曲している。105は、やや短めの脚部を持ち脚部の端部において厚みをます。106は杯部が器壁が一定で、口縁端部は丸みをおびてまとまる。口縁部内面に使用したとみられる痕跡のこる。107は脚部が全体的に丁寧に仕上げられる。108は、底部外面は糸切り痕残る。体部は、全体的に球形である。口縁部は、やや上方にのび丸くまとまる。109はやや大型な物で底部はやや平らである。体部はやや弱く立ちあがり口縁部においてやや外方に屈曲する。108と同様の器形になる可能性が高い。遺物の時期は、7世紀後葉から8世紀前葉にかけてとみられる。

2) 掘立柱建物

遺物は、全て柱掘形から出土したものである。

① S B 164出土遺物 (110)

110は、土師器甕である。全体的に遺存状況は、良くないが体部外面にハケの調整が僅かに残る。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

② S B 165出土遺物 (111)

111は須恵器壺蓋であろうか。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

③ S B 167出土遺物 (112)

112は須恵器鉢である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

④ S B 170出土遺物 (113~115)

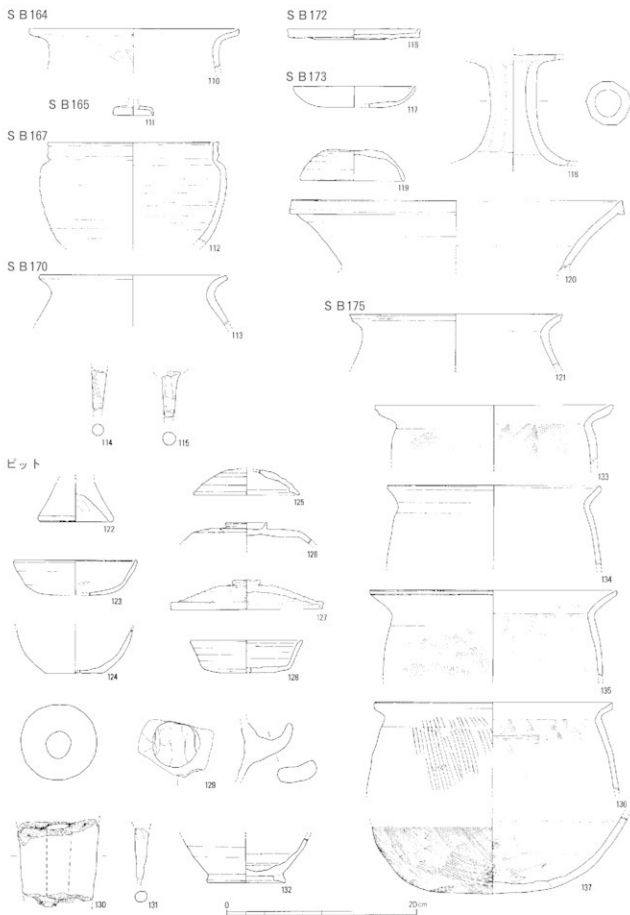
113は、土師器甕である。全体的に遺存状況は、良くない。114・115は、知多式製埴土器である。杯部及び脚の先端部がないが4A2類から4A3類とみられる。遺物の時期は、8世紀中頃とみられる。

⑤ S B 172出土遺物 (116)

116は、須恵器無台盤であろう。口縁部の立ち上がりや底部がヘラ削りによって丁寧に仕上げられる。岡山古窯跡2号窯の出土遺物と非常に似ている。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

⑥ S B 173出土遺物 (117~120)

遺物には、土師器杯・高杯・須恵器杯蓋・甕がある。117は、風化著しい。118は土師器高杯である。脚部外面は、削りによって丁寧に調整されている。



第63図 出土遺物実測図 (10)

119は天井部が未調整である。120は、広口甕であろう。遺物の時期は、8世紀代とみられる。

⑦SB175出土遺物(121)

121は、土師器甕である。風化著しく調整等不明瞭である。遺物の時期は、8世紀代であろう。

⑧ビット出土遺物(122~137)

遺物には、台付甕・土師器杯・甕・鍋か瓶の把手部分・須恵器杯蓋・杯身・壺底部・輪羽口がある。122は、台付甕の台部、131は、知多式製塩土器がある。遺物の時期は、7世紀から8世紀にかけてのものである。

3) 土坑

①SK81出土遺物(138~140)

138は、須恵器杯身であろうか。底部には、糸切り痕跡が残る。139は、須恵器杯身である。高台部は押し潰され左右に開き断面台形状である。140は、須恵器杯身である。高台はない。底部は、ほぼ平らで腰部において強く屈曲する。口縁端部は尖り気味にまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

②SK142出土遺物(141)

141は、土師器甕である。器表面の剥離や磨滅著しいため、調整不明な箇所が多いが内面は横方向のハケ、外面は縦方向のハケとみられる。口縁端部は、外面に面を持つように上方につきまあげられている。遺物の時期は、8世紀代であろう。

4) 溝

SD29出土遺物(142・143)

142は、須恵器杯身である。高台部は、押し潰されて外側にはみ出すような形状である。体部は、腰部において強く屈曲して斜め外上方に開く。器壁は、口縁部に近づくにつれて先細りになり、口縁端部で尖り気味にまとまる。143は、須恵器杯身であろう。ヘラ記号が残る。「×」か「+」とみられる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD47出土遺物(144)

144は、知多式製塩土器の脚部である。4A2類か4A3類であろう。先端部近くで削りこまれて細身になる部分がある。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉のものである。

SD56出土遺物(145)

145は、須恵器甕である。口縁端部は、外面に面を持つように一部を垂下させている。口縁部には、上から沈線が2条、刺突文、沈線が2条、刺突文が施される。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD63出土遺物(146)

146は、土師器杯である。全体的に作りが粗いものである。器表面は、磨滅著しく調整が不明瞭である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD66出土遺物(147・148)

遺物には、須恵器杯蓋・杯身がある。147は宝珠つまみが中央部でやや盛り上がる。体部は傘状に緩やかに広がる。口縁端部は、内側に折り込まれ、やや尖った様に見える。148は底部が曲線を描き高台部の接地面と同じ高さになるようである。高台部は、貼り付け後のナデによって断面形が平行四辺形状である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD77出土遺物(149)

149は、土師器杯である。底部は、ユビオサエによって調整され、痕跡残る。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD76出土遺物(150・151)

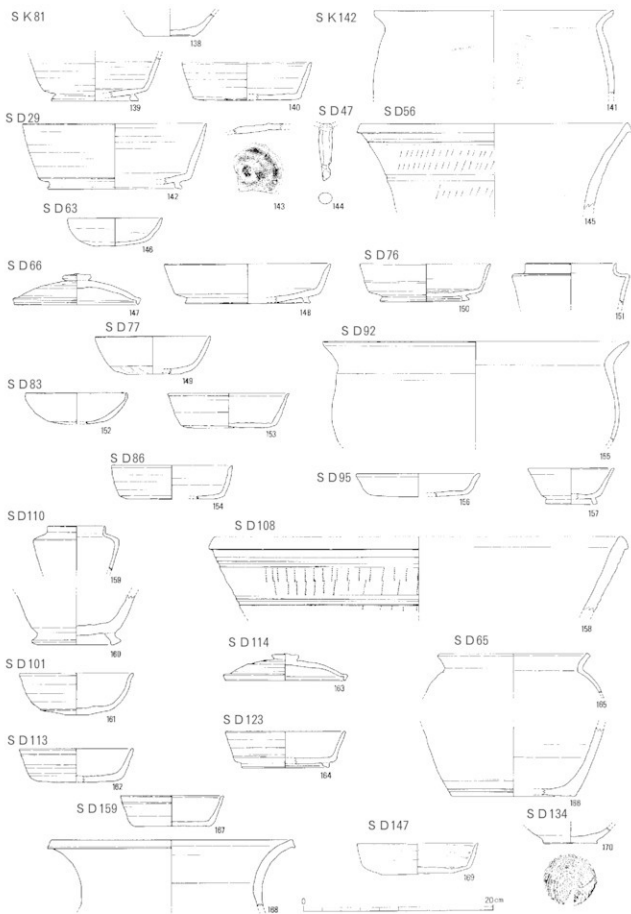
150は、須恵器杯身である。腰部から強く屈曲して口縁部にかけて丸みを帯びてまとまる高台部は、押し潰されたように断面形が台形状である。器壁は、体部下半が一番薄い。151は、須恵器短頸甕である。肩部で鋭角に内傾し、柔らかに直上する。口縁端部は、先細り気味にまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD83出土遺物(152・153)

153は、高台を有しない。口縁端部は、やや外傾し先細り気味である。152は、土師器杯である。器全体は、ナデによって調整されている。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

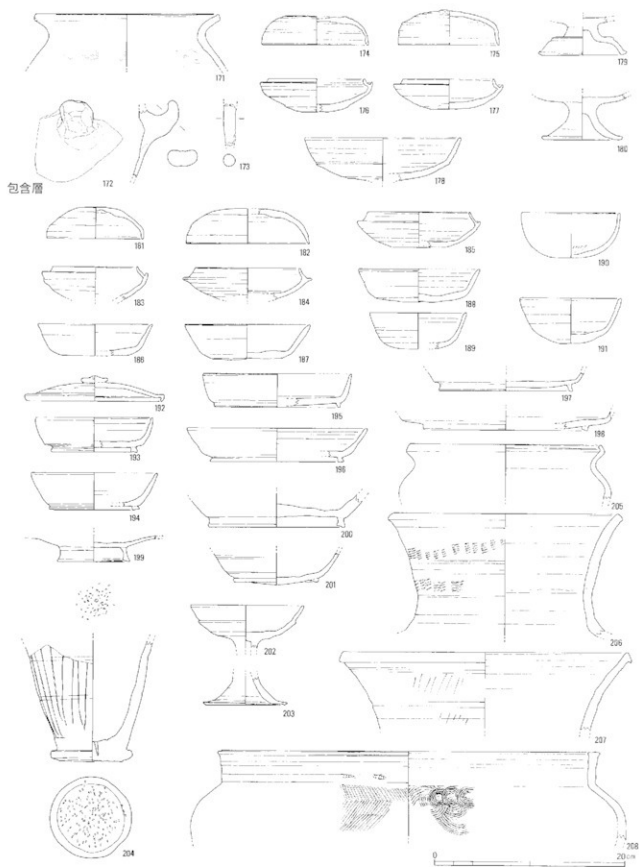
SD86出土遺物(154)

154は、須恵器杯身である。高台は、ない。口縁部は、やや直線的に立ちあがり端部においてナデによってやや尖り気味まとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。



第64图 出土遗物实测图 (11)

SD4上層



第65図 出土遺物実測図 (12)

SD92出土遺物 (155)

155は、土師器甕である。口縁端部は、外面に面を持つようにややつまみあげられる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD95出土遺物 (156・157)

156は、土師器杯である。かなり磨滅によって調整が不明瞭である。底部～体部にかけての調整はヘラケズリの可能性が高い。157は、須恵器杯身である。高台部分は、断面形が方形である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD108出土遺物 (158)

158は、須恵器甕の口縁部である。上から沈線2条、刺突文、沈線2条、刺突文が施される。遺物の時期は、8世紀中葉頃にかけてみられる。

SD110出土遺物 (159・160)

159は、須恵器短頸壺の上半部である。160は、須恵器長頸壺の体部下半部であろう。遺物の時期は、8世紀中葉頃にかけてみられる。

SD101出土遺物 (161)

161は須恵器椀であろうか杯身かもしれない。底部は丁寧にケズリによって調整される。胎土は、全体的に焼成不良であろうかにおい黄褐色である。口縁部は、やや外反して丸みを帯びてまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD113出土遺物 (162)

162は、須恵器杯身である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD114出土遺物 (163)

163は、須恵器杯蓋である。宝珠つまみの中央部は、やや盛り上がる。体部から口縁部にかけて僅かながら挽み、端部において内傾し、丸みを帯びてまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD123出土遺物 (164)

164は、須恵器杯身である。高台は内面側がナデによって丸みを帯びた曲線で断面形が歪な形である。腰部から強く屈曲して立ち上がり口縁部において丸みを帯びてまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD65出土遺物 (165・166)

165は、土師器甕である。器壁は頸部から口縁部にかけて厚い、器表面は磨滅著しく調整が不明瞭である。166は、須恵器壺底部である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD159出土遺物 (167・168)

遺物には、須恵器杯身・甕がある。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD147出土遺物 (169)

169は須恵器杯である。底部からの立ち上がりは、強い。内面に強い稜線が生じた痕跡があるが調整によるものとみられる。底部は、ロクロケズリによって丁寧に成形される。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD134出土遺物 (170)

170は、須恵器杯身である。底部は、糸切り痕跡が残る。また、沈線が1条走る。「-」「」であろう。もはや高台の無い時期に相当する。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

SD4上層出土遺物 (171～180)

遺物には、土師器甕 (171)・鍋か瓶の把手部分 (172)・知多式製塩土器 (173)・須恵器杯蓋 (174・175)・杯身 (176・177)・高杯 (179・180)・無蓋高杯 (178) がある。171は、風化著しいものの僅かに内外面にハケ調整の痕跡を留める。172は、ソケット状に差込によって成形される。173は、知多式製塩土器の脚部である。杯部及び脚部先端部分は、欠損してない。立松氏の分類で4A3類であろう。遺物の時期は、凡そ7世紀から8世紀にかけてのものともみられる。

5) 包含層出土遺物 (181～221)

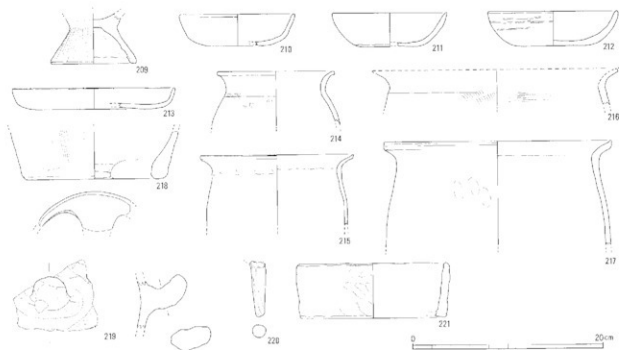
遺物には、土師器台付甕 (206)・杯 (210～212)・皿 (213)・甕 (214～217)・瓶 (218)・鍋か瓶の把手部分 (219)・知多式製塩土器 (220)・志摩式製塩土器 (221)・須恵器杯蓋 (181～182・192)・杯身 (183～191・193～200)・壺 (201)・高杯 (202～203)・鉢鉢 (204)・甕 (205～208) がある。

181・182は、共に天井部がヘラ切後未調整である。183・184・185は、内面にかえりを持つ杯身で183は、やや歪で口径が不確かである。186～189は、高台を持たない杯身、190・191は、椀とみられる。共に器壁全体を回転ナデによって調整される。190はやや

歪みがある。192は宝珠つまみの有る杯蓋、193～200は、高台を持つ杯身。198は、高台部がやや内側に貼り付けられ他の杯身と比較して異なる。199は、高台部がかなり高い。杯身と異なる器種かも知れない。201は壺底部で長頸壺であろうか。底部は器壁が丸みを帯び下方に張り出しており安定性に欠ける。202は無蓋高杯、203とは別個体とみられる。204は、非常に珍しい。体部外面に沈線が2条廻り、底部内面と外面に刺突が施されている。また、体部外面には縦方向に粗雑であるがへら描き沈線が施されている。県内に類例がない。金属器を模倣しようとしたものであろうか。205は頸部から口縁部が短く、口縁部が内側に傾斜している。206は口縁部から頸部にかけては長い。208は、広口甕で頸部から口縁部にかけて直立する。体部内外面は非常に明瞭なタキの痕跡を残している。218は甕、孔は半楕円形のもの2箇ある。219は、ソケット状の差込になっている。220は知多式製塩土器、杯部及び脚部先端部分は、欠損していない。4 A 3類であろう。221は、志摩式製塩土器、遺物の時期は、おおよそ8世紀にかけてのものともみられる。

3 平安時代

1) 土坑



第66図 出土遺物実測図 (13)

① SK 12出土遺物 (222～224)

222は、ロクロ土師器皿であろうか。底部に糸切り痕跡をとどめる。底部から口縁部にかけて直線的に開くとみられる。全体的に遺存状況は良いほどでない。223・224は、灰釉陶器碗とみられる。223は深碗かもしれない。高台部の断面形は223でやや長方形で、224で台形状である。遺物の時期は、折戸53号窯と併行するもので10世紀前半とみられる。

② SK 107出土遺物 (230～236)

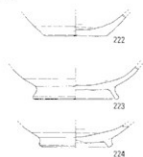
遺物には、灰釉陶器碗・皿・鉢・双耳壺がある。230は施軸方法がツケガケ、高台部が断面三角形状である。231～233は、灰釉陶器碗か皿の底部片、高台部断面形は、三角形状か三日月形状である。234は、高台部が三日月形である。235は高台部に工具の当り痕跡を残す。胎土は精緻なものである。236は、口縁部や体部が欠損している。残存部分からおそらく双耳壺とみられるが1ヶ所だけ貼り付けられた痕跡を残す。遺物の時期は、黒笹90号窯から折戸53号窯にかけてのもので9世紀後半から10世紀前半とみられる。

2) 溝

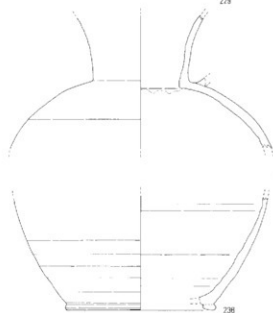
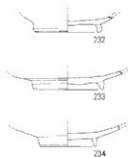
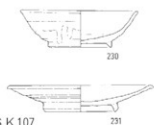
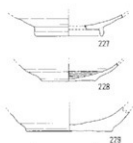
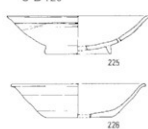
SD 129出土遺物 (225～229)

225・226は、灰釉陶器碗、227～229は、土師質土師器碗及び皿であろう。底部に糸切り痕跡を留める。

S K 12



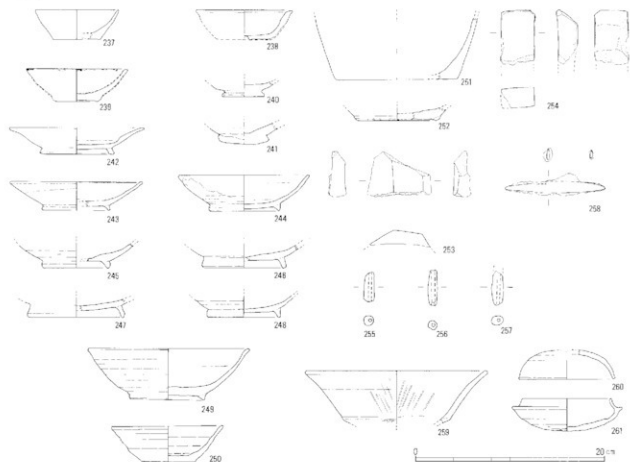
S D 129



S K 107



包含層



第67図 出土遺物実測図(14)

遺物の時期は、黒笹90号窯から折戸53号窯にかけてのもので9世紀後半から10世紀前半とみられる。

3) 包含層出土遺物 (237~248)

遺物には、土師器椀 (237~239)・緑釉陶器皿 (242)・灰釉陶器椀ないし皿 (243~248)・土師質土師器 (240・241)がある。237・238は、風化著しく器表面の調整は不明瞭である。239も器表面が風化著しいものであるが、口縁端部に黒く煤けた油煙の痕跡があり灯明皿の役割を持っていたとみられる。240・241は、底部に焼きり痕跡を留める。242~248は、灰釉陶器皿が多数を占めているが底部のみ残るものには椀も含まれる。黒笹90号窯から折戸53号窯にかけてのものであろう。遺物の時期は、凡そ9世紀後半から10世紀前半にかけてのものであろう。

4 鎌倉時代

1) 土坑

SK166出土遺物 (249)

249は、陶器椀 (山茶椀) である。藤澤良祐氏編年の6型式に相当しよう。時期は、13世紀中葉とみられる。

2) ビット出土遺物 (250~251)

250は、陶器椀で藤澤氏編年の6型式に相当しよう。時期は、13世紀中葉である。251は陶器壺の底部である。

3) 溝

SD122出土遺物 (252)

252は、陶器椀で藤澤氏編年の6型式に相当しよう。遺物の時期は、13世紀中葉である。

5 時期不明

包含層出土遺物 (253~258)

253・254は、砥石。砥面は253が3面、254が4面である。255~257は土鎌、258は刀子とみられる。

259~261は試掘に伴う遺物である。259は土師器高杯である。260・261は須恵器杯身・杯蓋である。遺物の時期はおおよそ古墳時代後期である。なおこれら遺物は、山村遺跡と菟上遺跡の間の谷において実施した試掘遺物である。おそらく谷上流に位置する六谷遺跡からのものと考えられる。

＜参考文献＞

- [弥生土器]
鈴木克彦・伊藤裕偉・伊勢野久好・岩中淳之「伊勢・志摩」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題 一土器・墓・ムラにみる両期と地域間交流』(第7回東海埋蔵文化財研究会 1990年)
上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』(本耳社 2002年)
[須恵器]
田辺昭三『陶邑古窯址1』(平安学園考古学クラブ 1966年)
斎藤孝正「猿投・美濃須恵」『季刊 考古学 第42号』(雄山閣 1993年)
斎藤孝正・後藤健一編「須恵器集成図録 第3巻東日本編1」(雄山閣 1995年)
[製塩土器]
新田洋「三重県における製塩に関する予察」『三重考古3』(三重考古学研究会 1980年)
山本雅晴「三重県(近藤義郎編)『日本土器製塩研究』 1994年)
立松彰「愛知県(近藤義郎編)『日本土器製塩研究』 1994年)
西村美幸「伊勢湾西岸の製塩土器—研究の現状と課題—」『製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』(塩の会シンポジウム実行委員会 1997年)
森泰通「東海地方における消費地出土の製塩土器—特に固形塩の問題をめぐって—」『製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』(塩の会シンポジウム実行委員会 1997年)
[灰釉陶器・緑釉陶器]
斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナル№211』(ニューサイエンス社 1982年)
斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」(『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 施釉陶器—』 古代の土器研究会 1994年)
陶器椀 (山茶椀)
藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要 第3号』(三重県埋蔵文化財センター 1994年)

No.	登録 番号	器種 出土 遺構	計 測 値	測 値	測 量 単位	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色 調	残 存 備 考	
			口径(cm)	高さ(cm)	長さ(cm)						
51	046-02	弥生土層 SH10	-	底径 10.0	6.8	底部～内部内面ハケ、底部外面ハケ	中や密(～2mm前後 の砂粒含む)	赤	灰色 灰オリブ色 7.5YR7/3 10Y5/2	約50%	
52	046-03	弥生土層 SH11	-	底径 10.0	6.8	底部～内部内面ハケ、外部外面ハケ	中や密(～2mm前後 の砂粒含む)	赤	灰色 灰オリブ色 7.5YR7/4 10Y5/1	約10%	
53	036-04	弥生土層 表土	約24	底径 2.5	-	内部内面ハケ・浮文・扇状文、口縁部斜削文・ナデ、口縁部外面ハケ	中や密(～1.5mm前後 の砂粒含む)	赤	にじみ黄褐色 7.5YR6/4-7/4	口縁部 約10%	
54	036-04	弥生土層 包含む	-	底径 2.5	-	内部内面ハケ・ハケ、外部外面ハケ・扇状文	粗(～2mm前後の砂 粒含む)	赤	にじみ黄褐色 10YR6/4	約10%	
55	036-03	弥生土層 包含む	-	底径 1.5	6.2	底部～内部内面ハケ、外部～底部外面化粧著しく調整不明	粗(～2.5mm前後の砂 粒含む)	赤	にじみ黄褐色 10YR6/3	底部 約20%	
56	026-04	弥生土層 包含む	-	底径 2.2	6.2	化粧著しく調整不明	粗(～4mm前後の砂 粒含む)	赤	褐色 灰褐色 暗灰色 7.5YR5/6 10YR5/4 N5/0	底部 約20%	
57	013-02	土師器 杯舟	D9 SH36	12.5	5.2	-	中や密(～3.5mm前後 の小含む)	赤	灰黄褐色 10YR8/3	約20%	
58	007-03	土師器 杯舟	T8 SH42	約10.5	3.2	-	中や密	赤	灰褐色 2.5Y7/3 7.5YR/1	約90%	
59	007-03	土師器 杯舟	B8 SH42	約10.2	3.0	受胎部 約11	底部～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ	中や密(～1.5mm前後 の砂粒含む)	赤	灰褐色 灰白色 10Y6/1 10Y7/1	約50%
60	017-06	土師器 杯舟	C14 SH50	-	底径 2.9	-	中や密	赤	灰褐色 灰白色 10Y6/1 10Y7/1	約10%	
61	007-07	土師器 杯舟	D13 SH50	約11.8	4.4	-	底部～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、底部外面ハケナデ	中や密	灰褐色 灰黄色 10Y6/1 2.5Y7/2	約50%	
62	008-03	土師器 杯舟	C13 SH50	約21	底径 4.1	-	中や密(～1.5mm前後 の砂粒含む)	赤	灰白色 にじみ黄褐色 10YR5/1 10YR7/3	約10%	
63	007-06	土師器 杯舟	D13 SH50	約10.5	2.3	受胎部 約8.5	底部～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ	中や密	灰褐色 5Y7/1	約30%	
64	017-03	土師器 杯舟	C14 SH50	約11.5	4.8	高さ約 8.5	底部～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、高台部取り付け後ナデ、底部外面ハケナデ	中や密	灰褐色 10Y7/1	約10%	
65	008-01	土師器 杯舟	C13 SH50	約14.5	4.8	-	中や密	赤	不 褐色 2.5YR7/6 7.5YR6/4	約10%	
66	001-02	土師器 杯舟	B20 SH90	約14	2.1	-	中や密(～1mm前後 の砂粒含む)	赤	褐色 7.5YR7/6	約20%	
67	001-01	土師器 杯舟	B30 SH90	約22	3.1	-	中や密(～1.5mm前後 の小含む)	赤	褐色 5YR6/6	約30%	
68	001-04	土師器 杯舟	A20 SH90	約16.5	4.9	-	粗(～2.5mm前後の砂 粒含む)	赤	にじみ黄褐色 5YR7/4	約20%	
69	002-02	土師器 杯舟	B30 SH90	約15.5	3.1	つまみ付 約1.1	大井沿～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、外部外面ハケナデ、つまみ付り付け後ナデ	中や密(～1mm前後 の小含む)	赤	灰褐色 5YR7/4	約20%
70	002-03	土師器 杯舟	A20 SH90	約10.5	3.2	つまみ付 約1	大井沿～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、外部外面ハケナデ、つまみ付り付け後ナデ	中や密(～1mm前後 の砂粒含む)	赤	灰褐色 N7/0	完形
71	001-01	土師器 杯舟	B30 SH90	約17.5	底径 8.8	-	底部～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、外部外面ハケナデ	中や密(～1mm前後 の小含む)	赤	灰褐色 7.5Y6/1	約30%
72	001-06	製瓦土層	B20 SH90	-	底径 2.3	内外面ナデ	中や密(～4mm前後 の小含む)	赤	にじみ黄褐色 10YR7/4	-	
73	007-01	土師器 杯舟	B16 SH90	約20.5	4.6	つまみ付 約1.1	大井沿～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、つまみ付り付け後ナデ	中や密	灰褐色 灰白色 2.5Y7/3 2.5Y7/1	約70%	
74	007-04	土師器 杯舟	B16 SH90	約22.5	2.9	-	中や密	赤	灰白色 灰黄色 N7/0 2.5Y6/2	約10%	
76	007-08	土師器 杯舟	G19 SH85	-	底径 2.9	内外面ハケナデ	中や密(～1mm前後 の砂粒含む)	赤	灰褐色 5YR7/1	約90%	
77	010-03	土師器 杯舟	F15 SH94	-	底径 2.9	頸部内面ハケナデ、頸部外面ハケナデ	中や密(～1mmの砂 粒含む)	不	褐色 7.5YR7/3	約10%	
78	010-04	土師器 杯舟	F15 SH94	-	底径 11	頸部内面ハケナデ、杯部内面ハケナデ、頸部外面ハケナデ	中や密(～1.5mmの砂 粒含む)	不	灰褐色 10YR7/3	約20%	
79	010-01	土師器 杯舟	F18 SH100	約19.4	-	内外面調整著しく調整不明	中や密(～1mm前後 の砂粒含む)	赤	褐色 7.5Y7/3	約20%	
80	010-03	土師器 杯舟	F18 SH100	約13.5	底径 6.2	-	粗(～2mm前後の砂 粒含む)	赤	にじみ黄褐色 5YR7/3	約20%	
81	011-05	土師器 杯舟	F18 SH100	約11.5	4.5	底径 8.5	底部～内部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、底部外面ハケナデ	中や密(～1.5mm前後 の砂粒含む)	赤	にじみ黄褐色 5YR6/4	約50%
82	011-03	土師器 杯舟	F18 SH100	約11	3.4	-	中や密	不	褐色 7.5YR7/3	約10%	
83	011-04	土師器 杯舟	F18 SH100	約15.5	3.9	高さ約 11	底部～内部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、高台部取り付け後ナデ、底部外面ハケナデ	赤	にじみ黄褐色 7.5YR7/3	約30%	
85	008-01	土師器 杯舟	F18 SH100	-	底径 8.1	内外面ハケナデ	中や密(～2mm前後 の砂粒含む)	赤	灰褐色 10YR7/1	-	
86	006-01	土師器 杯舟	SH112	約14.5	底径 5.9	-	中や密(～1.5mm前後 の砂粒含む)	赤	にじみ黄褐色 灰黄褐色 7.5YR6/4 10YR8/3	約10%	
87	008-02	土師器 杯舟	F21 SH112	約13.2	底径 6.2	-	中や密(～2mm前後 の砂粒含む)	赤	褐色 5YR6/6 7.5YR6/6	約50%	
88	006-03	土師器 杯舟	F21 SH112	-	-	調整不明	中や密(～5mm前後 の砂粒含む)	赤	褐色 10YR8/3	-	
89	004-02	土師器 杯舟	F21 SH112	11.2	3.5	-	中や密(～3mm前後 の砂粒含む)	赤	灰色 灰白色 N6/0 N5/0 N7/0	約50%	
90	007-02	土師器 杯舟	F21 SH112	約12	2.8	-	中や密(～2mm前後 の砂粒含む)	赤	褐色 10Y7/1 10Y6/1	約10%	
91	003-02	土師器 杯舟	F21 SH112	14.7	4.6	-	中や密(～3mm以下の 砂粒含む)	赤	灰褐色 N7/0	約90%	
92	002-04	土師器 杯舟	F21 SH112	約11	4.5	底径	密	赤	灰褐色 5YR7/1	約40%	
93	005-04	土師器 杯舟	F21 SH112	約12	4.6	-	中や密(～2.5mm前後 の砂粒含む)	赤	灰黄色 2.5Y6/2	約50%	
94	040-02	土師器 杯舟	F21 SH112	30	3.9	-	密(～1.7mm前後の砂 粒含む)	赤	にじみ黄褐色 暗灰色 10YR7/3 10Y5/1 灰褐色 暗灰色 N6/0 7.5YR7/2	約10%	
95	003-03	土師器 杯舟	F21 SH112	11.8	3.7	底径 8.1	底部～内部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、外部外面ハケナデ	中や密(～2mm前後 の砂粒含む)	赤	灰褐色 N6/0	約30%
96	001-03	土師器 杯舟	F21 SH112	-	つまみ付 約1.6	つまみ付 約3.3	大井沿～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、つまみ付り付け後ナデ	中や密(～1.5mm前後 の砂粒含む)	赤	灰褐色 5YR7/6	-
97	006-01	土師器 杯舟	F21 SH112	約17	2.7	-	中や密(～3mm前後 の砂粒含む)	赤	灰褐色 5YR7/1	約10%	
98	004-04	土師器 杯舟	F21 SH112	15.4	3.9	つまみ付 約3.2	大井沿～口縁部内面ハケナデ、口縁部～外部外面ハケナデ、外部外面ハケナデ、つまみ付り付け後ナデ	中や密	灰褐色 N8/0 N6/0	約30%	
99	005-02	土師器 杯舟	F21 SH112	約15	3.2	-	中や密(～2.5mm前後 の砂粒含む)	赤	灰褐色 2.5Y7/2	約50%	
100	005-03	土師器 杯舟	F21 SH112	約14.5	3.9	-	中や密(～2mm前後 の砂粒含む)	赤	褐色 10YR7/3	完形	

第6表 出土遺物観察表(2)

No.	器具	出土 層	計測 位置	測 値	調 査 ・ 技 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	残 存	備 考
高	口径(cm)	口径(cm)	長さ(cm)							
101-000-05	原産器 付身 44	F21 SH112	13.3	4.9	高径 9.3	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、底部外面凹切り	中々層(～2m前後の砂粘土)	赤 灰白	約50%	
102-000-02	原産器 付身 44	F21 SH112	約9.5	3.6	底径 15.5	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面ナデ	中々層	褐色 灰褐色 5YR7/6 10YR8/3	約50%	
103-000-04	原産器 付身 44	F21 SH112	約10.3	5.7-5.9	高径 6.4	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面ナデ	中々層(～2m前後の砂粘土)	褐色 灰褐色 7.5YR5/1 N6/0	約50%	
104-000-06	原産器 付身 44	F21 SH112	約14.5	10.5	—	体部内面ナデ、体部外面凹転ナデ、口縁部内面凹転ナデナデ	中々層(～1m前後の砂粘土)	褐色 灰褐色 2.5Y7/1 2.5Y6/1	約50%	
101-000-04	原産器 付身 44	F21 SH112	—	底径 7.2	—	内外面凹転ナデ	中々層(～2m前後の砂粘土)	灰白 灰白 灰白	約50%	
100-030-03	原産器 付身 44	F21 SH112	12	4.8	—	体部内面凹転ナデ、体部外面凹転ナデ、接合部外面ナデ	中々層	にじみ褐色 灰褐色 7.5YR7/4 2.5YR8/1	約50%	杯蓋
107-000-05	原産器 付身 44	F21 SH112	—	底径 13.5	—	体部内面凹転ナデ、体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面凹切り	中々層(～2.5m前後の砂粘土)	褐色 灰褐色 2.5Y7/1 10YR7/2	約50%	
100-004-01	原産器 付身 44	F21 SH112	17.5	12	底径 8.4	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面凹切り	中々層(～1m前後の砂粘土)	灰白 灰白 N6/0 10BG6/1 5/1	約50%	
100-000-01	原産器 付身 44	F21 SH112	—	—	—	体部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、体部内面凹転ナデ、体部外面ナデ	中々層(～4m以下での砂粘土)	灰白	約50%	
110-032-01	土師器 付身 44	P4.4	22	底径 4	—	体部内面～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面ナデ	中々層(～2m前後の砂粘土)	灰褐色 灰褐色 7.5YR5/2 10YR8/3	約50%	口縁部
111-034-04	原産器 付身 44	P4.4	4	底径 1	—	体部内面凹転ナデ、体部外面凹転ナデ	中々層	灰白 灰白 5Y7/1	—	
112-036-01	原産器 付身 44	P4.5	38	底径 10.7	—	体部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ	新(～1m前後の砂粘土)	灰白 灰白 N7/0	約50%	
114-027-01	土師器 付身 44	D15 P4.3	約10.5	底径 3	—	態様著しく調整不明	中々層(～2m前後の砂粘土)	灰白 灰白 10YR8/1 10YR7/2-6/3	約50%	
114-031-06	製土器	D14 P4.3	—	底径 4.2	—	—	中々層	浅黄褐色 灰褐色 10YR8/4 N5/0	—	知多式製土器
114-031-05	製土器	D15 P4.3	—	底径 4.8	—	—	中々層	浅黄褐色 灰褐色 10YR8/3 2.5Y7/2	—	知多式製土器
114-032-04	原産器 付身 44	C18 P4.13	14.2	1.1	—	天井部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～天井部外面凹転ナデ	中々層	褐色 灰褐色 N6/0 N5/0	約50%	天井部つまみなし
117-034-06	土師器 付身 44	F17 P4.1	約14	底径 3.2	—	内面凹転ナデ調整不明、体部外面ナデ	中々層(～2.5m前後の砂粘土)	褐色 灰褐色 7.5YR7/6	約50%	
118-036-03	土師器 付身 44	D19 P4.9	—	底径 11.2	—	腹部と杯蓋の接合部オサエ、頸部内面ナデ、頸部外面ナデ	粗(～2.5m前後の砂粘土)	灰白 灰白 5YR7/6	頸部 足形	
119-038-02	原産器 付身 44	D18 P4.11	10.5	3.2	—	天井部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、天井部外面へ凸起	粗(～2m前後の砂粘土)	灰白 灰白 5Y7/1	約50%	
120-038-01	原産器 付身 44	D19 P4.9	34.8	底径 6.9	—	口縁部内面凹転ナデ、口縁部外面凹転ナデ	粗(～2m前後の砂粘土)	灰白 灰白 N7/0 10YR8/3	約50%	口縁部
121-036-02	土師器 付身 44	B18 P4.5	22.4	底径 6.5	—	態様著しく調整不明	中々層(～2m前後の砂粘土)	灰白 灰白 10YR8/1 10YR7/2	約50%	
122-030-03	土師器 付身 44	F9 P4.1	—	台径 4.1	—	台部内面ナデ・オサエ、台部外面ナデ	中々層	中々層(～4m以下での砂粘土) 褐色 灰褐色 5YR7/6 10YR8/4 N4.5/0	約50%	
123-034-05	原産器 付身 44	C18 P4.9	33	底径 3.7	—	腹部～口縁部内面凹転ナデ・オサエ、口縁部～底部外面ナデ	中々層(～3m前後の砂粘土)	浅黄褐色 灰褐色 10YR8/3	約50%	
124-031-02	土師器 付身 44	D18 P4.8	—	底径 6	—	頸部内面ナデ、態様著しく調整不明	粗(～2m前後の砂粘土)	灰白 灰白 灰褐色 10YR8/3 2.5Y7/1 3/1	約50%	
125-038-03	原産器 付身 44	D18 P4.10	11.2	底径 3.7	—	天井部内面ナデ、体部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、天井部外面凹転ナデ	中々層(～1m前後の砂粘土)	灰白 灰白 灰褐色 10YR8/1 灰褐色 10YR8/3	約50%	
126-037-04	原産器 付身 44	P4.4	—	高径 1.9	—	天井部内面ナデ、体部内面凹転ナデ、体部外面凹転ナデ、天井部外面凹転ナデ、つまみ部内面ナデ	粗(～1m前後の小粒・砂粘土)	灰褐色 褐色 5YR5/4 2.5Y7/1 N5/0	約50%	
127-034-01	原産器 付身 44	B18 P4.7	16	3.5	つまみ部 3	天井部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、体部内面凹転ナデ、つまみ部内面ナデ	中々層(～2m前後の砂粘土)	灰白 灰白 10Y7/1	約50%	
128-038-02	原産器 付身 44	A22 P4.1	12.8	3.4	—	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、底部外面ナデ	新(～1m前後の砂粘土)	灰白 灰白 5YR5/1	約50%	
129-031-04	土師器	C17	—	—	—	体部内面ナデ、体部外面ナデ	中々層(～5m以下での砂粘土)	灰白 灰白 10YR8/1 N7/0	約50%	胴・胎等の一部分
130-037-02	編り口 製土器	H11 P4.1	残破3	—	最大径 8.4	—	中々層(～3m前後の砂粘土)	浅褐色 暗褐色 2.5Y7/3 10YR7/6 2.5YR8/4	約50%	
131-040-03	製土器	C18 P4.4	残破5	—	—	—	中々層(～8m以下での砂粘土)	にじみ褐色 褐色 7.5YR7/4 7.5YR7/6	約50%	
132-034-03	原産器 付身 44	F17 P4.1	—	高径 4.6	—	腹部～体部内面凹転ナデ、体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面凹切り	中々層(～2m前後の砂粘土)	灰白 灰白 5Y8/1	約50%	
133-035-03	原産器 付身 44	D17 P4.8	約15	底径 5.7	—	体部内面ナデ、口縁部内外面コナデ、体部外面ナデ	中々層(～2m前後の砂粘土)	褐色 灰褐色 7.5YR7/6 10YR7/2	約50%	口縁部
134-036-01	土師器 付身 44	F9 P4.3	22.6	底径 8.3	—	態様著しく調整不明	粗(～2.5m前後の砂粘土)	灰白 灰白 2.5YR8/2 2.5YR8/6-8/4	約50%	
135-031-01	土師器 付身 44	F10 P4.2	約16	底径 9	—	体部内面ナデ、口縁部内外面コナデ、体部外面ナデ	中々層(～5m以下での砂粘土)	褐色 浅褐色 5YR7/6 2.5YR8/3	約50%	口縁部
136-035-02	土師器 付身 44	C17 P4.3	約15	9	—	体部内面ナデ、口縁部内外面コナデ、体部外面ナデ	中々層(～3.5m前後の砂粘土)	にじみ褐色 灰褐色 10YR7/4	約50%	
137-048-01	土師器 付身 44	C15 P4.4	—	底径 3	—	腹部～体部内面ナデ、体部～底部外面ナデ	中々層(～1cm前後の砂粘土)	浅黄褐色 灰褐色 10YR8/3 10YR5/2	胎のみ	
138-000-03	原産器 付身 44	C20 SK81	—	底径 2.3	底径 5.4	腹部～体部内面凹転ナデ、体部外面凹転ナデ、底部外面凹切り	新	褐色 灰褐色 7.5YR5/1	約50%	
138-011-01	原産器 付身 44	G19 SK81	—	高径 4.6	高径 9	腹部～体部内面凹転ナデ、体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面凹切り	新	暗赤褐色 2.5Y5/2	約50%	
140-011-02	原産器 付身 44	G19 SK81	約13.5	4	底径 11.5	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、底部外面凹切り	新	灰白 灰白 5YR5/1	約50%	
141-000-02	土師器 付身 44	A9 SK142	約15	底径 8.7	—	体部内面ナデ、腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面凹切り	粗(～2m前後の砂粘土)	褐色 灰褐色 7.5YR6/6	約50%	
142-017-01	原産器 付身 44	D12 SD29	約19	6.9	高径 14	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ	中々層	褐色 灰褐色 N5/0 N7/0	約50%	
143-040-01	原産器 付身 44	D12 SD29	—	—	—	—	新(～1m前後の砂粘土)	灰白 灰白 10Y6/1	約50%	
144-017-02	製土器	D14 SD47	—	底径 6	台径 1.5	—	中々層	褐色 褐色 2.5YR7/6-6/6	—	知多式製土器
145-016-02	原産器 付身 44	G15 SD56	約19	底径 9	—	口縁部内外面凹転ナデ	中々層	灰白 灰白 N5/0 7.5Y6/1	—	
146-015-04	土師器 付身 44	F18 SD63	30	2.9	—	態様著しく調整不明	中々層	褐色 灰褐色 2.5Y8/3	約50%	
147-015-04	原産器 付身 44	F18 SD66	33	3.3	つまみ部 3	天井部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、体部内面凹転ナデ、体部外面凹転ナデ、つまみ部内面ナデ	中々層(～1.5m前後の砂粘土)	灰白 灰白 N6/0 N5/0	約50%	
148-017-02	原産器 付身 44	C19 SD66	約17.5	4.2	底径 13	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面ナデ	中々層	灰白 灰白 N6/0 N7/0	約50%	
149-018-04	原産器 付身 44	C21 SD77	約12	4	—	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ	中々層	褐色 褐色 2.5YR7/6 2.5YR8/3	約50%	
150-018-01	原産器 付身 44	C18 SD75	14	4	高径 9.4	腹部～口縁部内面凹転ナデ、口縁部～体部外面凹転ナデ、高台部内面凹転ナデ、高台部外縁付け手ナデ、底部外面ナデ	中々層(～3m前後の砂粘土)	褐色 灰褐色 5Y6/1 10YR7/2	約50%	足形

第7表 出土土物観察表(3)

No.	発祥 番号	器種	出土 遺構	計測 口径(cm)	高さ (cm)	長さ(cm)	調整・技法の特徴	胎土	構成 色調	残存 備考
54	018-08	土師器 壺	H19 SD126	9.5	4.3	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部上外面のみナデ	中や赤(～1.5cm前後の砂粒含む)	黒色 N7	約50%
55	019-03	土師器 杯	G15 SD183	10.5	3.3	—	顔面若しく調整不明	中や赤(～2.5cm前後の砂粒含む)	黒色 10YR/4-3	約20%
55	018-03	土師器 杯身	G15 SD183	10.5	3.6	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ	中や赤(～2.5cm前後の砂粒含む)	黒色 10YR/4-3	約50%
54	018-04	土師器 杯身	G19 SD186	12.5	3.5	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、底部外面へつ切り	中や赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 5YR/6-3 2.5Y/5.2 2.5Y/6.2	約20%
55	019-01	土師器 壺	C12 SD109	約12	10.5	—	顔面若しく調整不明	中や赤(～3.0cm前後の砂粒含む)	黒色 10Y/3-3	約20%
54	019-04	土師器 杯	F15 SD195	13	2.4	—	顔面若しく調整不明	中や赤(～1.5cm前後の砂粒含む)	黒色 5YR/6-3	約20%
55	018-06	土師器 壺	F15 SD195	9	3.8	高さ 5.5	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、高台部取り付けナデ、底部外面ナデ	中や赤	黒色 N7 5Y7/6	約20%
54	020-01	土師器 壺	G19 SD198	約12.8	7.8	—	口縁部内外面のみナデ	中や赤(～1.5cm前後の砂粒含む)	黒色 2.5Y/7.2	約20%
54	022-08	土師器 初形壺	G17 SD119	6	6.7	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ	中や赤	黒色 N7.0 5Y7/6	約10%
54	022-06	土師器 杯身	G17 SD119	6	5.2	高さ 9.4	底部～口縁内面のみナデ、体部外面のみナデ、高台部取り付けナデ、底部外面ナデ	中や赤	黒色 N5.0 N7.0	約10%
61	018-05	土師器 杯身	G17 SD119	12	4.4	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、底部外面ナデ	中や赤(～1.5cm前後の砂粒含む)	黒色 10YR/3-3 7.5YR/5-3	約10%
62	020-06	土師器 杯身	D16 SD113	12	3.5	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、底部外面ナデ	中や赤(～2.5cm前後の砂粒含む)	黒色 5Y7/7	約30%
61	021-03	土師器 杯身	F21 SD125	12.5	2.8	つまみ 5.9	大井戸～口縁部内面のみナデ、口縁部～体部外面のみナデ、つまみ取り付けナデ	中や赤	黒色 N5.0 N7.0	約50%
61	021-02	土師器 杯身	F21 SD125	12.2	3.8	高さ 8.9	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、高台部取り付けナデ、底部外面ナデ	赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 5YR/6-3 5YR/5-3 5YR/4-1	約10%
62	017-04	土師器 壺	G18 SD195	約16.6	7.8	—	顔面若しく調整不明	中や赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 2.5Y/6.2 2.5Y/6 10YR	約10%
61	016-03	土師器 壺	G19 SD195	—	7.3	高さ 13	底部～体部内面のみナデ、体部外面のみナデ、底部外面ナデ	中や赤	黒色 5Y7/7	約10%
62	022-05	土師器 杯身	G15 SD139	11	3.2	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、底部外面のみナデ	中や赤	黒色 N5.0 N7.0	約50%
62	022-01	土師器 杯身	G15 SD139	12.6	7.1	—	口縁部内外面ナデ	中や赤	黒色 N4.0 7.5Y/7.1	—
61	023-03	土師器 杯身	C19 SD142	約15	3.2	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、体部外面のみナデ	中や赤(～1.5cm前後の砂粒含む)	黒色 7.5YR/4-7 7.5YR/5.1	約10%
70	021-01	土師器 杯身	H18 SD134	—	1.7	高さ 5.5	底部～体部内面のみナデ、体部外面のみナデ、高台部取り付けナデ、底部外面のみナデ	赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 2.5Y/7.1	約10%
71	014-01	土師器 壺	H8 SX4	19	7.6	—	体部～口縁内面のみナデ、口縁部内外面のみナデ、口縁部外面のみナデ、体部外面のみナデ	中や赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 10YR/3-3	約10%
72	014-02	土師器 壺	H8 SX4	—	—	—	体部内外面ナデ	中や赤(～1.5cm前後の砂粒含む)	黒色 10YR/3-3 10YR/4-6	—
73	015-06	製土器	H19 SX4	—	4.5	高さ 1.2	—	中や赤(顔砂粒含む)	黒色 5YR/6-4	—
73	015-01	土師器 杯身	H18 SX4	約11.2	1.1	—	体部外面のみナデ、底部～体部内面のみナデ、底部外面ナデ	赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 N8.0	約30%
73	014-04	土師器 壺	H8 SX4	10.5	3.7	—	大井戸内面ナデ、体部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外面のみナデ、体部外面のみナデ	中や赤(～2.0cm前後の砂粒含む)	黒色 N6/0 7.5Y/7.1 7.5Y/4/1	約50%
73	015-02	土師器 杯身	H18 SX4	10	3.4	受取 11.8	底部内面のみナデ、底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外面のみナデ、底部外面のみナデ	中や赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 7.5Y/6/1	約50%
73	014-05	土師器 杯身	H18 SX4	9.5	3.2	受取 11.5	底部内面ナデ、体部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外面のみナデ、底部外面のみナデ	中や赤(～2.0cm前後の砂粒含む)	黒色 N6/0	内形
73	014-06	土師器 杯身	H18 SX4	16.4	3.5	—	大井戸～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外面のみナデ、大井戸外面のみナデ	中や赤(～1.5cm前後の砂粒含む)	黒色 10Y/6/1	約30%
73	014-03	土師器 高台	H18 SX4	—	高さ 3.3	—	体部内面のみナデ、体部外面のみナデ、脚部内面のみナデ、脚部外面のみナデ	中や赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 10Y/5/1	約10%
81	015-03	土師器 高台	H19 SX4	—	高さ 4.8	高さ 8.5	体部内面のみナデ、体部外面のみナデ、脚部内面のみナデ、脚部外面のみナデ	中や赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 10Y/6/1	約20%
81	024-04	土師器 杯身	H18 SX4	10	3.3	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、大井戸外面のみナデ	中や赤(～2.0cm前後の砂粒含む)	黒色 10Y/6-3 10Y/5/1	約30%
82	030-02	土師器 杯身	H19 包含物	約13	7.6	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、大井戸外面へつ切り	中や赤	黒色 N7/0	約30%
83	029-05	土師器 杯身	H18 包含物	約9	3.4	受取 13.8	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～底部外面のみナデ	中や赤(～3.0cm前後の砂粒含む)	黒色 10Y/6/1	約50%
83	028-06	土師器 杯身	H14 包含物	約11	3.5	受取 13.5	体部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、体部上外面のみナデ	赤	黒色 N6/0	約20%
83	028-03	土師器 杯身	H19 包含物	約10.5	3.7	受取 約13	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、底部外面のみナデ	赤	黒色 N6/0	約20%
81	028-02	土師器 杯身	H15 包含物	12	3.3	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ	中や赤(～2.5cm前後の砂粒含む)	黒色 N6/0 2.5Y/8.2	約30%
83	028-03	土師器 杯身	F15 包含物	13	3.6	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ	中や赤(～3.0cm前後の砂粒含む)	黒色 N6/0 10YR/7-3 7.5Y/7.2	約30%
83	022-05	土師器 杯身	D15 包含物	10.2	3.5	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、底部外面のみナデ	中や赤(～2.5cm前後の砂粒含む)	黒色 N8.0	約30%
81	021-05	土師器 杯身	D15 包含物	12.8	3.8	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ	中や赤	黒色 N5/0 5YR/7.1	約30%
81	022-07	土師器 杯身	C19 包含物	約10.5	4.7	—	底部内面ナデ、底部～体部内面のみナデ、口縁部～体部外面のみナデ、底部外面のみナデ	中や赤	黒色 10YR/4-3 10YR/6-3 N5/0	約30%
91	023-01	土師器 杯身	H19 包含物	約10.5	4.8	—	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～底部外面のみナデ	赤	褐色 2.5Y/7.2	約50%
92	023-01	土師器 杯身	F19 包含物	14	2.6	つまみ 2.7	大井戸内面～口縁部外面のみナデ、体部外面のみナデ、つまみ取り付けナデ	中や赤(～1.0cm前後の砂粒含む)	黒色 7.5YR/4/1 7.5Y/6.2	約30%
91	033-02	土師器 杯身	F17 包含物	12.3	3.6	高さ 9.5	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、高台部取り付けナデ、底部外面のみナデ	中や赤(～2.0cm前後の砂粒含む)	黒色 2.5Y/4/1 2.5Y/5/1 10YR/4-3	約30%
91	032-06	土師器 杯身	F19 包含物	13.2	3.9	高さ 9.5	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、高台部取り付けナデ	中や赤(～2.5cm前後の砂粒含む)	黒色 3Y6/1 3Y5/1	約30%
91	022-03	土師器 杯身	H15 包含物	約10.5	3.5	高さ 11	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、底部外面のみナデ	中や赤	黒色 2.5Y/7	約30%
91	023-04	土師器 杯身	D15 包含物	18.8	3.5	高さ 14	底部～口縁内面のみナデ、口縁部～体部外部のみナデ、高台部取り付けナデ	中や赤(～4.0cm前後の砂粒含む)	黒色 N7/0	約30%
91	023-01	土師器 杯身	H24 包含物	—	高さ 2	高さ 17.2	底部～体部内面のみナデ、体部外面のみナデ、高台部取り付けナデ、底部外面のみナデ	中や赤	黒色 5Y3/1	約10%
91	023-01	土師器 杯身	F19 包含物	—	高さ 2.7	高さ 9.5	底部～体部内面のみナデ、体部外面のみナデ、高台部取り付けナデ、底部外面のみナデ	中や赤	黒色 2.5Y/6.2 2.5Y/5/1 10YR/3-3	約30%
91	023-02	土師器 杯身	H17 包含物	—	高さ 3.4	高さ 14.4	底部内面のみナデ、体部内面のみナデ、体部外面のみナデ、高台部取り付けナデ、底部外面のみナデ	中や赤(～2.5cm前後の砂粒含む)	黒色 N8/0 N7/0	約10%

第8表 出土土物観察表(4)

No.	資料 番号	器種	出土 遺物	計測 口径(cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	調査・技法の特徴	胎土	構成 色調	残存 備考
201-022-02		灰皿器 杯母	A5 包含物	—	底径 9.3	底径 9.3	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	灰褐色 2.5Y7/1	約10%
202-021-04		灰皿器 高林	B13 包含物	11.9	底径 4.5	—	体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ	や中層(～1mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 N6.0 N7/0	約10%
203-024-04		灰皿器 杯母	H9 包含物	—	底径 9.9	底径 9.9	体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ	や中層(～1.5mm前後の砂粒を含む)	明オリーブ色 2.5Y7/1	約10%
204-016-01		灰皿器 鉢鉢	F7 包含物	—	底径 12.7	底径 8.5	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ	や中層	灰褐色 10Y6/1～5/1	約10%
205-023-04		灰皿器 器	H11 包含物	約21	底径 6.7	—	器底著しく調整不明	や中層	淡黄色 2.5Y7/4	約10%
206-028-01		灰皿器 器	G15 包含物	約50	底径 12.9	底径 約18	口縁部内面に帆ナデ	密	灰褐色 N5.0 10Y5/1	口縁部約10%
207-028-02		灰皿器 器	G15 包含物	約50	底径 10.4	—	体内部面に帆ナデ	密	黄褐色 2.5Y7/1	口縁部約10%
208-021-01		灰皿器 器	G17 包含物	約90	底径 9.2	—	体内部面に付文、底部～口縁部帆ナデ、口縁部外面に帆ナデ、体外部面フラタキ	や中層	灰褐色 N7.0 N5/0	—
209-031-03		土師器 土師器	F1 土師器	—	底径 9.4	底径 9.1	体内部面フラ、体外部面フラ、体内部面フラ、体外部面フラ	や中層(～5mm以下の砂粒を含む)	灰褐色 2.5Y7/6	体部約10%
210-025-05		土師器 杯	D17 包含物	12.2	3.3	—	体内部面ナデ、口縁部内面にコナデ、体外部面ナデ+オセエ、底部外面調整著しい	や中層(～1mm前後の砂粒を含む)	褐色 2.5Y7/6	約70%
211-025-02		土師器 杯	F18 包含物	11.8	3.5	—	器底著しく調整不明	粗(～3mm前後の砂粒を含む)	淡黄褐色 2.5Y7/6	約50%
212-025-03		土師器 杯	D15 包含物	13.6	3.6	—	体内部面ナデ、口縁部内面にコナデ、口縁部外面フラタキ、体外部面ナデ+オセエ	や中層(～3mm前後の砂粒を含む)	淡黄褐色 10YR8/3 10YR8/1	約50%
213-027-02		土師器 杯	F15 包含物	16.8	2.2	—	体内部面調整著しい、体外部面ナデ	や中層	褐色 2.5Y7/6	約50%
214-029-02		土師器 器	G15 包含物	約21.5	底径 5.5	—	体内部面ナデ、口縁部内外面にコナデ、体外部面フラ	粗(～4mm以下の砂粒を含む)	淡黄褐色 2.5Y7/6	口縁部約10%
215-027-01		土師器 器	F17 包含物	16	3.6	—	器底著しく調整不明	や中層(～1.5mm前後の砂粒を含む)	にじみ黄褐色 10Y7/3	約20%
216-029-01		土師器 器	G17 包含物	約22.5	底径 3.7	—	体内部面フラ、口縁部内外面にコナデ、体外部面フラ	粗(～1mm前後の砂粒を含む)	にじみ黄褐色 10Y7/3	口縁部約10%
217-025-01		土師器 器	D17 包含物	21	底径 11	—	体内部面オセエ+ナデ、口縁部内面にコナデ、口縁部外面にコナデ、体外部面オセエ	や中層(～2mm前後の砂粒を含む)	淡黄褐色 10YR8/3 2.5Y7/4	約10%
218-023-07		土師器 器	H4 包含物	—	底径 4.9	底径 約15	底部～体内部面ナデ、体外部面フラ、口縁部フラタキ	や中層	灰褐色 5Y5/1 10YR8/4	約10%
219-025-02		土師器 器	D16 包含物	—	—	—	体内部面付文、体外部面フラ	や中層(～2mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 2.5Y7/1	約10%
220-023-08		製瓦土器	H18 包含物	—	底径 5.8	底径 1.3	—	や中層	褐色 2.5Y7/6 2.5Y7/4	約10%
221-027-03		製瓦土器	F18 包含物	18	5.7	底径 1.9	器底著しい、体外部面ナデ	や中層(～4mm前後の砂粒を含む)	褐色 2.5Y7/6	約10%
222-000-02		コロンボ 製瓦土器	SK12 包含物	—	底径 2.3	底径 6.5	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ、底部外面未切り	や中層(～1.5mm前後の砂粒を含む)	にじみ黄褐色 10YR8/3 10YR7/4	約20%
223-000-05		製瓦土器	H10 包含物	—	底径 3.4	底径 9.3	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層(～1.5mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 10YR8/2	約10%
224-000-04		製瓦土器	SK12 包含物	—	底径 2.3	底径 7.5	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	2.5Y7/2	約10%
225-021-04		灰皿器 杯母	F16 SD129 包含物	15	4	底径 6.8	底部～口縁部内面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層(砂粒を含む)	淡黄色 2.5Y7/1 2.5Y7/3	約10%
227-025-05		灰皿器 杯母	F16 SD129 包含物	14	3.5	底径 6.8	底部～口縁部内面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	密(～1.5mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 5Y7/1	約10%
228-020-04		灰皿器 杯母	F16 SD129 包含物	—	底径 2.8	底径 5.6	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ、底部外面未切り	や中層(～1mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 N7.0 N6.0	約10%
229-022-02		灰皿器 器	F16 SD129 包含物	—	底径 3.6	底径 3.6	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ、底部外面未切り	や中層(～1.2mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 2.5Y7/6 10YR8/3	約10%
230-013-02		灰皿器 器	SK107 包含物	12.4	3.8～3.9	底径 6.7	底部～口縁部内面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	灰褐色 2.5Y8/1	約50%
231-013-03		灰皿器 器	F18 SK107 包含物	15.3	2.8	底径 6.9	底部～体内部面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	灰褐色 2.5Y8/1	約50%
232-012-02		灰皿器 器	SK107 包含物	—	底径 1.7	底径 7.2	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面下半部帆ナデ+高台部取り付けナデ、底部外面フラタキ	や中層	2.5Y8/1	約50%
233-013-05		灰皿器 器	F18 SK107 包含物	—	底径 1.9	底径 7.9	底部～体内部面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	灰褐色 2.5Y8/1	約50%
234-013-04		灰皿器 器	F18 SK107 包含物	—	底径 1.8	底径 6.6	底部～体内部面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面フラタキ	や中層	灰褐色 2.5Y8/1	約50%
235-013-01		灰皿器 器	F18 SK107 包含物	21.3	3.8	底径 11.2	底部～口縁部内面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、体外部面下半部帆ナデ+高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層(～1mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 2.5Y8/2	約50%
236-012-01		灰皿器 器	SK107 包含物	—	底径 13.8	底径 13.8	底部～口縁部内面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、体外部面下半部帆ナデ+高台部取り付けナデ	や中層(～1.5mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 N8.0/N7.0	約50%
237-029-05		土師器 器	G19 包含物	8.6	3.1	底径 4.8	器底著しく調整不明	や中層	淡黄色 2.5Y7/4	約50%
238-028-03		土師器 杯	G15 包含物	—	3.1	—	器底著しく調整不明	粗(～1.5mm前後の砂粒を含む)	褐色 2.5Y7/6	約50%
240-030-04		土師器 杯	G17 包含物	約10.5	3.4	底径 4.2	器底著しく調整不明	や中層(～2mm前後の砂粒を含む)	褐色 2.5Y7/2	約10%
241-030-04		土師器 杯	F17 包含物	—	底径 1.2	底径 4.2	底部～体内部面ナデ、体外部面ナデ、底部外面未切り	粗(～1mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 2.5Y7/2	約10%
243-030-02		土師器 杯	F4 包含物	—	底径 1.7	底径 1.7	底部～体内部面フラ、体外部面フラ、体外部面未調整	粗(～2mm前後の砂粒を含む)	にじみ黄褐色 2.5Y7/6-1	約10%
245-022-02		灰皿器 器	C16 包含物	約14	2.8	底径 7.7	底部～口縁部内面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	灰褐色 5Y3/1	約50%
246-033-04		灰皿器 器	F19 包含物	14	3	底径 7.2	底部～口縁部内面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	灰褐色 N8.0	約50%
247-033-04		灰皿器 器	F18 包含物	13.8	3.8	底径 6.6	底部～口縁部内面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	密	灰褐色 N8.1	約50%
248-033-02		灰皿器 器	F15 包含物	—	底径 2.3	底径 5.2	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ+高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	灰褐色 2.5Y8/2	約10%
249-035-07		灰皿器 器	F15 包含物	—	底径 2.4	底径 9	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層(～2.5mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 2.5Y8/1	約10%
249-033-06		灰皿器 器	F6 包含物	—	底径 1.5	底径 10.2	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	灰褐色 2.5Y7/2	約50%
249-033-06		灰皿器 器	H14 包含物	—	底径 2.3	底径 8	底部～体内部面に帆ナデ、体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	や中層	灰褐色 2.5Y7/2	約50%
249-033-04		灰皿器 器	E21 包含物	17	5.4	底径 5.9	体内部面ナデ、体外部面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	粗(～4mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 N8.0	約50%
250-034-02		灰皿器 器	D19 Pa.8 包含物	12	3.8	底径 5.6～6	底部～口縁部内面に帆ナデ、口縁部～体外部面に帆ナデ、高台部取り付けナデ、底部外面未切り	粗(～4mm前後の砂粒を含む)	灰褐色 2.5Y6/2 10YR5/2	底部 変形

第9表 出土遺物観察表(5)

No. 登録番号	器種	出土遺構	計測値			調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
			口径(cm)	高さ(cm)	径の物(cm)						
251-031-01	陶器 壺	D17 F12	-	残高 6.4	底径 12.8	燃焼若しく調整不明	粗 (~2mm前後の砂粒を含む)	赤	褐色 5Y7/7 2.5Y8/1	底部約50%	
252-020-07	陶器 甕	S1225	-	残高 1.3	高台径 8	底部~体部内面同転ナデ、体部外面同転ナデ、高台部取り付け後ナデ、底部外面ナデ	中や密 (~1.5mm前後の砂粒含む)	赤	灰白色 2.5Y8/1 2.5Y7/2	約10%	底部にモミガラ痕残る
253-022-06	砥石	F18 (包含物)	-	-	-	-	-	-	-	-	- 砂岩
254-032-03	砥石	F19 (包含物)	-	-	-	-	-	-	-	-	- 砂岩
255-022-04	土塊	F17 (包含物)	長さ 3.1	幅 1.1	高さ 12.8	-	中や密 (~2.5mm前後の砂粒含む)	赤	に濃い黄褐色 10Y7.5/3	約90%	
256-030-04	土塊	F17 (包含物)	長さ 3.8	幅 1	高さ 2.96	-	中や密 (~2mm以下の砂粒含む)	赤	に5.0黄褐色 7.5Y7/4 N8/0	完形	
257-022-05	土塊	F17 (包含物)	長さ 3.5	幅 1.3	高さ 3.31	-	中や密 (~2mm前後の砂粒含む)	赤	に5.0黄褐色 10YR7/4 2.5Y4/1	約70%	
258-034-07	刀子	F14 表土	残長 10.4	-	-	-	-	-	-	-	-
259-001-01	土師器 高杯	試測 No.2	19.3	残高 6.6	-	口縁部内外面同ナデ	中や密 (~2mmの砂粒、微粒を含む)	赤	に5.0黄褐色 10Y7.5/3 10Y7.5/4	口縁部約50%	
259-001-02	土師器 杯蓋	試測 No.1	10.2	残高 3.1	-	底部~口縁部内面同転ナデ、口縁部~体部上平外面同転ナデ、体部下平~底部外面同転ナデ後ナデ	中や密	赤	に5.0黄褐色 10Y7.5/3 10Y7.5/4	約50%	
261-001-03	灰土器 杯身	試測 No.1	9.1~9.4	3.4	-	底部~口縁部内面同転ナデ、口縁部~体部上平外面同転ナデ、体部下平~底部外面同転ナデ後ナデ	中や密 (~1mmの小石・砂粒含む)	赤	灰色 N6/0 N5/0	灰色 5Y4/1	ほぼ完形

第10表 出土遺物観察表 (6)

[遺物観察表註]

報告書に掲載した遺物の観察表は、以下の規則によって作成した。

- 1 観察表左端の番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号をふっていない。したがってこの番号が遺物の全てでない。
- 2 実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの3桁は用紙の番号で、後側の2桁は用紙内での実測した順序の番号である。
- 3 出土遺構は上段に地区番号を表し、下段に遺構番号を示している。地区・遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考にされた。
- 4 器種については、判明しているものについて記載した。
- 5 計測値について記載した口径・器高・その他は、それぞれ最大値をとっている。また、「-」は、計測できないものを表している。単位は、記載のとおりcmである。さらに遺物によっては、長・幅・厚・重・高台径・底径・つまみ径などを表すこともある。
- 6 調整技法の特徴については、あくまでも成されている調整について記述しており調整順序によるものでない。
- 7 胎土については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。
- 8 焼成については、良・並・不良の3段階に分けて、その中間に位置する場合はややを付記している。
- 9 色調については、『新版 標準土色帖』(小山・竹原編1997年)に基づいて表記した。
- 10 残存については、遺物の残りの割合で表記している。「-」は、表しきれないものである。
- 11 備考は、その遺物における特徴的な事柄を記載しているか、遺物取り上げの際の番号などを表記している。
- 12 遺物番号75・84は、欠番である。

IV ま と め

1 弥生時代

1) 方形周溝墓について

繰り返しになるが調査区内において確認できた方形周溝墓は計19基である。弥生時代における山村遺跡は、中期の墓域として認識してよいであろう。

まず、最初に方形周溝墓の群単位についてみておきたい。1号墓から7号墓にかけては、ほぼ一列に並び周溝外縁部を揃えて造墓している（Aグループ）。1号墓の規模を考慮すると7号墓を除いて2号墓以降は、2列に並んで存在した可能性が高い。8～11号墓と16～19号墓（Bグループ）はほぼ北側の周溝外縁部を直線的に揃えられている。南側には12号墓及び13号墓があり、8号墓からのものと並列しており2列の群単位を示す。その他の14・15号墓は、それぞれ並びが不揃いである。

次にそれぞれの方形周溝墓の平面形について見ておきたい。調査で検出した方形周溝墓は、以下のいずれかに属する。

①溝が全周するもの

②溝がコーナー部分において1～4箇所切れるもの

おおよそその形状に分けられる。まず、①である可能性が高いものは、1・3・8・14号墓がある。しかしながら周溝のコーナー部は非常に狭くて浅くなっている。

②のものは、その他が全て当てはまる。なかでも15号墓は、調査区範囲外で全て検出できていないがやや陸橋部分が中央に寄りはじめている。周溝の中央に陸橋部を持つもので県内では、の最も古い類型の中には、中期中葉に造墓される納所遺跡の1例がある。その他では、弥生時代後期から欠山様式段階で一般的にみられるようになるが、それに至る前段階として考えてもよいのではなかろうか。

方形周溝墓の造墓のあり方に変化があったのは、中期中葉から後葉にかけての時期であろう。

ここで述べられる重要な点は、弥生時代後期以降においてみられる普遍的な方形周溝墓の形態の前段階を含んでいたことであろう。付け加えるならば弥

生時代中期中葉以降における社会変化が方形周溝墓の造墓のあり方に表れているとみられる。

次に墓道は、一般的に墓域と居住域が往来できるように存在していたと推測される。AグループとBグループ間に設けられたとみられる墓道は、互いの周溝の外縁部からの幅で約2～3.5mである。東側は調査区外に延びており、西側は丘陵の急斜面にあたる。また、南側の14号墓と15号墓の間においても墓道と呼べそうな僅かな空間地があり、その先は11・13・16・19号墓に当て止まっている。

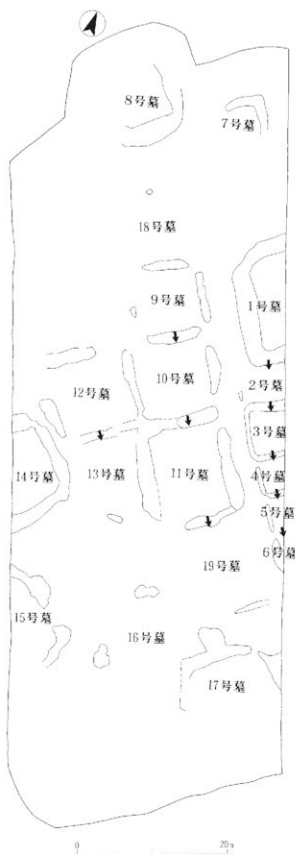
一方、居住域は調査地から西側の一つ谷を挟んだ丘陵上において墓上遺跡があり、発掘調査によって竪穴住居と掘立柱建物が検出されている。その居住域との往来については、どのようになされていたのなか否か。墓上遺跡と山村遺跡の丘陵尾根伝いにぐるりと迂回するルート、谷の斜面を登り下りする直線的なルートを想定できそうである。尾根伝いのルートよりも直線的に繋ぐルートの方が妥当ではなかろうか。なかでも現状は急斜面であるが7号墓と8号墓間が一つの有力な候補とも考えられるのではなかろうか。

次に、方形周溝墓の造墓順としては周溝の平面形からある程度予測できそうである。Aグループは、1号墓→2号墓→3号墓→4号墓→5号墓→6号墓とみられる。また、7号墓について同群として扱ったものの周溝からでは前後関係は判断できない。規模的な要素や遺物の新旧から考えると1号墓→2号墓→3号墓→4号墓→5号墓→6号墓→7号墓と考えられそうである。とりわけ1号墓は、全体の中で最も大きい規模を有している。

同様にBグループは9号墓→10号墓→11号墓→19号墓→17号墓→8号墓→18号墓であろう。Bグループ南群は12号墓→13号墓と考えられそうである。

他のもの（14・15号墓）については、周溝の接点がなく前後関係を判断し難い。

また、山村遺跡ほぼ全域に渡って方形周溝墓が存在したであろうことは、ほぼ間違いないとみられる。第1次調査での方形周溝墓は、現状でこそ奥まった



第68図 方形周溝墓略図 (1/500)

位置であろうが丘陵全体が方形周溝墓によって埋め尽くされる一角を占めるとみられる。山村道跡は総面積約30,000㎡であり、方形周溝墓の1基あたりを仮に8m四方クラスとするならば、ざっと約300基以上存在したとみられる。最後に、今後の課題としては、埋葬主体を含めた上で方形周溝墓を考えなければならない。それらの確認によって方形周溝墓のあり方を理解することができるのでは、なかろうか。

2) 凹線文出現前後について

方形周溝墓から出土した土器の大多数が細頸壺とみられる。その中で口縁部における凹線文を見出せるものがある(20・38・48)。9・18号墓出土の20は、他のものと比べて新しい様相を示す。18号墓出土の48についても同様である。しかしながら遺物のほとんどは凹線文系でないがとりわけ15号墓出土の44は、口縁部緩い傾斜をもって立ち上がっており凹線文の出現の前段階かもしれない。

3) 底部穿孔土器について

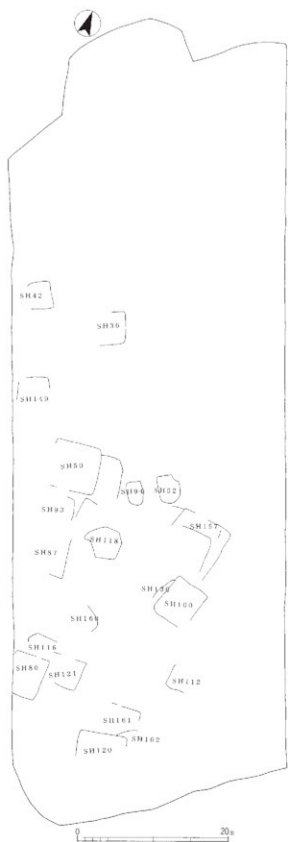
調査によって周溝から出土した弥生土器のなかには、底部に円形とみられる穿孔を有したものがある(18)。過去の発掘調査例には、弥生時代中期において方形周溝墓から体部を焼成後に穿孔したものがある。また、集落から出土した例も認められる。現段階では、底部に穿孔する土器と体部に穿孔する土器は同時に行っていると考えられよう。従って前者と後者には、それぞれ異なる意味を有したものとして捉えることができるのではなかろうか。

2 奈良時代以降について

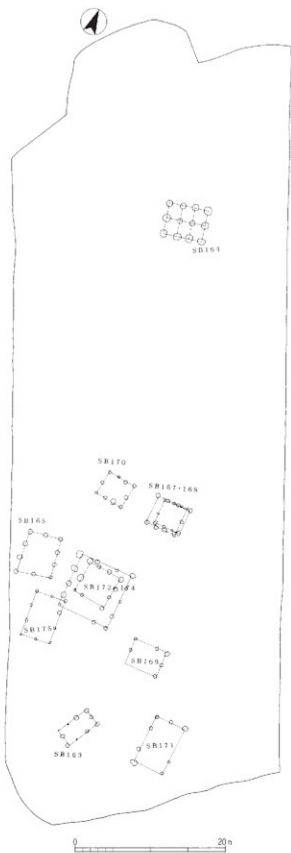
1) 集落について

山村道跡において集落を形成したのは、7世紀末から9世紀頃までとみられる。竪穴住居を主体とした7世紀末から8世紀中頃、掘立柱建物を主体とした8世紀中頃以降は掘立柱建物によって構成されていたとみられる。

竪穴住居は、全体で20棟を以上存在したとみられる。しかし、重複して建て直されているものが多く調査区内でとりわけ顕著に判断しやすいSH 120・161・162から少なくとも3回以上の建て替えが行わ



第69图 竖穴住居略图 (1/500)



第69图 据立柱建物略图 (1/500)

れたとみられる。また、同時期とみられる掘立柱建物は、確認できず竪穴住居が主体とである集落であろうとみられる。

8世紀中頃以降になると急速にこの集落は、変化する。全て掘立柱建物によって構成され3間×2間の倉庫として判断されるものが丘陵の一番トップに位置するようになる。掘立柱建物群も少なくとも2回以上の建て替えが認められる。柱穴は、かなりの数が存在している一方で、遺物においても灰軸陶器や緑軸陶器などが出土しており平安時代に入る時期までこの集落が存在していたとみられる。この集落は、同じ係累的な集団によって成りたっていたのであればかなり連続的であったとみられる。

2) SH112出土遺物について

この竪穴住居は、7世紀末から8世紀初頭とみられる。出土した遺物は、多種にわたり非常に良好な資料である。86～109は、須臾器杯蓋・杯身・高杯・鉢・土師器甕が含まれている。とりわけ県内の北勢地域で数少ない資料であろう。103は、胎土からみると器壁外面は暗青灰色、胎土内は、暗赤褐色状であり四日市市内の岡山古窯址出土須臾器と似通っており、そこから運ばれてきた可能性があるかも知れない。また、他の当遺跡から出土した須臾器には、四日市市域に所在する窯から運ばれたものもあるかもしれない。

3) 製塩土器について

今回出土した製塩土器は、総数8点にのぼる。その内訳は、志摩式製塩土器2点(72・221)、知多式製塩土器6点(114・115・131・144・173・220)である。三重県内において知多式製塩土器が出土した遺跡は、四日市市中村遺跡、鈴鹿市天王遺跡、鳥羽市白浜・贄・乾・奈佐遺跡の県内の北勢地域及び志摩半島先及び離島といったやや偏っている。志摩式製塩土器自体は、県内各所において出土している。

しかしながら、志摩式と併せて出土した例は当遺跡に限られており、このことだけでも非常に重要である。また、このことはこの時期の製塩の流通に関わる問題の一端を示している可能性もあろう。

それぞれの遺物の出土状況をみると知多式の

ものは柱掘形出土(3点)のものが多く、志摩式は竪穴住居から出土している(1点)。残りは包含層からの出土である。また、知多式は脚部のみの出土で、杯部は確認できなかった。なかでも志摩式・知多式と併せて出土してはいない。よって遺物自体の時期差及び志摩式から知多式の使用の変化を窺えよう。

志摩式製塩土器は、先達の研究から固形塩製作用とされ、成形技法及びおおよその時期区分がなされている。しかしながら、約200年間以上にわたって存続している一方で形態変化に乏しく、志摩式製塩土器自体醜く完形のものほとんどなく、編年に著しく困難を極める。過去の調査例から斎宮出土のものが最古とされ、8世紀第3四半期から第4四半期に属するものが存在している。竪穴住居(SH80)から出土したもの(72)は、他の遺跡から出土しているものと同様破損しているが、8世紀前葉から8世紀中葉にかけての土器(68～71)が出土していることから同時期とみてよいのではなかろうか。また、他のものもおおよそ同時期とみてよからう。つまり志摩式製塩土器の成立は、若干遡り得ると考えられるのではなかろうか。

さらに、柱穴から出土している知多式製塩土器は、4AⅢ類とみられ8世紀中葉以降のものとみられ掘立柱建物の時期とほぼ違えない。よってこの集落では8世紀中葉の段階で志摩式製塩土器から知多式製塩土器へと何らかの理由によって転換したと見られる。

4) 緑軸陶器について

出土したなかでは、実測に堪えられないものが数点あり、実測図にのせられたものは1点(242)だけである。周辺域の久留信遺跡、大久知山畑遺跡、永井遺跡、宮の西遺跡等出土している遺跡は、限られている。1点程度で当遺跡を判断するのは、難しいが朝明郡衙に付する官人層が在地有力者層の集落である可能性が高いのではなかろうか。

3 小結

弥生時代中期においては、墓域の一端を確認した。このことは、北側で確認された集落域(菟上遺跡)及びさらに銅鐸が出土した地点(重地山)と繋がっ

ていき大きな集団を形成し、この地域の一つのモデルケース的な要素を持っているとして捉えられるのではなからうか。また、遺物についても方形周溝墓の周溝からであるが良好な資料が出土した。

奈良時代以降については、山村遺跡は、周辺に所在する西ヶ丘遺跡・中村遺跡・貝野遺跡等を含め朝明川流域に点在し、朝明郡衙に関わる遺跡が郡衙に関わる官人層の集落であろうとみられ、当遺跡から出土した遺物には豊富な資料を含んでいることから窺えよう。

最後に報告書をまとめるにあたって筆者の能力不足、知識不足等があり整理作業にかなりの時間を費やすこととなった。しかしながら、関係者一同の叱咤激励のもと刊行することができた。ここに記して感謝したい。なるだけ簡潔かつ要点をまとめたつもりであるが欠けた事柄については筆者の力不足によるものである。

[参考文献]

- 山田猛「方形周溝墓の型式」『大鼻遺跡』（三重県埋蔵文化財センター 1994年）
- 鈴木克彦・伊藤裕偉・伊勢野久好・岩中淳之「伊勢・志摩」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』（第7回東海埋蔵文化財研究会 1990年）
- 伊藤久嗣「納所遺跡—遺構と遺物—」（三重県教育委員会 1980年）
- 船越重伸・水橋公恵・水谷裕康・赤松一秀・徳橋裕昌・田中美徳「墓上遺跡」『近畿自動車道名古屋神戸線埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター 2001年）
- 角正芳浩「Ⅳ 山村遺跡」『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2002年）
- 鈴木克彦・伊藤裕偉・伊勢野久好・岩中淳之「伊勢・志摩」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』（第7回東海埋蔵文化財研究会 1990年）
- 森岡秀人「弥生土器畿内様式の東方波及—正統四線文系土器文化の伊賀・伊勢への伝播と定着について（予察）—」『紀伊半島の文化史的研究（考古学編）』（関西大学文学部考古学研究室 1992年）
- 上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年—東海編—』（木耳社 2002年）
- 斎藤孝正「狼狽・美濃須術」『季刊考古学 第42号』（雄山閣 1993年）
- 斎藤孝正・後藤健一編「須恵器集成四録 第3巻東日本編Ⅰ」（雄山閣 1995年）
- 中村浩編「古墳出土須恵器集成 第一巻近畿編Ⅰ」（雄山閣 1998年）
- 新田洋「三重県における製塩に関する予察」『三重考古3』（三重考古学研究会 1980年）
- 山本雅晴「三重県」『日本土器製塩研究』（青木書店 1994年）
- 立松彰「愛知県」『日本土器製塩研究』（青木書店 1994年）
- 西村美幸「伊勢湾西岸の製塩土器—研究の現状と課題—」『製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』（塩の会シンポジウム実行委員会 1997年）
- 森泰通「東海地方における消費地出土の製塩土器—特に固形塩の問題をめぐる—」『製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』（塩の会シンポジウム実行委員会 1997年）
- 高橋照彦「三彩・緑釉陶器と地方官衙」『月刊考古学ジャーナル7 No.475』（ニュー・サイエンス社 2001年）

写 真 图 版

図版 1



山村遺跡遠景（南西から）



山村遺跡遠景（南から）



山村遺跡、菟上遺跡、伊坂遺跡遠景（南西から）



菟上遺跡から山村遺跡を望む（北西から）



調査前風景（北から）



調査前風景（北から）



調査風景（北から）



調査風景（北から）



完掘状況（北西から）



完掘状況（南東から）



1号墓完掘状況（南西から）



方形周溝墓群完掘状況（北西から）



1号墓遺物出土状況（西から）



1号墓遺物出土状況（北から）



1号墓遺物出土状況（東から）



1号墓遺物出土状況（西から）



3号墓完掘状況（西から）



3号墓完掘状況（北から）



3号墓遺物出土状況（北から）



4号墓完掘状況（西から）



5号墓完掘状況（西から）



方形周溝墓群（北から）



方形周溝墓群（北から）



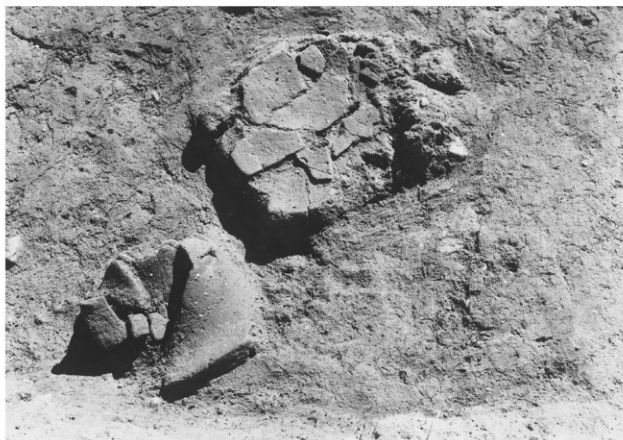
10及び11号墓完掘状況（北から）



9号墓遺物出土状況（北から）



9号墓遺物出土状況（南から）



9号墓遺物出土状況（北から）



10号墓遺物出土状況（西から）



11号墓遺物出土状況（西から）



11号墓遺物出土状況（南から）



11号墓遺物出土状況（南西から）



11号墓遺物出土状況（東から）



11号墓遺物出土状況（東から）



7及び8号墓完掘状況（東から）



8号墓完掘状況（南から）



7号墓遺物出土状況（東から）



12及び13号墓完掘状況（北西から）



13号墓遺物出土状況（北から）



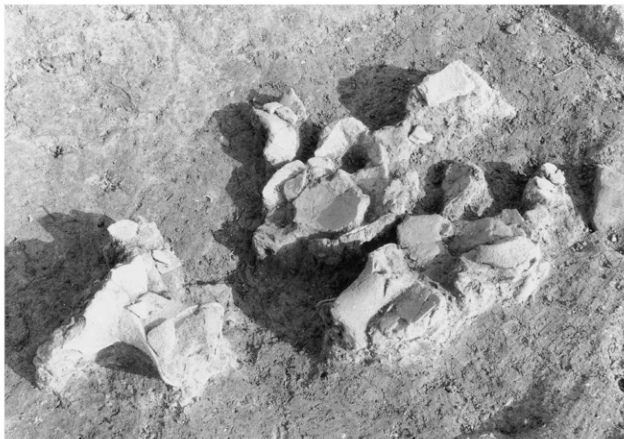
14号墓完掘状況（東から）



14号墓遺物出土状況（南から）



15号墓完掘状況（東から）



15号墓遺物出土状況（南から）



17号墓完掘状況（東から）



17号墓完掘状況（北から）



17号墓遺物出土状況（東から）



17号墓遺物出土状況（南から）



17号墓遺物出土状況（北から）



18号墓遺物出土状況（西から）



S H36完掘状況（西から）



S H42完掘状況（東から）



SH50完掘状況（北から）



SH50周辺完掘状況（北から）



SH80完掘状況（北から）



SH80及び116、121完掘状況（東南から）



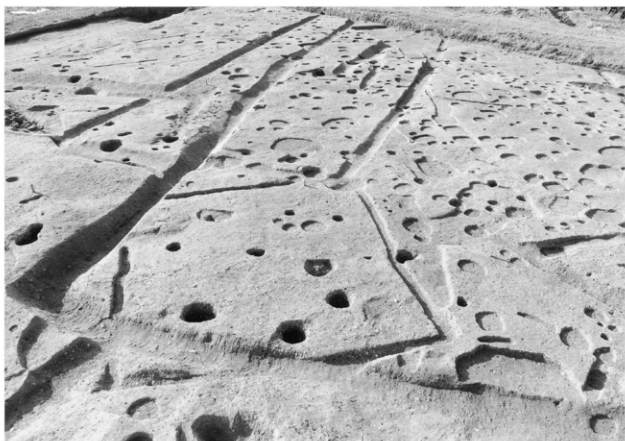
S H80カマド跡遺物出土状況（南から）



S H87完掘状況（東から）



S H100及び130完掘状況（北東から）



S H100周辺完掘状況（北東から）



SH112遺物出土状況（北から）



SH149完掘状況（北から）

図版31



S H157完掘状況（北から）



S H120、161、162完掘状況（北から）



S H120、161、162完掘状況（東から）



S H176遺物出土状況（北から）



掘立柱建物群完掘状況（北から）



掘立柱建物群完掘状況（東から）



掘立柱建物群完掘状況（北東から）



掘立柱建物群完掘状況（北から）



S B 164完掘状況（北から）



S B 164完掘状況（東から）



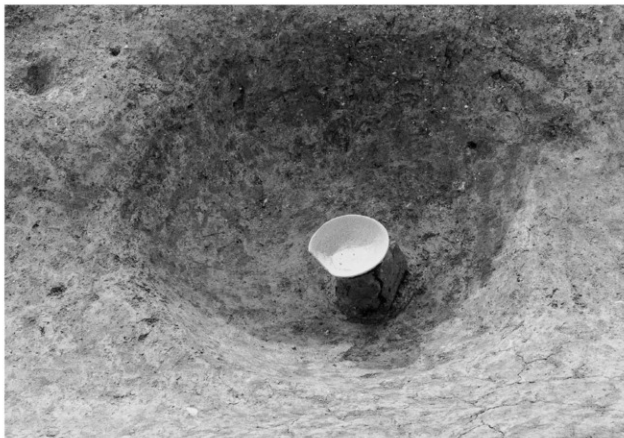
S K143完掘状況（東から）



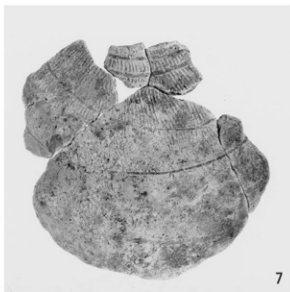
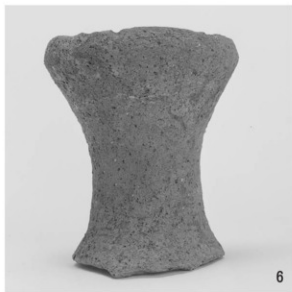
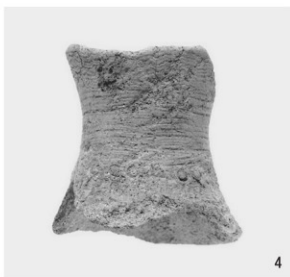
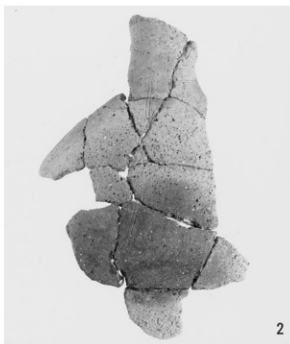
S D76遺物出土状況（西から）



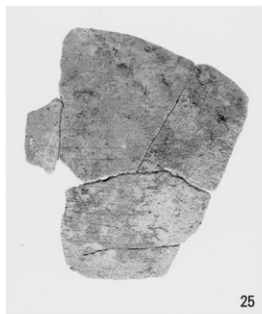
S K 166遺物出土状況（東から）



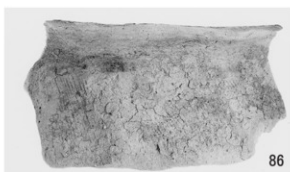
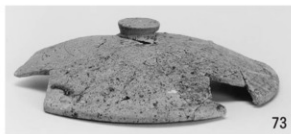
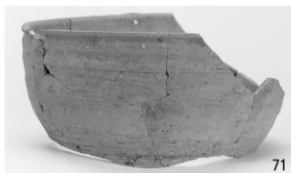
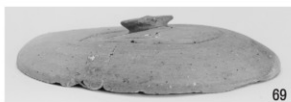
S K 12検出状況（東から）

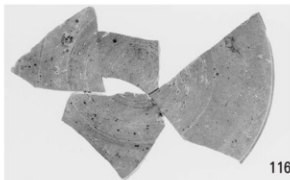
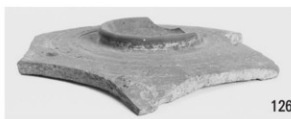


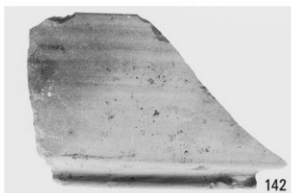
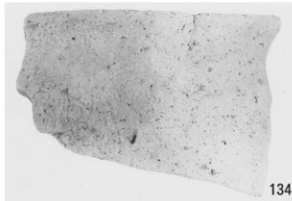
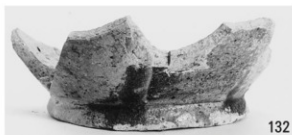


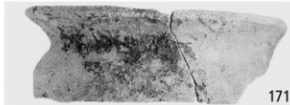
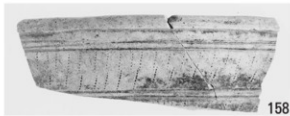
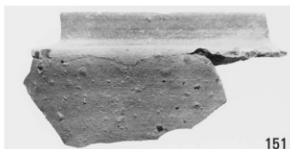
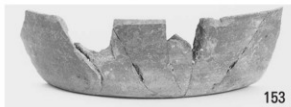


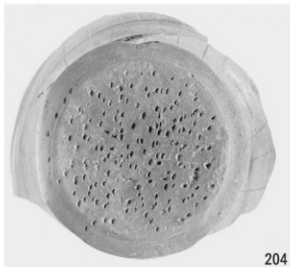
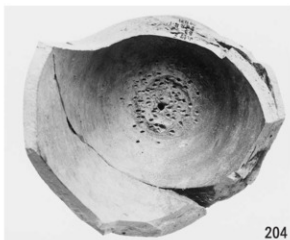
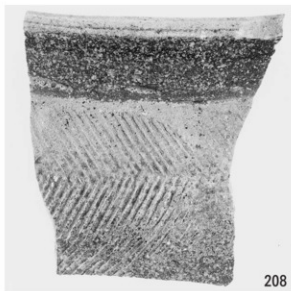


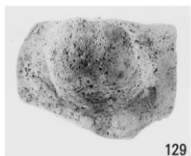
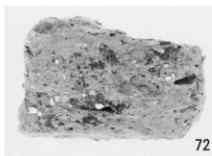
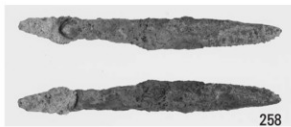
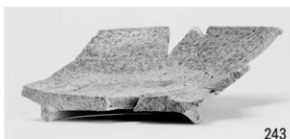
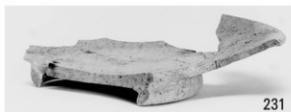
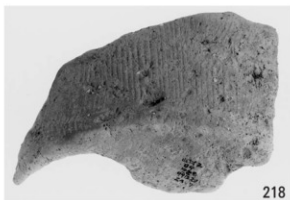


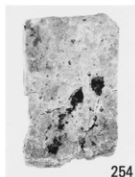
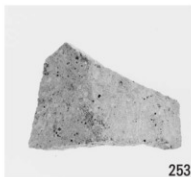
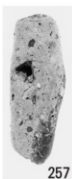
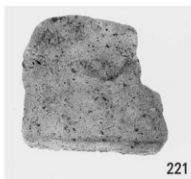
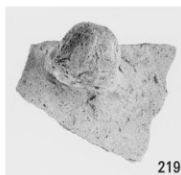
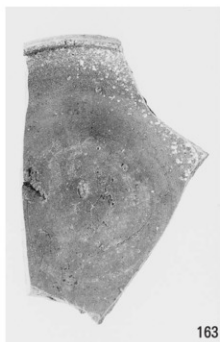
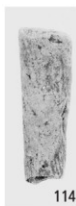












報 告 書 抄 録

ふりがな	やまわらいせきだいにじはっくつちょうさほうこく							
書名	山村遺跡（第2次）発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告							
シリーズ番号	244							
編著者名	萩原義彦							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515 - 0325 三重県多気郡明和町竹川503 ℡0596 - 52 - 1732							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまわらいせき	みえけんよつがいちし やまわらちょう	24202	249	旧 35° 02'	旧 136° 38' 09"	19990928 ～ 20010321	3,700㎡	平成11年 度四日市 多度線道 路整備事 業
山村遺跡	三重県四日市市山村町			新 35° 02' 11"	新 136° 37' 59"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山村遺跡	墳墓	弥生時代	方形周溝墓	細頸壺・広口壺・太頸壺		苑上遺跡の墓域 であろう		
	集落	奈良～平 安時代	竪穴住居・掘立柱建 物・土坑・溝	土師器杯・甕・須恵 器杯蓋・杯身・鉢・ 灰釉陶器・緑釉陶 器・製塩土器		官衙関連遺跡とみら れる		
	集落	鎌倉時代	土坑	陶器碗（山茶碗）				

三重県埋蔵文化財調査報告 244

山村遺跡(第2次)発掘調査報告

2004(平成16)年3月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行

印刷 共栄堂印刷株式会社
